587-81
1200700888947
587
81
複写

東京帝國大學圖書之印

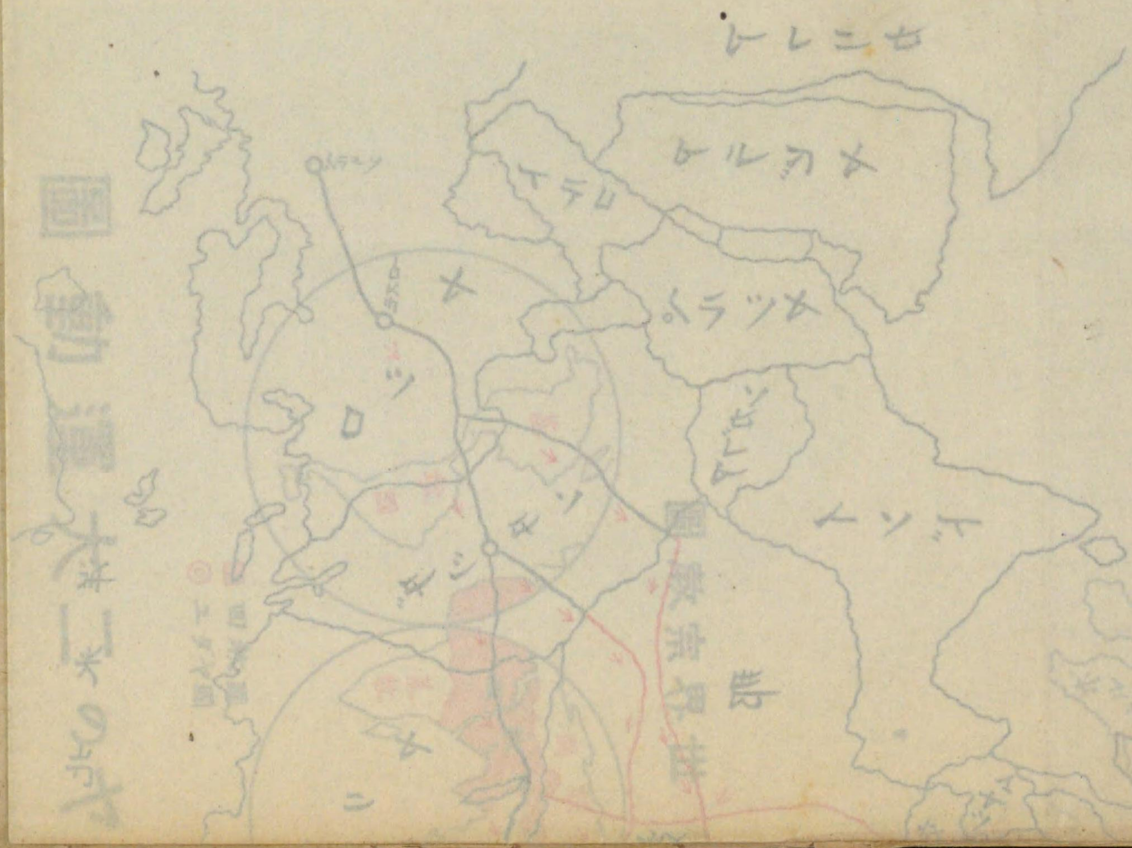
山岡光太郎著

アジアの二大運動

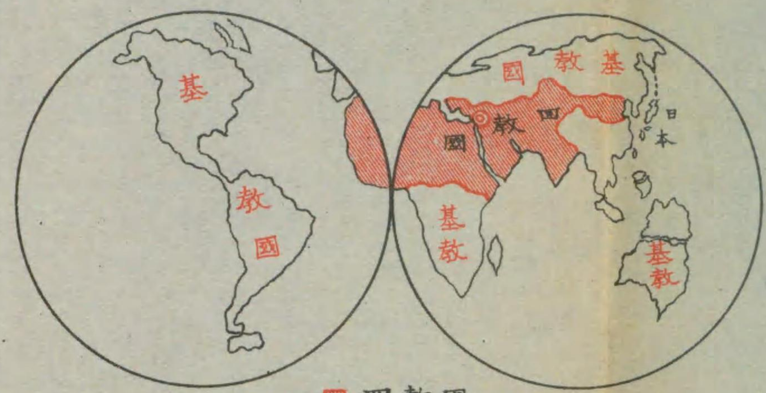
（回教徒とユダヤ人）

著者寄贈本

昭和三年一月 寄贈


ロシヤ
ドイツ
オーストリヤ
ハンガリー
ルーマニヤ
ブルガリヤ
セルビヤ
ロシヤ
ペテルスブルク
モスクワ
ポーランド
ワルシヤワ
ベルリン
ドレスデン
ケルン
ブリュッセル
ロンドン
ドーバー海峡
ドーバー
ハーグ
ロッテルダム
ハンブルク
ブレーメン
ヒンデンブルク
ケーニヒスベルク
ヴィルヘルムスハーフェン
ヴィルヘルムスハーフェン
ヴィルヘルムスハーフェン

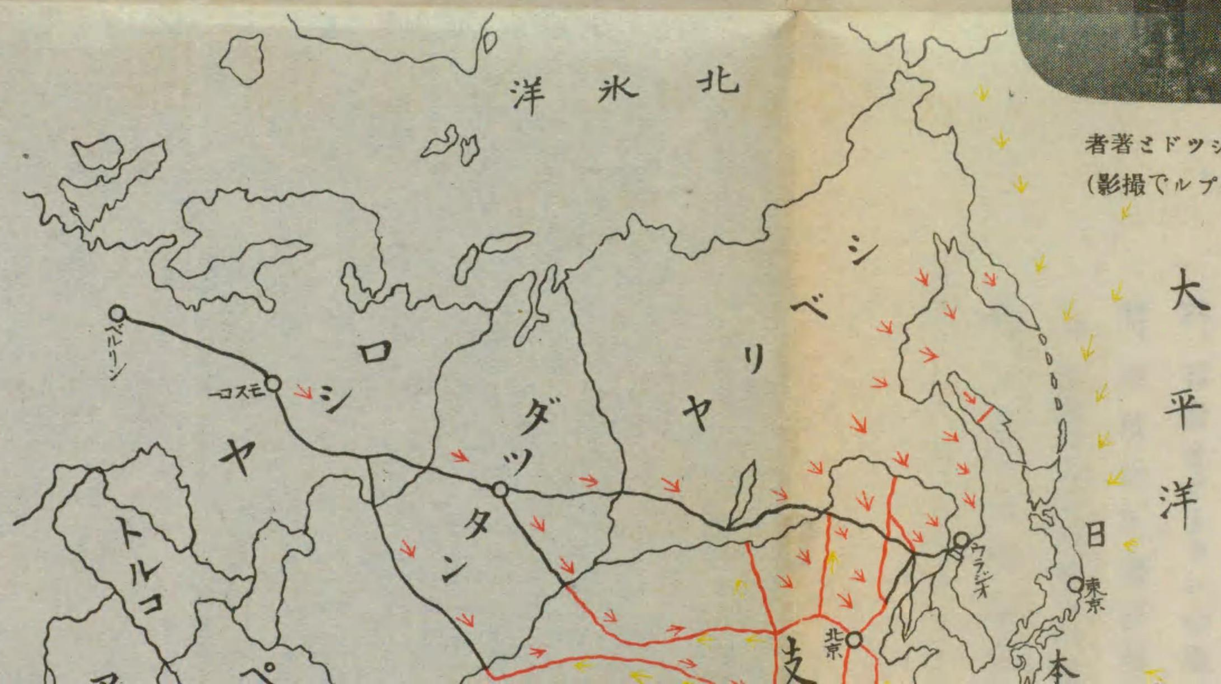
世界宗教圖



回教國
ユダヤ國

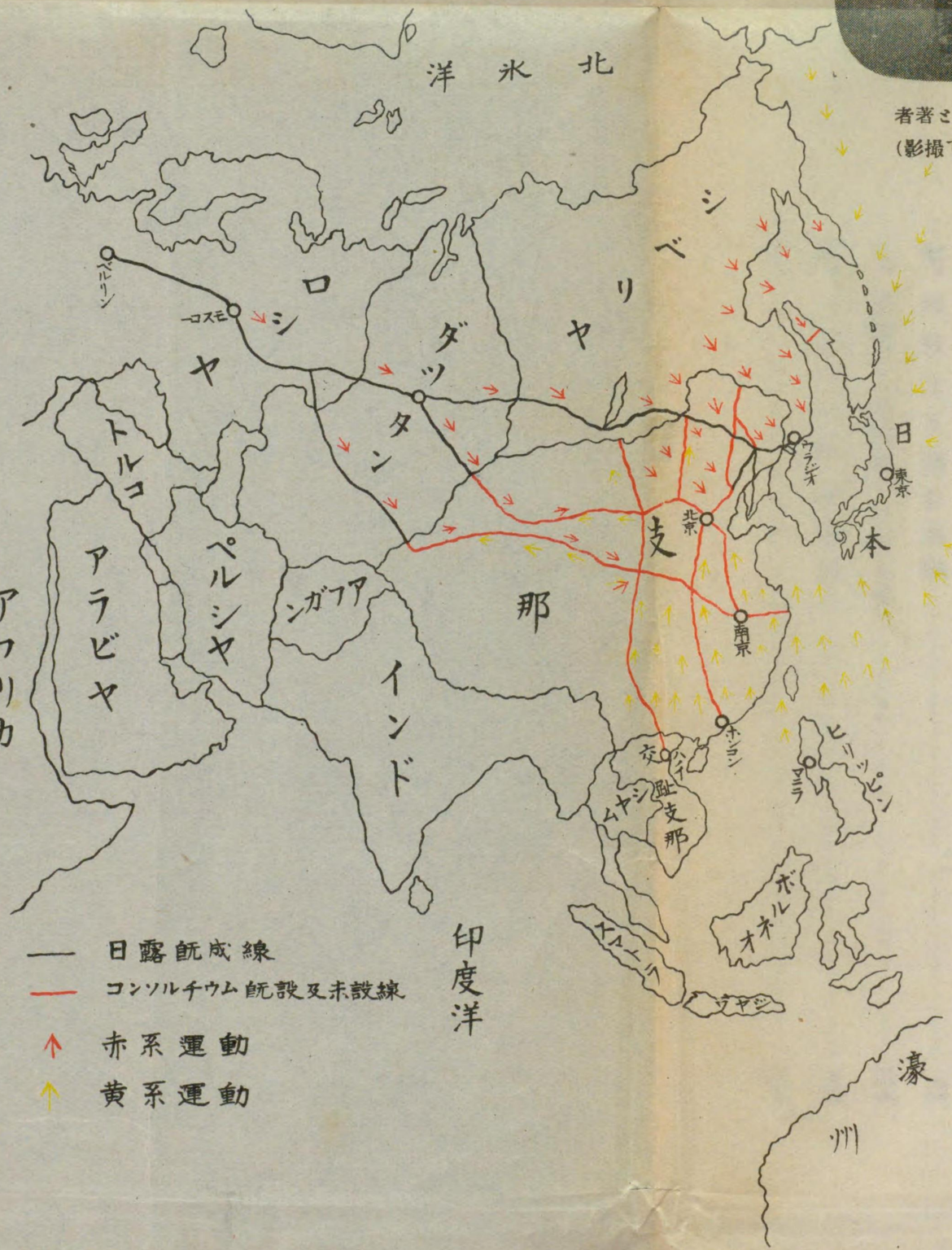
アジヤの二大運動圖

ダッタンの老志士アブドルラシツドと著者
(大正十三年コンスタンチノープルで撮影)



アジヤの二大運動圖

ダッタンの老志士アブドルラシツドと著者
（大正十三年コンスタンチノープルで撮影）



目次

前編　回教徒の部

一、國と人の見方……一
二、私の見たロシヤと支那とアメリカ……八
三、汎回教運動……二六
四、汎回教運動の二大派……四四
五、汎回教運動の分裂……五九
六、君府とテーランの現狀……七三
七、回教法王冊立運動……九四
八、帝政から共和政への露土支……一〇九
九、トルコの革命逸話……一六五
一〇、インターナショナル……二〇九

一一、ダッタン復興……二二六
一二、ダッタン回教國……二二三
一三、支那トルキスタン……二三三
一四、中央アジアダッタン回教國……二四一
一五、滿州回教徒……二五六
一六、結論……二六四

後編　ユダヤ人の部

一、ユダヤ人研究の動機……二八一
二、ロシヤのユダヤ人……二八八
三、キシネーフとキエフの虐殺……二九一
四、アフリカのユダヤ人……三〇九
五、佛國植民地のユダヤ人……三二一

587-81

序

私は過去二十有餘年を、回教徒とユダヤ人の研究に沒頭して來たが、私が此研究に汲頭せる最初に於て、之等兩教徒が國際政局上並に經濟上極めて偉大なる潜勢力を滿蒙否アジア否世界に於て有することを知つたので、宗教上よりも專ら政治經濟上、此兩教徒特に回教徒の研究に半生を費したわけであるが、今から考へて見ると、私は研究の本末を顚倒して居たことに氣がついたが、もはや今日となつては如何とも致し方がない。しかし終生を之等兩教徒の研究に捧げた以上、斃れて後其研究を止めるのみである。

苟くも宗教に生れて、偉大なる政治を光被した之等兩教の研究は、先づ經典の研究から始めなければならなかつた。政教一致とは言ふものゝ、本は宗教であり、末は政治である兩教の研究を政治から始めたのでは、研究の本末を顚倒した譏は免れぬ。

實は私は去る明治四十二年、メッカ巡禮を試みた時に、他の回教留學生同樣、メッ

カ、メヂナ、ダマスカ、エルサレム、カイロ、コンスタチノープルの諸聖都に止まつて經典の研究を試み、兩教のドグマに精進しやうかとも思つたのであるが、何分日本出發當時同志と諒解を得て置かなかつたのと、メッカ巡禮の聞きしに優る壯烈の勤行であつたのと、國際政局上一日も之れを等閑に附すべきでないのと、豫期せざる熱狂的歡迎を巡禮教徒から蒙つたので、其榮光を一日も早く祖國の同志に分ちて、祖國百年の長計に寄與せんと欲し、倉皇歸朝したので、此くは本末顚倒の研究を初めたやうなわけである。

次に明治四十五年から大正九年にかけた世界巡遊中も、カイロ、カイラワン、トレムセン、フエツス等の北アフリカの聖地で、同樣經典及び法典の研究に耽ける機會はあつたが、間もなくカーセージで歐洲大戰に際會したので、大戰の火元であるバルカンに急行し、それから大戰中の歐米を遍歷して歸朝したので、終に亦經典研究の機會を失つたやうな次第である。

しかるに大正十二年から昭和二年にかけて、三たびカロイ及びコンスタンチノープルの聖都を訪ふた時、今度こそは愈々研究を達成しやうと、カイロに一年、コンスタンチノープルに三年半滯在したが、歐洲大戰の結果、回教徒もユダヤ人も共に思想上非常なる變化を來たし、本文記載の通り、彼等自ら分解運動を起し、私も彼等の政爭の渦中に卷き込まれて、研究は愚ろかのこと反て經典の研究に沒頭するの故を以て、私が汎回教運動者であり、帝政派であるとの理由で、革命黨である共和派から睨まれ、監禁、投獄、追放等の憂目を見たやうな次第で、亦も充分に研究の目的を達せざる內に、茲に急ぎ本書を刊行し、兩教徒を以て、早くも警世の資料とせねばならぬ時機に逢着したのは、私の甚だ遺憾とする所である。

しかし日本人として私ほど、諸國回教徒及びユダヤ人と直接交渉を持續して來たものは他に何人も有るまいといふ矜持を以て書いたのであるから、本書が回教徒及びユダヤ人を知らんと欲するものに、より多き智識を提供したことを信じて疑はぬものである、ただ拙著回々教の神秘的威力の卷頭の一節に「勿論本書は其全部を說明盡したものではない。近く三たび著者は回教國探撿を行ひ、之れが完成を期する積りである」

と書いて置きながら、大方士君子の待望に背けることは、私の頗る汗顔に堪へない次第であるが、私も未だ全く老ひたるわけでもなく、或は又四たび外遊を試むる機會があるかも知れないが、最早非常に難解である經典の研究に沒頭しても、其研究資料を發表する機會があるや否やは明言出來ないから、茲に本書を以て其責の一端を塞ぐことゝした。

終りに現滿鐵副社長松岡洋右氏は、在朝と在野とを問はず、亦私の毀譽褒貶に一切頓着なく、前後數年間、私の研究に絶大の後援を惜しまなかつたにもかゝわらず、充分同氏の輿望に副ふことが出來なかつたことを茲に氏の迷惑を顧みず附記して、深甚の謝意を表して置く。

昭和三年十月

曠古の御大典紀念として　著者識るす

アジアの二大運動

(回教徒とユダヤ人)

山岡光太郎著

前編　回教徒の部

一、國と人の見方

物は見やうで圓くも見へれば、角にも見へるといふが、全く其通りである。人を見ても又其通りで、圓滿に見へる人が、案外角張つて居るのもあれば、角張つた人に見へるのが案外圓滿の人もある。一國を見ても又其通りで、富强に見へる國が、案外貧弱であり、貧弱であるやうに見へて案外富强な國がある。

だから物にせよ、人にせよ、國にせよ、他人の言つたことなり見たことを、スグ否

定することも出來なければ肯定することも出來ない、要は内外表裏を兩耳兩眼で、好く聞き好く見て、是非を判斷するのが一番確實である。例へば自分が見て善いと思ふ物や人や國でも、他人が見て惡るいと思ふ物や人や國が澤山ある。殊に自他共に感情に囚はれて居る時などは、其判斷は何れも正詰を失つて、後で自分で自分の愚劣を笑ふやうなことは珍づらしくない。

一言にして云へば、自分が見る主觀的の場合と、他人が見る客觀的の場合とでは、事々物々相違するもので、人と國とを見る場合に於ても、同じく相違を免れない。だから餘程愼重に、物なり、人なり、國なりを觀察しないとトンダ見當違ひをして、笑ひ事ではすまなくなつて小にしては一身一家を、大にしては一國を亡ぼすに至ることは、人類史五千年の興亡治亂の跡を見ても、それと知り得る史實が多い。

之れが實例を擧げて見れば、昔の人は、地球は扁平の不動體だと思ふて居るが、近代の人は、何人も地球は隋圓の動體だと信じて居る、しかし學者は、地球を三角と見て、天體と交渉する方が、都合が好いと思つて居るやうなものである。

亦人にしてもさうだ、老人は、吾人中老や、青年を見ると、バタ臭いイヤらしい人間だと見て居やうが、中老や青年から老人を見ると頑冥度し難い化石だ位に見て居る。又中老から青年を見るとナマイキな奴位に見て居るが、青年から中老を見ると、頭が硬いと見て居る。何れも自分の見る所と他人の見る所とは、大に相違して居る。何となれば、何れの老人も、自分は頑冥不靈度し難いと思ふて居るものは、誰れも居ない老人の言ふことに間違ひはないと信じて居る。中老もさうである、自分の頭腦は硬化して居ると思ふものもなければ、自分はバタ臭いと思つて居るものは誰れも居ない。何れも皆國家の中堅位には思ふて居る。青年にしても又さうであらう、自分はバタ臭い、ナマイキな、イヤらしいモガなりモボだと思ふて居るものは誰れも居まい、何れも現代日本を負擔する新人だと思ふて居やう。

又國家にしてもさうであらう。日清戰爭までの日本は、支那は大國であり、富强の國であると思ふて居た、之れに反して支那は、日本を小國であり、貧弱であると思ふて居たが、イザ開戰となると何方も案外で、大富强國と思つた支那が大弱劣國であつ

て、小貧弱國と思つた日本が、豫想以外の富强であつたりしたなどは、猾稽を過ぎて今日は彼我國運の消長に非常なる相違を來すやうになつた。

又日露戰爭までの日本は、ロシヤは大國であり、富强の國であると思ふて居た。之れに反してロシヤは、日本を吹けば飛ぶ位の小國に思つて居たことは、クロパトキン將軍が、日本を視察して歸國してから後でさへも、自分のかぶつて居る帽子を、床の上に投げつけて、開戰したら日本は此の通り、朝食前に降參させる位に大言したことは、今尙ほ赤系露人が、白系露人を揶揄する好題材にして居る位であるが、事實は雲泥の相違で、彼我共に豫想以外の强弱をはきちがへて居たものである。

だから物なり、人なり、國なりは、表裏から、縱橫から、前後から、上下から、內外から、自分が見もし聞きもし又人が、さういふ風に見もし聞きもしたことを、能く判斷しても、神ならぬ身の人間である以上は、尙ほも誤算は免れぬものであるから、物なり、人なり、國なりは充分綿密に觀察することが第一である。今我が日本は、內は人口問題から發生する國體の危機に當面して居る一方、外は人種問題から發生する國防の危機に當面して、眞に內外多事で、國步艱難の秋である。若し內外の觀察を一步過まると、露支の轍を履まないとも限らないから、能く物なり、人なり、國なりを正視して判斷を過まらないやうにしないと、覆水盆にかへらないことになる、故に國體國防問題だけは、政黨政派を超越して、深く上下共に同心協力して撿討せねばならぬと思ふ。

私は侯大隈さんには、生前新聞紙の宣傳が先入主となりて、餘り太して敬意を表さなかつたが、唯だ一つ大隈さんが生前中放言せられた百千萬語中、私が敬服して一生忘るゝことの出來ない一大放言がある。

それはこふである。世に支那通とか稱せらるゝ人が澤山居る。彼等は支那の何に通じて居るのだか吾人には少しも判らないが、支那に永く在留したとかで、支那通といふらしいのである。單に永く支那に在留したといふので、支那通といふのなら、何も格段に某々數人を限りて、支那通といふのは當ら無い話である。天草島原邊のモガで、支那人のモボと、夫婦となつて五十年、終に支那で、客死した天草モガなどは、支那

通の第一人者であらう、之れ大隈さんが、ロンドンタイムスの北京特派通信員であつたモリソン氏に一大痛棒を加へたわけであらう。

今は故人となつたモリソン氏が、白人中の支那通として自他共に認められ、支那人を知ることに於て第一人者であつたことは、歐米一般にも知れ渡つて居た位である。其モリソン氏が、支那を敗つた日本に來て、時の宰相であつた大隈重信閣下に敬意を表し、旁々北京の外交團を指導した風に、大隈閣下をも指導するつもりで訪問したところが、大隈さんは、會見劈頭、モリソン氏に向ひ、「貴下は何年ほど支那に御在留になりますか？」と質問したところが、モリソン氏は意氣揚々と「モー彼是三十年にもなりますよ」と其三十年に力を入れて、大隈さんを敬服せしめるつもりであつたらうと思はれたが、之れを聞くなり、大隈さんは、呵々大笑して、「たつた三十年ですか、それじや未だ支那がおわかりに成らぬのも無理はありませんよ、日本などはモー二千五百年も支那と交際して居ますが、未だ支那及び支那人がわからないので困まつて居る始末ですからな」とやつて、大隈さん一流のアハ、、、で、モリソン氏を烟にまいてしまつたので、さすがのモリソン氏も、二の句がつげず、赤面して逃げ歸つてから急に日本が嫌ひになつて、歸へりがけの駄賃に、舊安奉線の輕便鐵道を、世界一の危險鐵道などと、惡口を世界に吹きちらして、大隈さんの大法螺に復讐をやつたりした逸話がある。

實際大隈さんの言はれた通り、日本は二千五百年來、支那との交渉が絶へないのも事實なれば、今以て支那及び支那人がわからないで、擧國支那及び支那人のために、少からず頭をなやまして居るのも事實である。又モリソン氏が六十年の生涯中、其半生を支那に送つたからには、支那の一地すらも知らない歐米人から見れば、支那通として、モリソン氏を其第一人者に推奬するのも尤もな話であるが、何れを尤もの話とすれば、遺憾ながらモリソン氏より大隈さんの言はれた方が、より尤であることは、事實の雄辯なるには敵せぬであらう。

古來二千五百年間、日本人の幾億萬人が、總がかりで、支那及び支那人を知らうと思ふても、未だに支那及支那人が、能くわからないとある位であるから、彼我一國の

事情を知ることが、何如に難事であるかは、此一事能く之れを證するに足るであらう。

己下章を改め、日本の國體と國防とに尤も關係の深い諸國と日本との觀察を概略書いて見やう。

二、私の見たロシヤと支那とアメリカ

私は去る明治三十七年以來、露支兩國に出入し、同三十九年には昌圖軍政署の長官であつた大原武慶氏と共に、鄉里の學生二十五名ばかりを昌圖で敎育し、軍政署撤退後此等學生中五名を滿州と蒙古に止め他は鄉里へ歸還せしめて、自分は朝鮮と支那とロシヤとの國境方面に行つて國事に奔走し、明治四十二年アラビヤ旅行を終はつてから、再び北滿方面で活動し、同四十四年武漢の革命勃發と同時に中支に奔り、爾來今日に至るまで、ロシヤと同じく、支那及支那人と間接直接交渉を絶たないのであるが、去る明治三十七年から同四十一年に至るまでに、私は私の見た支那なり、ロシヤと、外人の見た露支なり、露支人の見た露支なりとは、相互に非常の相違があることを發見した。即ち自分が日本服を着て、日本食をたべて、日本の家に住んで、日本語を話して、露支を見て居た時と、更に又自分が、露支の服を着て、露支の食物をたべて、露支の家に住んで、露支の兩語を話しながら、露支の兩國を見て居た時とでは、大變の相違であることを發見した。

それは恰度日本の衣食住、言語、宗敎で、日本を見るのと、朝鮮、臺灣、琉球、アイヌ、水平社の言語、風俗、習慣、宗敎で、日本を見るのと大變の相違であることを今更の如くに發見したわけである。

換言すれば、統治者の見る日本なり、支那なり、ロシヤなりと、被統治者の見る日本なり、支那なり、ロシヤなりとは、大變の相違であることを悟つたわけである。即ち一國内の多數民族と、少數民族の見る所では、各々其見方に太した相違のあるわけである。

それもさうである、統治者の地位にある多數民族なり、小數民族なりは、自分の統治する祖國を一切美化せんと努めるけれども、被治者たる多數なり、少數民族は努めて之れを惡化せんと欲するものである。

一國の同胞間にしてもさうである。政友會が爲政者の地位に在る時は、自分が爲政の局に當る間の日本を美化し、そして美化の宣傳をするが、民政黨や社會民衆黨や勞農黨や、革新やは極めて日本を惡化し、之れを惡宣傳せんと努めるやうなものである之れに反して政友が野に下り、民政其他が爲政の局に當れる場合も之れと同じである

だから政友の朝野に在る兩地位で、其見る所を異にすると同じく、民政其他も朝野に在るとで、其見る所の日本皮日本人に大なる相違があるものである。

極言すれば、唯り國家ばかりでなく、一家にしても其通りである、父の見る自分の家と、母の見る自分の家と、兄弟姉妹の見る自分の家とにさへ相違のあるものである世間廣い父から自分の家を見れば、見すぼらしく見へても、近所近邊から見れば大きい家であれば、世間狹まい母や子供の目からは立派に見へもしやう。

又個人にしてもさうだ、自分は不運にして、不幸のものであると見て居ても、世間では氣樂な、結構の身分だと思つて居るものが多いと同じである。自分では貧乏だと思つて居ても、世間では案外富者だと思つて居る例も少くない。一身一家一國皆此くの通りで、其眞相は容易に捕捉し難いものである。

如上の次第にて、自分の生れて、成長した、自分の家なり、自分の國でさへもが、他人と自分の見るとでは大に相違するのであるから、朝鮮や、臺灣なりは、日本の領土と言ひながら、自他の見方によりて、尙ほ一層太した相違のあるのも當然である、況んや自分の領土でもないロシヤや支那が、自他共に見る所と全く異にして居るのも尙更ら當然であらう。

雨降つて地固まるとか言ひ、人は喧嘩して見ねば、お互に眞價が分らぬと言ふが、日清、日露の兩大戰で、お互に眞價は分つても、自他共に其見る所では日本も、ロシヤも、支那も、大に相違して居るのである。まして戰爭したこともない國の事情など能く分らう筈がないわけだ。

私も、日本が露支兩國と戰爭して、初めて露支の眞價を知つた一人であるが、それでも既記の通り日本の衣食住で、露支を見るのと、露支の衣食住で、露支を見るのとでは、大變の相違であることを知つた。私はロシヤの多くの捕虜を取り扱ひ、更に自ら

露領に行つて全くロシヤ人と同じ食住をしたり、又支那人と戰爭して見たり、喧嘩して見たり、又支那人と全く同一の衣食住を試みて、支那人と成りすまして見たりしても、未だホントの露支人を見るやうに、見分けがつかないものであることは、如何に朝鮮人や、臺灣人や、露支人や、其他の外人が、日本の衣食住をして日本を見たからとて、小泉八雲や、キモノの著者の範圍を出でないと同じである。到底日本人と同じやうに、日本がわかるものでない。しかし全く日本の衣食住や、言語で、外國を見るのと、外人の衣食住、言語、宗教で、外人を見るのとでは前者の見るところよりは、後者の見る所の方が、眞に近いことは勿論である。

私は露支兩國の言語、風俗、習慣を眞似て、明治三十七年から同四十一年まで、朝鮮、滿州、蒙古、シベリヤを東奔西走して、露支人や、其捕虜までに接して居る內に私としては一大發見をしたことは、支那に在りては漢、滿、蒙、回、藏の五大民族が、同じ支那の衣食住をやりながら犬猿も啻ならない間柄にあることを知ると同時に、ロシヤの捕虜中にも、同じ露軍の兵員でありながら、內心は犬猿も啻ならないことを知つて、私は思はず雀躍して喜んだものである。

そして支那の五大民族中の回族と、ロシヤのダッタン族とは、全く宗教、言語、風俗、習慣を同ふする同一種族であつて、何れも支那や　ロシヤの帝政に反抗しつゝ、トルコのスルタンや。アラビヤのシエリフや、ハリフ（シエリフもハリフも回教法王の意）を崇敬し、之れに臣從して居ることを發見し、そして其數が支那に於て三千萬、ロシヤに於て五千萬、計八千萬人あることを知つて、私は雀躍から吃驚へと變じ、終に眞面目に此八千萬の大衆を徹底的に研究することに依りて、滿蒙は勿論我が國體と國防は、完全に安定せしむることを得るとまで思ひ込んでしまつたものである。

之れ私が日本人として最初のアラビヤのメッカ巡禮を試み、更に此巡禮に依りて發見したる地上一千五百萬人の虐げられたる民族たるユダヤ人の研究を、人知れず進めつゝ、自ら前者の大衆政治運動である汎イスラム中の人と爲り後者の政治經濟運動であるザイオニズムを實地踏査しつゝ前後二十有餘年の歲月を費したやうな次第である。

回教徒の汎イスラム運動を、吾人は汎回教運動と稱し、ユダヤ人のザイオニズムを

汎共濟運動と譯して居る。

汎回教運動とは、一語にして言へば、回教の教祖マホメットが、右に劍を提げ、左に經典コーランを捧げ、回教の弘通に努力した其遺訓を體現して、政教上の世界的地歩を占めんとするものである。

ユダヤのザイオニズムとは、ユダヤ人を中堅として、世界に於て經濟的優越の地歩を占め、然る後政治上にも優越の地歩を占めユダヤ國家を建設せんと欲するもので、之れをシオン運動ともいふ。

前者は先づ宗教の弘通を先決問題とし、次いで政治的優越の地歩を占めんとし、後者は經濟的地歩を占むるを以て先決問題とし、次いで政治的優越の地歩を占めん欲するもので、將來其政治的優越の地歩を占めんと欲するのは、共に同じである。

そして之等の二大運動は、全くアジア人の創意に成れる有色民族中の大運動で、彼の白色民族の政治經濟運動である汎アングロサクソンや、汎チウトンや、汎ラテンや汎スラブの運動よりも、一層鞏固なる團結であり、熱狂的な大衆運動でもある。又彼の汎トウランとか、汎アルタイとか、汎アジアとかといふやうな大言壯語の出來ない相談とはわけがちがふのである。

私は能く他人に言ふことであるが、日本が朝鮮や、臺灣や、琉球や、關東州などを統治しながら、汎アジア運動でもあるまいじやないか、汎アジア運動とは、アジア人の獨立自由を確保するために、相互に聯盟して、日本や、朝鮮や、臺灣や、支郡や、ヒリツピンや、アンナンや、カンボチヤや、シヤムや、ラオスや、インドや、マレイやアフガンや、ペルシヤや、ブハラや、ヒバや、トルコや、アラビヤやといふ風に、一擧に、或は漸進的に白人の羈絆を脱して、獨立自由の旗幟を飜へさんがために、アジア人種が、相互に結束し、扶助し、誘掖して、目的を達しやうといふ運動に外ならない。故に此運動に日本が加盟するなら、先づ日本が朝鮮や、臺灣や、琉球や、關東州の獨立自由を認容してからの話である。之等の獨立自由を認容しないで居て、アメリカや、イギリスや、フランスや、オランダや、ロシヤやの領土である前記アジア諸國の獨立自由を與へよと、日本が絶叫する位、無智で、猾稽、で禹劣なるものはあるまい。

だから逆に朝鮮や臺灣を解放しろとか、先づ二十一個條を撤廢しろとか、不平等條約を改訂しろ、それから日本の誠意を認めるなどと、支那のモボから、つき込まれてギャフンと參り、白晝世界に大きな恥をさらすなどは、之れ皆日本の衣食住で、世界を見る半可通から起る大なる錯誤である。

然らばヒリッピンとか、インドとか、アフガンとか、ダッダンとか、ペルシャとかアラビヤとか、南洋諸島とが、此運動に共鳴して、日本を盟主と推戴するは、之れ如何にとつき込む氣のはやい連中もあるかも知れないが、朝鮮や、臺灣や、琉球や、關東州やの人間が、日本から武器や、獨立運動費をもらつて、獨立しやうと考へて居る虫の好い馬鹿ものは何んぼ朝鮮や臺灣でも、居ないだらうじやないか、彼等は日本以外の列國のものずきから、銃なり、錢なりを手に入れてから、獨立運動をやらうと考へて居るものばかりであらう。日本の勢力範圍を離れた遠方に居る汎アジア運動の連中も、鮮臺琉球人等の考と太して相違はあるまい。自分等を統治して居る列强から錢や銃をもらつて、獨立運動をやらうなどと、考へて居るヘマの人間は、幾くら半開の人間だからとて、彼等の間にはなさゝうである。何れは日本や、其他自分等を統治しない列强中、銃や錢を出しさうな列强に泣きすがつたり、共鳴したり、虚言を吐いたり駄法螺なりを吹いて、銃と錢をせしめやうと考へて居ることは、張や、蔣や、馮やの一味徒黨と變はりはあるまいだらうじやないか。

凡そ言語風俗習慣宗教を全然同ふして高度の文化線上に在る汎サクソンや、汎ラテンや、汎ジェルマンや、汎スラブやの運動ですら、其政治經濟運動の統一は、なかなかむづかしいのである。しかるに之等白人種よりも文化の低い、半開の程度に在る汎回教運動と、白人と同一の智識程度に在る汎共濟運動とが、前者は過去に於て、後者は現在に於て成功したのは、一に人種的反感と、宗教的敵意の熱狂的運動に由來したからである。他の白色及び有色運動には、到底之れだけの熱がないのである。其熱がない理由は、汎回教運動や、汎共濟運動ほどの敵慨心と眞劍味がないからである。

見よサラセン史即ち中古史の全ページを。全史を碧血に彩れるものは、十字軍と回教軍の復讐又復讐の史實ではないか、十字軍敗れて、歐洲は回教軍の鐵蹄に蹂躙され

たではないか、今日ビレニース山南の地に今尙ほサラセンの遺裔を見、ボスニヤ、ヘルゼゴビナ、マジャールの中歐にさへ、回教徒の密集して居るのを見る時、如何に當年サラセン人が勇躍したかを想像し得るではないか。

飜てゼルマン族勃興以後の近代を見よ。如何に今日のサラセンが、白人の桎梏に泣きつゝあるかは、白人に戰勝てる日本を盟主として、空疎なるアジア聯盟の名すらに憧憬し、溺れて藁をつかむが如くに、蝟集し來るに見ても、其復讐と憤恨が、熱狂的な眞劍味を帶びて居ることを窺ひ知り得るではないか。

汎共濟運動にしても然りである。紀元二千年ソロモンの榮華が、槿花一朝の夢と化して以來、今日まで、如何にユダヤ人が、基回兩教徒の虐殺に泣ひたであらうか、彼等萬斛の涕涙は、流れて血河となり、溜まりて血泉となれることは、ユダヤ史の全頁を翻くものゝ、到底涙なくしては、讀むに堪へないではないか。之れを帝國主義的色彩の濃厚なる汎サクソンや、汎ゼルマンや、汎ラテンや、汎スラヴや、又猾稽にして不眞示面なる汎アジア運動と比して、何れが眞劍味を帶びて居るかは問ふまでもあるまい。

驕るもの久しからず、耐ふるもの空しからず、榮拈盛衰は走馬燈の如しである。最後の勝利は眞示目なるものゝみが占有する特權である。吾人は一脉相通ずる有色民族の二大運動に對して、理解をもたねばならぬ何等かのミッレオンがありはしまいか。之れを過去に徵し、現在に見て、將來に計らねばならぬ大策があらうと思ふから、此二大運動の經緯を詳述して、我が國體と國防の危機を救はんと欲するものである。

終りに私は私の見たアメリカを蛇足ながら附記して置かねばならぬ。それは餘人はいざ知らず、私は將來日本の國體と國防の最大危機を孕むものは、日米關係と信じて居るからである。況んやユダヤ人の汎共濟運動は、專らアジアに於て行はれて居るが、其策源地はアメリカであるからでである。

日本は對支及び對露問題に就ては已に一たび解決して居ると言つても好いので、私個人から見た現在のロシヤや、支那は、各々其一國だけの力で、日本の國體と國防を動搖することは、不可能事だと信じて居る。こう言つては露支兩國人は、さぞかし怒るで

あらうが、露支聯合軍を以て、我が軍を脅威しても、もはや我が軍は毫も恐るゝに足らないであらう。何となれば支那やロシヤの最富强國であつた時代すらも、我れに打ち勝つことが出來なかつたとすれば、今日の如き彼れが最劣弱の時代であり、そして我れは最富强である時代では、彼我ます〳〵問題に成らぬではないか。

しかしアメリカは、露支兩國の最富强時代よりも尙ほ一層富强であり、そして最富强時代に有る我れよりも尙ほ富强であるので、到底我れが露支兩國に向つて宣戰布告した當時に比すべくもないほどの段違ひであるからだ。ただ我れが彼れに優るものありとせば、我が六千萬同胞の一致團結のみであるが、之れすらも露支兩國と開戰當時のやうな一致團結を今日求むることは、非常の困難であると思ふ。何となれば已に思想的に當時と今日とでは、非常の變化を生じ、$と聞いただけで垂涎三千丈の支那人や、ユダヤ人風の日本人が、非常に多くなつて居るので、上下を擧げて、露支開戰當時のやうな緊張味を欠ひて居ることは、濟南事變當時に見ても分らうじやないか、若し之れが露支開戰當時のやうな緊張味であつたら、今頃は國論非常に沸騰して、太平洋上暗雲低迷しつゝあるであらうが、今日は同胞の幾十人が殆んど筆紙に盡し難ひ侮辱を蒙りながら、南軍の背後にアメリカありと聞いて、忽ち後方に瞠若となりて、擧國羨へ切らざる態度を取るに見ても、如何に國民の大多數が、$に垂涎三千丈たるかを窺知し得るではないか。戰はずして已に敵に氣を呑まれて居るやうな形ではないか。だから我が弱腰を見て取つた後のアメリカの傍若然人振りは、恰かも成金の横暴振りそのまゝで、吾人より見れば嘔吐三千丈である。

私は去る大正四年の歳晩にニウヨルクをチヨイト覗き、その後大正九年にサンフランシスコを、チヨト覗いたばかりで、アメリカを知ることに於ては、到底露支兩國を知るやうに詳細には知らないので、汽車や船からアメリカを覗いた程度であるが、アメリカのユダヤ人に就ては、後篇に記載せる如く、多少研究して居たのと、私は南中米で五年暮らして居る内、同方面でアメリカ人と常に交渉を絶たなかつたので、多少アメリカ及びアメリカ人を知つて居るつもりである。故に此基礎の上に立つて見た私のアメリカ觀は、勿論妥當を欠くであらうが、アメリカの總體觀に就ては、多少の自信を

有して居る。私の見た近世アメリカは、一語「勞働成金」と呼ぶ外はない。そしてアメリカが何うしてこんな富强に成つたのかと言へば、之れも亦一語「天地人の和」を得たと言ふ外はない。世界何處へ行つても、アメリカのやうな風土氣候に惠まれ、アメリカのやうな頭手足の揃つた人間が居れば、當然富强と成るに相違はない。

アメリカは全土を擧げて、鐵と石炭と麥と綿との人生最大必需品に惠まれて居る。こんな豊土は世界に全くない、アメリカの特權である。しかも此國土に棲息する人間は、頭手足共に世界の最優等人種である。即ち頭はアングロサクソンであり、手はチウトンであり、足はラテンであると言つた風に、世界の優等民族が、頭となり、手となり、足となつて働いて居る。即ち頭がイギリス人で、兩手がドイツ人で、兩足がフランス人や、イタリヤ人であると言つた風である。しかもこうした人間が、汗みどろに成つて、現代科學を經典として、一生懸命に働いて居るのだから、富强になるのが當然だ。尤もアメリカだとて、こんな人間ばかりじやない。歐洲諸國の移民も居れば日本人も居れば、支那人も居る、本書の主人公である回教徒も居れば、ユダヤ人も居る。其他黑人や混血兒も澤山居る。しかし此國土の主人公は、前記のやうな優等人種であるから、之等アメリカの下男も同じやうな人間は、キリ〳〵舞ひして追ひ使はれて居るに過ざないだから問題にはならぬ。

このアメリカの主人公振つて居るアメリカ人をKKKと言つて、アメリカの正教徒から成り立つ政教團體で、イタリヤとかスペインとかのカトリック教徒さへも除外して居る、日本人や、回教徒や、ユダヤ人は勿論である。

このKKKをアメリカでは、ク、クックス、クランと言つて居る。しかしさすがのKKKも、歐洲大戰後は「銃」と「錢」の必要に迫られ、宗教的偏見を去りて、ユダヤ人の如き「聰明なる守錢奴」を歡迎すること、恰かも我が政黨が、乾新兵衛クンにすら叩頭九拜すると同じである。だから近來アメリカのユダヤ人が、世界到る處アメリカの名に於て威張り出したことは、我が乾クンや、武藤クン等が某々政黨の名に於て威張り出したのと、太した相違がないのである。委細は後篇に於て讀んでもらひたい。

しかしKKKも對外的に團結して居るが、對内的には、共和、民主の二大派に分れ

て内爭をくりかへして居ることは、茲に說くまでもあるまい。恰かも我が六千萬同胞は、對外的には一致國結するが、對內的には、政友と民政とに分れて、政爭に沒頭して居るが如きものである。故に私は此KKKが一致團結して、我が政友と民政との團結に當つて來る時は、日米關係は尤も緊張して間一髮を容れざる危機に瀕する時であらうと思ふ。其他在米の下男格に相當する人間がイクラ騷いでもモノには成らぬが、たゞユダヤ人が一生懸命に成つてさわぎ立てゝ、日米戰爭のスペキユレーシオンを行ひKKKが之れに雷同し、我が政友民政が、KKKと共にこのスペキユレーシオンの餌となる時は、終に日米が支那問題を口實として太平洋の爭覇戰を出現するに至るかも知れない、私はこのスペキユレーシオンから起る日米の誤解は、尤も日米戰の可能性に富むものと斷定して居る。之れ後篇に其引證を摘記したわけである。

實際世界は、あらゆる陰謀を以て、日米戰爭を實現せしむべく、計畫して居るとつ言ても過言でない。之れ支那問題と加州問題との懸案があるばかりでなく、歐洲大戰に於て、唯り日米兩國が漁夫の利を得たのだから、之れを今日吐き出させやうとする嫉妬心と、日米の銃と錢に對する帝國主義的反感と、米國の成金的嬌慢と、日本の戰勝慢とが、彼此杆格して、もはや一戰相交へざれば止まない形勢と成つて來て居るから何時相互の鬱憤が爆發するかわかつたものでない。

今若し不幸にして日米戰が實現したとして、勝敗を度外に置き、米國の戰時狀態を想像すれば、米國の共和黨とユダヤ人と、在米支那人以外は、餘り日米戰爭に氣乘りはすまい、そして萬一海戰でアメリカが負けたら、早速ヒリツピンを捨てゝ講和するであらう。何故なれば民主黨と米國の所謂下男等は一致して、此機會に乘じてアメリカの資本家を仆すべく革命をやるに相違ない。又黑人や、メキシコ人等も會稽の恥をそゝぐは此時とばかりで、此革命に參加するであらうからである。若しアメリカが勝つたら、日本は日本本土に立て籠つて臥薪嘗膽の外はあるまい、そしてアメリカが負けた以上の內亂が續發することは當然である。戰は一に海戰に依りて決定せられるが問題は一に相互の一騎打ちの場合に依りて、以上の解決を見るのであるが、若し其他英佛伊獨露の何れもが、嚴正中立を取らないて、一國でもアメリカに好意的中立を表

したり、加擔したりする場合には、此戰爭は日本に不利でなければならない。何となれば其時は、人種的偏見で白人種が、有色人種の勃興を欲しないために、アメリカを代表として、日本に宣戰したと同じだからである、幸にアメリカにも一國、日本にも一國といふ風に列國が加勢して參戰したら、第二の世界大戰を出現するであらう。

ただ私が最も憂慮に堪へないのは、世界が日本の皇室中心主義を信奉する白系に多く同情するか、或はアメリカの資本主義を信奉する黃系に多く同情するか、恐くは世界の赤系は、日本の皇室中心主義にも、アメリカの資本主義にも何れも同情はしまいが、日本の帝國主義よりも、アメリカの民主主義に同情することは事實である。ちやうど我が勞農黨が、民政黨と共同戰線を張つたやうに、或は馮玉祥が、蔣介石と聯盟したやうに、或はスターリンが、ケマルバシヤを助けたやうにである。このハンドキヤップだけは太平洋問題の計算に入れて置かぬと、非常の齟齬を生ずることを覺悟せねばならぬ。

三、汎回教運動

白人が勝手に想像して書いた書物を譯して、何も物知り顏する必要はない。汎回教運動とは、回教の教祖マホメットが、右手に劍、左手にコーラン經をさゝげて、今を去る一千三百四十六年前、アラビヤのメッカ及びメヂナを中心として、開始した運動であると思へば、それで好い。ペルシヤの誰れが初めたの、否トルコの誰れが初めたの、否アラブの誰れが唱へ初めたのと、閑人の詮索は、譯本にまかして置くのが好い。

汎回教運動は、積極的には勿論帝國主義である、消極的には、回教の傳道であることは赤十字や、白十字の傳道と何等相違はない。

しかし回教のみを以て、單に右に劍、左に經典の邪教と斷じ去るのは當らない。當年の白十字軍も、近世の赤十字軍も皆さうである。マホメットの傳教を以て、之れを異端視し、之れを淫詞邪教視して時のアラブの爲政家がマホメットに高壓を加へたから、彼は劍を拔いて傳教に從事したので、當年キリストを異端視し、キリスト教を淫詞邪教視したから、キリスト教徒は劍を拔いて、白十字軍を起し、砲を放ちて赤十字

軍を起したのであらうから、何も回教ばかりを、右に劍、左に經典と斷じ去るのは當らない。

私は嘗て拙著回々教の神秘的威力中に、此ふいふことを書いて置いた。

そも〳〵西歐民人は、アラビヤの文化は、一概に剱られたる劍戟の產物なるが如く速斷し、一にも劍、二にも劍と早合點して居るけれども、劍は國民の是認せる信仰を變じ得べしとするも、人心を收攬する能はざるは、史實の吾人に教ふる所である。百尺竿頭一歩を讓りてアラビヤの文化は、劍なりと論斷するも、よくアラビヤ語をして斯く多數のアジア及びアフリカ大陸の共通語たらしめたるに就きては、何等か深遠なる證據がなければならない。知るべし、當代に於けるパレスタイン、小アジア、エヂプト、カーセージ等の諸キリスト教國に於ける社會狀態たる暗殺、毒殺、破戒、盲目的處罰、暴動、反逆內亂等、あらゆる社會の不正事實は、一國風教の源泉たる當時のキリスト教界に於ける僧侶間に於て、さかんに演出せられ、其教長大僧正等の高位大官の輩に至るまで、自己の勢力圈の爭奪、官宦宮女の買收、賄賂公行等は更なり、甚しきに至りては、神の聲なりと稱し、醜劣なる陰謀手段を講じて軍隊及び僧侶を使嗾し立法權を蹂躙する等の大事すらも平然敢行して憚らざりしに非ずや、斯くして一教の尊嚴を保持して、人心を收攬せんと欲するは、樹に依りて魚を求むるの類なるべし、誰れか又良心の摩痺せる教派に信頼して、神聖なる信仰の自由を獲得せんと欲する者があらうか。

果して世は亂麻の如く亂れた。當時各キリスト教國に於けるアリアン、ネストリアン、ユームチアン、モーゼライテス及びマリオラトリス等の諸宗教は、殆んど墮落の深底に沈淪し、何れも統一なき言語を以て、相互に陷穽、中傷、讒誣を恣にし、到る處キリスト教國の政府は、之等墮落と悖德の極に有りたる僧侶等のために攪亂せられて、無政府の狀態に陷り、內亂に次ぐに內亂を以てするの時、恰かも「神は唯一なりマホメットは、神の宣道者なり」てふ恐るべき軍歌を奏しつゝ、經典を左手に捧げ、劍を右手に提げ、疾風迅雷の勢を以て、强襲し來れる回教軍に對して何如で、能く之れに對抗し得べきぞ、況んや一度び、「神は唯一なり、マホメットは神の宣道者なり」

と、宣言するものあらば、昨の敵と雖も、四海兄弟の如く之れを遇し、たとへ之れを宣言せざるものと雖も、武器を放擲して、敵意なきを表明せるものに對しては、秋毫も之れを犯さず、軍紀の嚴肅を以て敵地に臨み、草木と雖も、唯一眞神のために敎化し終らずんば止まぬといふ宗敎上の熱狂者に對し、如何で至上至高の神が、加護せぬで置かうか、果然東西一千里基敎徒の隻影を見ざるに至つたのも亦偶然ではない。

そも敎祖マホメットが、劍に依りて傳敎を試みたるは、徒らに異敎徒の劍に仆れんよりは、己れの劍を以て、先づ異敎徒を制し、然る後傳敎すべし、不幸己れの劍に依りて倒るゝも、神の道に於て倒るれば、殉敎の名を辱めず、むしろ先ずれば、人を制し、後るゝれば人の制する所と成るとの信念より、征服的傳敎を試みたのであるが、しかも尙ほ他に敎祖として、劍に依りて起たざるべからずと深く信じたる天啓があつたのである。そはユダヤ敎の敎祖モーゼとキリスト敎の敎祖キリストには、神は奇蹟を與へたれども、人之れを信ぜず、故に神我れに與ふるに神秘の威力を以てし給へり即ちキリストは、よく人の心中を洞破し、未來の事を豫知し、神に非ずんば、能はざる奇蹟を與へられたり。モーゼは深謀遠慮ありて、神の慈悲及び仁愛の德を表はせり又ソロモンは神の智惠と神の壯嚴とを體現したるが、之れ皆三者が傳敎のため神より賦與されたる一種の威力である。しかも尙ほ人各々絕對に彼等を信ぜず、故に神マホメットに與ふるに勇を以てし給へり、故に其威力餘り有りて何等傳敎的奇蹟を要せず即ち威力を以て、唯一神敎を弘通せんことは、最も神の道に於て相應せるものなり」との深き信念を抱いて居たのである。實に往昔回敎布敎の敎壇必ずや劍を按置して傳道に從へるに見ても、之れを認知することが出來る。

以上の記事で、回敎が右に劍左にコーランを棒げて、傳敎に從事した信念を窺はれるであらう。之れを白十字及赤十字が帝國主義を以て、劍銃を弄したのとは、大分相違があるではないか。

此くして弘通されたる汎回敎運動は、マホメット歿後、アブバカル及びオメルの第一及び第二の不世出の法王の續出に依り、マホメット傳敎後僅かに十二年にして、東はペルシャより、西は北アフリカのトリポリに至る間、約三萬六千の都市を攻略し、

四千のキリスト教寺院を破壞し、代ふるに一千四百の回教拜堂を建立し、領土の延長東西一千哩、信徒の數八千萬を數ふるに至つた其神速なる成功は、さすがマホメットを以て、邯鄲師と呼べる西歐史家ですらも、之等の事實に當面しては、一言もなく冑を脫がねばなるまい。

爾來回教は、キロスト教國に於て、朝に一城を拔き、夕に一砦を奪ひ、西暦七百十五年頃は、東は印度より西は西歐ピレニース半島を舐めて、今日のフランスまでも、其版圖に入れた史上有名なサラセン大法王國を現出するに至つたが、西暦一千四百年代、スペインに於けるコルドワ法王國の沒落とともに、サラセン史の斷末魔を告ぐるに至つた。しかし西に敗れた汎回教運動は、更に東に勃興し、同じく西暦一千四百五十三年五月二十九日コンスタンチノープルは陷落して、東ローマ帝國の沒落と共に回教のオットマン大帝國の出現を見るに至つた、そして西暦—千五百四十年代、トルコのスレイマン第二世法王時代には、其版圖は、東支那より、西は中歐の墺匈國にまで及んだのである。

しかし西暦一千六百九十九年トルコが、墺國と戰つて一敗してから、落日の如く衰亡に向ひ、今世紀に至りて瀕死の病人とまで、世界から取り扱はれて居たトルコが、ケマルパシャに依りて、戰勝の投藥が與へられ、革命の手術が施されてから、メキ〳〵と起死回生の効を奏し、又もや一大汎回教運動が實現せられはしまいかと、全歐を震撼させたが、列强もさるもの、再びサラセン大法王國や、オットマン大帝國の出現をオメ〳〵口を開けて見て居るやうな昔の東西ローマ人と同じやうな今日の白人ではない。チヤンと汎回教運動を阻止する百年の長計が、出來上つて居たのを見てさすがの私も千慮の一失であつたと感心してしまつた。

實に西暦五百六十九年五月十二日、アラビヤのメツカに、回教の教祖マホメットが呱々の聲を揚げてから、今世紀に至るまでの滔天の如き汎回教運動には、今昔を問はず、歐洲の列强は、不斷の脅威を蒙りて痛く惱まされ拔いたものである。否今日でも惱まされて居るのである。

遠くは西暦六百三十六年法王オメルのエルサレム攻略を初めとし、更に西暦一千九

十六年より、同一千二百九十一年に至る二百年間、八回に亘る神都エルサレム奪還の失敗より、既記の如くサラセン大法王國の出現に依りて、西ローマ帝國は完全に滅亡するに至り、更にオツトマン大帝國の出現に依りて、東ローマ帝國も亦完全に滅亡するに至つた其史實に徵しても、如何に汎回教運動が、歐洲の脅威であり、死活問題であるかが察知せられるではないか。

幸に十六世紀ゼルマン族の勃興以來、汎回教運動は、漸次歐洲より干潮の如くに退き、其運動は、南洋及び極東方面と、アフリカの中部に向つて退轉するに至つたが、汎回教運動の三大策源地とも言はるゝアラビヤのメツカと、トルコのコンスタンチノープルと、ペルシヤのテーランとが、依然として回教徒の手中に在る今日、歐洲としては晏如として枕を高くして安眠することは出來ないのである。何となれば此三大策源地から、法王オメルの如く、アルワリツドの如く、スレイマンの如く、チンギス汗の如く、タメルランの如く、ケマルバシヤの如き不出世の英傑が輩出して、汎回教運動を統宰するに至ると、此運動は、不思議にも極めて偉大なる威力を發輝するに至るからである。故に列强は此三大策源地から、回教の英傑が出でないことを望み、亦出でないやうにするがために有りと凡ゆる反間苦肉の策を講じつゝあるのである。

即ち此三大策源地及び其近接諸回教國に於ける回教徒とキリスト教徒や、ユダヤ教徒との反感を助成し、或は回教は其父系が、回教徒であれば、其母系が異教徒たると否とに拘はらず、其子は回教徒たるを以て、熾んに回教徒の混血化を行ひ、基教徒並にユダヤ人の婦人を、回教徒と結婚せしめ、或は其結婚を奬勵するのである。又之等異教徒の婦人も、各々其祖國とキリスト教國の平安と、再び回教のため征服せられざらんことを欲して、自ら進んで、回教徒の富有者と婚姻し、其禍根を絶たんと欲する健氣なる女丈夫などもありて、いつしか其征服せられたる地中海沿岸の回教國は殆んど混血化するに至り、隨て母系たるキリスト教徒やユダヤ教徒に對する復讐の念と、そして劍と經典とを以て、征服的汎回教運動を決行する念は、非常に乏しくなつて居ることは、今度ケマルバシヤの成功に於けるバシヤの態度に見ても、之れを首肯することが出來やう。之れ吾人が、不覺を取つた千慮の一失である。

何故アラビヤのメッカと、トルコのコンスタンチノープルと、ペルシャのテーランとが、汎回教運動の策源地かといふに、メッカはメッカ巡禮で名高い通り、世界三億の回教徒は、一生の内、一度は是非とも、メッカへ巡禮せねばならぬ教則があるので、年に一度、回教暦の九月斷食がすんでから、東西南北からメッカに來集して、回教一流の壯烈比類なき巡禮を行ふのである。其巡禮の模樣は拙著アラビヤ縱斷記と、回々教の神秘的威力に就て讀んでもらうとして、此等回教徒は、メッカに來て、初めて自分等の祖先が、知つて居た獨立自由の天地を自分も知るわけである。

之等巡禮回教徒の祖國は、何れも今日白人の屬國となつて居るので、我が朝鮮や臺灣のそれと同じである。世に回教を以て國教とする回教國なるものは、東は、アフガン、ペルシャ、イラク、トルコ、シリヤ、アラビヤ、ブハラ、アゼルバイジャン、から西はアルバニヤ、エヂプト、トリポリ、チユニス、アルゼリヤ、モロツコ等の十四ケ國であるが、此内完全なる獨立國は、トルコ、ペルシャ、アフガン、アルバニヤの四ケ國位のもので、之れとてもキャプチレーシオンなくして、對等條約を結んで居るものは、トルコ一國位のもである。其トルコすらもケマルバシャの戰勝以後、完全なる獨立自由を遂げたのであるが、それとても國旗と國土の完全なる獨立自由であつて、政治經濟上未だ全く獨立自由の天地とは言ひ難いことは、兵器財政等に就て列國の支持なくしては、國體と國防の安定を得ることができぬからである。此ふ言へば、新トルコ人は怒るかも知れないが、ケマルバシャの獨立戰爭でも、赤露から武器彈藥の援助を仰いだことが事實であり、現に今尙ほ仰がねば成らぬ國情に在ることは、完全なる兵器廠の存在がなくて、列國から其優秀なる武器を手に入れることに苦心して居るのでもわかる。飛行機などは、彩票まで發行して、フランスや、ドイツから買つて居る現狀である。回教國の覇王であり、盟主であるトルコですら此くの有樣であるから他の回教國の獨立自由などは、全然名實相副はぬものである。

其他昔時回教徒が征服した國土であり、退轉して回教を弘通して、今尙ほ回教徒が數百千萬も割據して居る支那、ヒリツピン、マレイ、ジヤワ、スマトラ、インド、ダゲスタン、バシキール、キルギース、カザン、クルイム、スーダン、セネガル、ソコ

ト、ケニヤ、ウガンダ、ザンヂバール、ボスニヤ、ヘルゼゴビナ、クリート、サイプラス、クルイム、オーマン、エルハサ、ハダラモートなどの、日本人には聞いたことも無い耳新しい新舊の二十數ヶ國を加へたら、回教國と稱するものは、現在でも約五十ヶ國に及ぶが、之等は何れも今日、英米佛露蘭葡の白人國に併合されて、植民地なる名稱の下に其先祖が高々と掲げて居た獨立自由の旗幟は、取り下ろされて、何れも皆醉生夢死の境地をたどつて居るが、彼等と雖も人である以上、其歴史と地理を尊重せぬ筈はない。彼等中の幾分でも、文字を知り、世界を知つたものは、其まゝ醉生夢死の境涯で一生を終はりたくないので、回教國中の文化の最も進んだトルコや、エヂプトや、ペルシヤや、アラビヤに出でて來て、更により多く文字を知り、更により多く世界を知り、中には更に進んで歐米の書物を讀み、進んで歐米に留學するものあるのは、御維新頃の日本や、現代の支那其他の文化の進んだ有色民族と變はりはない。

そして之等回教國の先覺が、以上列擧した約五十ヶ國から年々歳々來集する巡禮回教徒と共に、メッカに於て、何をするかは、豫め想像に難くはあるまい。實にメッカは、回教徒以外のものは、絶對不可侵の天地として居るもので、若し此聖地を侵すものあらば、直ちに回教徒から殺害されたものである。私が行つた明治四十二年頃も、巡禮中は勿論、平時と雖も絶對異教徒不可侵の聖地であつたが、歐洲大戰中、トルコの敗戰に依り、英軍に蹂躙せられた後は、最早異教徒絶對不可侵の土地でもなくなつたやうである。しかし現在は、回教徒中の清教徒と目されて居るアラビヤ中央沙漠のネヂッド一帶に割據するワハビ政團が、聖地が異教徒軍に依りて冒瀆されたるを非常に憤慨し、メッカの法王フサインを追放して、ネヂッドの領主であるスルタン、イブン、サウドを封じて　今メッカを占領して居るので、史上に記さるゝ聖地そのまゝの光景であらうと想像せらるゝ。

彼等回教徒の祖先の獨立自由も亦此くの如きものであつた。故に彼等回教徒は、メッカ巡禮に來集して初めて自分の獨立自由の天地を發見するのであるから、其巡禮の壯烈なることは到底筆舌につくし難いので、當年サラセン史をそのまゝ體現した縮圖とも見ることが出來るのである。故に列强がメッカ巡禮をいやがることは、其領土の回

教徒が、メッカ巡禮へ行くのを見てあらゆる手段方法を以て之れを阻止したり或は妨害して居ることは、私が世界の回教國に出入して居る際、實見したことである。

世に恐らくメッカ巡禮ほど秩序整然たる大衆運動は、何處にもあるまい、列强のいやがるのも無理もない。平時ですら其敵慨心と其熱狂さとは、他に類例を見ない大衆運動である。其參加人員は、多い年で五十萬以上に及ぶと言はれ、少ない年でも二十萬を下らないと言はれて居る。私が此大衆運動に參加した明治四十二年には、私の同行者は私に四五十萬ほどに吹聽して居たが、私は二十萬内外と見て居た、しかし二十萬でも容易ならぬ大衆である。戰時の兵員にして約十個師團に相當する。之等の大衆が、一人のリーダーなくして。秩序整然たる巡禮勤行を二三ヶ月に亘りて行ふといふことは、驚異にあらざれば不思議である。事實一人の憲兵も居なければ、巡査も居ない、勿論喧嘩口論するものもなければ、酒を飲んで亂行狼籍に及ぶものなどは、彼等の世界では斷じて見られない、唯だ嚴肅と熱狂と沈默とを以て、三ヶ月を終始するのである。私が日本を出發したのは、明治四十二年十月で、インドを經てアラビヤのメッカに到着したのが同年十二月十一日である、それから直ちにメッカ附近の聖地の巡禮を行ひ、翌明治四十三年正月四日メッカを出發し、アラビヤのヘヂアス沙漠を縱斷して、メッカ及びダマスカを巡禮して、聖地の巡禮を終つたのが同年三月である。それからコンスタンチノープルを經て、シベリヤ鐵道で、日本に歸つたのが六月である。から、前後巡禮に要した日數は八ヶ月に及んで居る。私は初度の巡禮であり、メッカ巡禮を鄕黨に標枋して出でかける眞の回教徒に比して、嚴肅と自省と信仰に於て大差のあるのは免れない、恐くは私は一生を終はるまで、巡禮回教徒ほどの熱狂的信仰に到達し得まいと思ふて居る。それは私の智識が、之等回教徒に比して進んで居る、惡るく言へばスレテ居る、だから現代科學を無視して居るコーラン經萬能論に、全然屈服することは、寧ろ己れを欺瞞するものであるとの念が、常に私の信仰の全的生涯に非常の妨害を與へる、むしろ私が無智であつたなら眞の回教徒たり得るであらうと悔んで見たり、悟つて見たりして居る。

しかるに洋の東西よりメッカに去來する巡禮回教徒は、何れも余と同じく數ヶ月を

費して其巡禮を行ふものであるが、其熱狂的信仰と、忍耐と敬虔とは、文字通り絶對で、到底余は一生之等巡禮回教徒の信仰と、忍耐と、敬虔とを知ることなくして終はるものと斷念して居る。

此くメッカを以て、現世に於ける三億回教徒の完全なる獨立自由の天地と心得て居る彼等が、メッカに於ける彼等特有の嚴肅と熱狂と巡禮勤行以外、何を彼等は慾求するのであらうか。試みに籠を出でて、自然の天地に放たれたる小鳥を見よ。先づ最初に何を唄ふであらうか、恐らくは籠の中では、どうしても喉元から出なかつた快音を一聲羽ばたきして出さねばすまないであらう。籠の鳥も同じ三億の回教徒もさうである、祖國を放たれてメッカまで飛び來りて、最初に放つ一聲は何んであらう、先づ獨立と叫び、自由と呼ぶのが、當然の彼等の快音であり、羽ばたきであらう。そして此快音と羽ばたきに共鳴するものは何んであらう、彼等回教徒の先輩であり　先覺であり智識階級である回教志士の舌端火を吐く底のアヂテートル振りであらう。

實にアヂテートルの一言能く征馬西せんとあるの慨あるものは、此メッカの巡禮教徒を措いて、他に何人があるであらう。メッカ及びメヂナに於ける聖地の巡禮中、回教徒は彼等特有の日夕五回の祈禱禮拜を尤も嚴肅に、尤も恭儉に、尤も熱烈に行ふ外は常に之等回教導師の激越なる說教を聽いてたのしむのを常とする。回教が他の宗教と著るしく異る所は、政教一致にある。

回教の經典コーランは、回教徒に取りては、神聖にして犯すべからざる千古不磨の金箇玉條である。コーランは實に彼等の生命であり、道德律である。經文の一字一句が、教徒のハートに浸透して、全身を血行し、悠々一千三百年回教徒の傳統精神を作り上げたものである。そして亦コーラン經は、回教徒及び回教國の政治、軍事、教育殖產、興業等を指導する嚴正なる法典である。此經典なくして彼等の政治はないのである。之れ回教國が特殊の法典の下に束縛せられ容易に泰西の文化を咀嚼する能はずして、經典に生きて經典に死せる現狀である。故に將來吾人の怖るべきものはコーラン經萬能論を唱ふる放鳥の如き回教徒に非ずして、コーラン經萬能論を否認し、コーラン經を以て、單に回教徒の道德律となし、現代科學に生きんとする新汎回教運動の

リーダーであり、アヂテートルであつて之等回教の新智識こそは、吾人が全幅の敬意と信頼を表するものである。

以上の説明に依り、讀者は、メッカが地上に於ける尤も大なる大衆運動である汎回教運動の策源地たるに、ふさわしことを想像せらるゝであらう。そして現在に於ても亦將來に於ても其策源地たるに於て變りはあるまいが、今や後章に示めす通り、舊汎回教運動は世界思潮に卷き込まれて、分解運動を起しつゝあることを否定するわけにはゆかない。

四、汎回教運動の二大派

トルコのコンスタンチノープル(己下君府と略す)が汎回教運動の第二策源地たることは、回教三億教徒の三分の二をむるスンニ派の本山であるからである。

回教も他の宗教と同じく、幾つもの宗派に分れて居る。之れを細別したら何百派あるか分らないと、回教徒自身でも、其多きに呆れて居る。しかし一般に認められて居るのは七十三派であるが、其内尤も大なるものは、此スンニ派と、ペルシャのシャー派である。故に凡ての回教徒は、此二派に分れて對抗して居る彼の如く見へる。何となれば、此兩派の信奉する教義はあだかも帝政派と共和派の如き觀があるからである。しかし基教の帝政派も、共和派も共に基教の大本山であるエルサレムに參詣し、教祖の墳塋を絶對に尊崇する如く、回教の帝政派であるシャー派も、共和派であるスンニ派も、メッカに參詣して、教祖の墳塋や「神の家(カアバ)」を絶對に尊崇することは同じである、之れメッカが、汎回教運動の第一策源地たるゆへんである。

しかしスンニ派は、ペルシャのテーランには巡禮を行はない、尤もスンニ派の回教學生は、コーランや回教法典シャリヤットの研究のため、テーランに留學するものは少くはない。之れさすがにシャー派の本山であるだけに、メッカやメヂナや、エヂプトのカイロや、君府の如く、回教の碩學鴻儒が多いから、學徒は極めて難解のコーランの眞髓を會得せんと欲して、以上の聖地を一年乃至二年位づつ回遊して研究するからである。尤もスンニハ派の學徒も、シャー派の學徒も何れも、斷じて兩派の教義に

は頑として服從しないから面白い。

スンニ派を何故共和派と言ひ、シャー派を何故帝政派といふかは、回教を知らんと欲するものゝ是非知つて置かねばならことである。

教祖マホメットは「神は唯だ一である、マホメットは神の道を傳へるものである」と説破した最初の其一語が、回教の犯すべからざる教義である。故に世界の凡ての人類にして「神は唯だ一つである、マホメットは、神の傳道者である」と宣言したものは、何人も回教徒である。之れ教祖が存生中其法統の繼承者に就て一語の及ぶべきものはなく、亦一語の遺言もなかつたわけである。若し教祖に遺言ありとすれば、そは神誥聖語であるコーランの外には何もなかつたのである。

教祖は其存生中、二十五歳にして、メッカの富豪カヂャの入夫として、二男三女を擧げたが、二男一女は夭折し、二女は成長せしも、一女は第三世法王オスマンに嫁したが、彼女も又間もなく病死した。殘れる一女は、第四世法王アリーに嫁し、三男二女を擧げたが、一男二女は夭折し、二男は成長した、之れ教祖の唯一の遺子であり、遺孫であるが、教祖生前は其に、死後の、法統に就て、一語の之等子女に及ぶ遺言をしなかつた。之れ即ち後年回教が、スンニ及びシャーなる二大派に分立する遠因であつた。

西暦六百三十二年六月八日。回暦十一年三月十三日、聖哲マホメット、溘焉として棺を蓋ふと同時に、回教徒は忽ち群羊の牧夫を失へる如くに迷ふた。彼等は拱手爲す所を知らなかつた。しかし誰れかマホメットに代りて、大衆を濟度するものがなければ、折角統一したアラビヤ全土は、亂麻の如く亂れ、回教は未だ花開かず、蕾の中にむしり取られるやうな悲雨慘風に逢はねばならぬ、之れは萬難を排して正さに彼岸に達せんとするまでに漕ぎつけた回教徒に取つて忍び難きものである。誰れかマホメットに代つて、當面の急務を打開するものがあらうか、打開せねばならぬ急務は何れも皆知つて居たが、さて己れ代つて教祖の法嗣として迷へる回教徒を駕御せんと名乘り出つるものがなかつた。此くして回教に征服されたる異教徒は、メッカ及びメヂナを中

心とし叛旗を飜へさんとする示威的運動を行ふに至つた。

マホメットの死歿當時、マホメットの傳敎に非常の功勞あつたものは、妻のカヂヤを初めとし第一世法王（ハリフ）アブバカル、第二世法王オメル、第三世法王オスマン、第四世アリーの五人であつた。

アブバカルは敎祖の義父であつた。アブバカルの娘アイシヤは、マホメットの妻カヂヤの死後、マホメットの正室となつたもので、マホメットが非常に愛して居たことは、マホメットが、臨終の際アイシヤの胸にもたれて、敢なく絕命したのでも知れやう、しかもアブバカル其人も、マホメットと同族の關係にあり、マホメット傳敎以來陰に陽にマホメットを庇護し、マホメット開敎の劈頭、回敎に歸依し、マホメット傳敎中は勿論、病中もマホメットに代りて傳敎に從事したもので、回敎徒もマホメット歿後は、當然マホメットに代りて、アラビヤの主權を掌握するは、此人を措ひて、他に何人もないと信じて居た。

果然マホメット歿するや、アブバカルは全回敎徒の輿望と推擧に依りて第一世法王となつたのである。

第二世オメルはアブバカルとは反對に、マホメット傳敎の當初は、マホメットを異端視し、一族の犧牲となつて、敎祖を刺さんと欲したるに、已にオメルの妹が回敎に歸依して、コーランを讀經しつゝあるを見て、己れも亦コーランを手にして、之れを讀經せしに忽ち其神秘の啓沃を蒙り、終に回敎に改宗して以來、尤も熱烈なる信仰者であり、殉敎者であつて、回敎が今日の廣汎なる領域を有するのは、回敎の獅子と稱され、回敎の那翁とも唱へられて居るオメルの鴻業が、其素地を造つたものであることは、何人も異論はないのである。

アブバカル法王は其臨終に際して、オメルに向つて曰く、

汝は直ちに征戰に從事せよ、猶豫する勿れ、我れ若し今死せば、汝は夕刻を待たずして赴援せよ、我れ若し夜中まゝ延命せば、汝曉を待たずして出發せよ、我が死を悲んで、神の任務を怠る勿れ。

と言ひ終りて、莞爾として永眠したに見ても、オメルは當然アブバカルの遺業を繼ぐ

べき第二世法王であつたのである。

第三世法王オスマンは、前者の如くマホメットと何等姻戚の關係はないが、教祖唯一の秘書で、コーラン經の執筆者である。教祖は眼に一丁字なく、單に前後六年、メッカ郊外に在るヒラ山上の巖窟に遁世して、神秘の啓沃に接して以來、朝に夕に教祖の口をつひて出でたる神語聖語を一卷に收めて、之れをオスマンの筆に依りて修飾したるものがコーランの原典である。其後コーランが、各所に散逸し、原典と多少相違のコーラン經が續出するに及んだので、之れが統一の大事業を完成して、千載の下に今日のコーラン經を傳へたる其功績や、前二者の傳教と相讓らぬものがあるので、法王オメルの遺言なかりしも、終に當時オメルの身邊にありし回教長老の互選に依りて第三世法王たるに至つたのである。

何故にオメルも亦教祖に倣ひて、其法嗣を遺言しなかつたかは、オメルの身邊に在りし長老の何れもが、鈍栗の背くらべで、法嗣を讓るには、餘りに周圍の事情が彼れに不滿足であつたからであらう、それはオスマンの次に法統を嗣ひだ第四世法王アリーが、第四世法王アリーが、其謎を凡て解決して居る。

第四世法王アリーは、オスマン法王が、メヂナの拜殿に近き法王廳の閨房で、暴徒のために暗殺されてから、再び長老の互選に依りて、第四世法王となつた。

さすがにオメルは一世の英傑であつた。人を見る明も非凡であつた、到底自分やアバブカルの如く、威望と德望とを以て、アラビヤの衆生を濟度する法嗣は、己れの身邊に之れなしと見て、法統について何等の遺言をせなかつた。果然オスマンは、コーラン經の唯一編纂者である大功を史上に錄しながら、威望足らずして、法統を嗣げる後、秕政續出し在位十年、八十三年の高齡を以て、非期の最後を遂ぐるに至つた。オスマン暗殺の非常手段に出でたる教徒の背後には、第四世法王アリーが、策動して居たことは、公知の事實である。

實にアリーは、今尙ほシャー派の回教徒から第一世法王と仰がれて居るほど、其法統に就ては、何人も異論なき教祖の直系卑族である。教祖にして凡人であつたなら、當然アリーは、第一世法王であつたであらう。何となれば、教祖唯一の遺子フワチマ

を、アリーに娶はしたものは、教祖其人であつた。教祖が法統を嗣がせるつもりでアリーに娶はしたか、それとも單にアリーが自分の愛兒の如く可愛くて、自分の娘をやつたかは、教祖の遺言の有無が、明かに之れを説明して居る。教祖は後者の意味で、アリーにフワチマを娶はしたことは、教祖の唯一の甥として、教祖傳教以前よりアリーを一方ならず愛し、アリーも亦教祖の恩愛になづき、教祖のために犬馬の勞を奉じたことに於て、教祖身邊の第一人者であることは、回教史が吾人に教ふる所である。しかし愛著と信望とは、自分の生める愛兒ですらも相違がある。

邦語にも、親馬鹿、子畜生といふことがある、子は畜生のやうなものでも、親の恩愛は、少しも變はりはない、否馬鹿の子ほど可愛いといふではないか。しかし可愛からとて、親は馬鹿の子に家督をつがせぬ、赤の他人を養子までして父祖傳來の家名をつがせようとする、それが名門とか、富豪とかに於て尚更然りである。若し其次男があつて長男より悧巧なら尚更次男に家督を譲るのが親の人情である。三男四男五男亦然り、女子に於ても亦さうである。之れがために親が豫期しなかつたお家騒動が、モチ

上るのは何處も同じ世相である。

アリーは、勿論馬鹿ではなかつた。否大に悧巧であつた、しかし第一世法王アバブカルや、第二世法王オメルや、第三世法王オスマンの如き長老を駕御して、法統を辱めない傑物とは、マホメットも思つて居なかつたらう、事實は雄辯にアリーの最後がオスマンの如く非期のクーデーターに終つたことが、之れを證明して居るではないか

又アリー自身も、アブバカルや、オメルを凌ひで、法統を嗣がうなどの野心は全然なかつたやうである。がオスマンが互選に依りて法統をついだことは、アリーも面白く思つて居なかつたことは、オスマン暗殺の首謀者は、アリーであるとして、時人から目され、アリーも亦教壇に刺されたに見ても、之れを推知することが出來る。殊に其オスマン暗殺の煽動者が、アリーの妻女にして、教祖唯一の遺子であるフワチマ其人であるといふに至つては、吾人を一層然りと信ぜしむるに充分であらう。

實に汝の名は女であることをフワチマに於ても、充分に證據立てる。しかし此處に「汝の名は女である」は、西洋流の「弱者よ、汝の名は女である」でなくて、東洋流

の「女子と小人とは、何とやら」を思はせる「汝の名は女である」。

フワチマは、其身のほども知らず、第一世法王アブバカルの法統をつげる際にも、大に不平の色を表はし、王領の幾部分を強請したほどのしたゝかものである。更にオメルの法統をつげる場合にも、頗る難題をもちかけてアブバカルの遺言に依る征戰すらも、夫アリーをして參加せしめず、晏如として其女王振りを發輝した位であるからオスマンの法統をつげる際は、柳眉をさか立てゝ、其不法をなじつたのも無理はない。

若しフワチマにして、女性でなく男性であつたら、勿論此場合自ら法統をついだであらう。亦家族主義の旺盛なるアラビヤに於て、フワチマが男性であつたら、教祖も何等かの遺言はあつたであらう。族姓を尊び、遺產を重んずべきは、經典コーランに於ても明示してあるので、當然フワチマは第一世法王をついだであらう。之れシャー派が、頑としてアブバカル、オメル、オスマンの三法王を否認する最大理由である。しかし回教は、女をいたはり、女を愛し、女を扶養すべき義務を教徒に強ふる代りに女に對して男子に服從すべき義務を強ひて居る。之れ東洋流の男尊女卑である。西人は男女同權に非ざれば、女尊男卑を男子に強ふるのは、父の愛を知らずして聖母マリヤの愛のみを知れるキリストの女尊男卑の觀念に出發して居る。

マホメットも亦キリストの如く、父の愛を全く知らず、生後間もなく父歿し、後六年母の鞠育を受けて、母の恩愛を知り、母死して祖父に育ぐまれたるものである。故に頑是なきマホメットは、父母の溺愛を知らずして、祖父の偏愛に生長したるものであるが、斷じて女尊男卑を許るさない。何處までも東洋流の三從を女子に強ゆるが、日本ほどに女子を輕侮しない。凡ての婦女子に對して平等愛を要求して居る。

フワチマが女性であり、アリーが養子であつたがために、フワチマも第一第二世法王を他人に讓つたのであることは勿論である。それはアブバカルとオメルの聲望に比し、己れと其夫アリーの聲望が、餘りにかけはなれて不足して居たからである。しかるに第三世法王オスマンに比して、アリーは決して遜色なき回教の功勞者である。況んや教祖の直系たるに於ておやといふ自信が、フワチマにも、アリーにもあつたが、終にオスマンに法王を讓つたのは、ただオスマンが、アリーに比し年長者であるとい

ふ以外に、讓るべき何ものもなかつた。

されぱオスマンの法王をつげる後は、アリー夫婦はあらゆる陰謀を講じて、之れを排擊せんと企て、終にオスマンの失政に乘じ、其目的を達するに至つたが、不幸アリー亦復讐せられて、茲に回教は世襲傳統のを基をひらくと共に、教祖の直系であるメッカのハシム家と、教祖の傍系であるオミヤード家の兩派に分れて、其法統の爭奪に血を以て血を洗ふ同胞戰を開始するに至り、其尤も劇烈なる血戰を、メソポタミヤのケルバラに於て開戰し、西曆六百八十年十月十日、回曆六十一年一月十日より、同月二十日に至る十日間に亘りて、日夜肉彈戰を試み、一門の肝腦を擧げて、此一戰に盡したかの觀があつた。後年シャー派は此ケルバラ戰を追悼するため、十日祭を行ひ今尙ほペルシャに於ては、年中行事中の最大祭日として、年々歲々に行はれ、其殉教戰に擬せる熱狂的祭禮は、氣の弱い者などは、見物に堪へないほどの悲壯なる勤行を見せるので、回教國では、非常に有名の祭式となつて居る。

以上の理由で、シャー派では、アリーを以て回教法王の第一世と稱し今尙ほ頑として之れを主張し、斷じてアブバカル、オメル、オスマン三人者の法王を認めぬのである。しかるにトルコのスンニ派は、アリーの第一世法王を認めず、之れを第四世とし第一世はアブバカルを、第二世はオメルを、第三世はオスマンを法王と認め、今尙ほ之れを主張し、斷じてシャー派に屈せぬのである。

之れ吾人が、教祖の血統を重んずるシャー派を回教の帝政派に擬し、教祖の血統よりもコーランを重んずるスンニ派を以て、共和派となすゆへんであるが、此精神は終に今日に及んで、トルコが共和國となり、ペルシャが依然國王の退位後、布衣の現王リザカンすらも大統領たるを欲せずして、之れを帝王に奉戴する現ペルシャ國民議會の意圖に徵しても知るべきである。

即ち君府がスンニ派に屬する二億萬回教徒の汎回教運動の策源地であり、ペルシャのテーラン府が、シャー派の屬する一億萬回教徒の汎回教運動策源地であることを、讀者も諒解せられたであらう。

しかして此兩派とも、左記の五大教則を信奉することに於ては何等變りはない。

一、神は唯一であり、マホメットは神の傳道者である。
二、禮拜祈禱。但しスンニ派は日夕五回にして、シャー派は三回である。
三、斷食。回教曆第九月の一ヶ月三十日を通じて、晝間日出より日沒まで、水一滴は勿論、煙草一服だも喫まず斷食を行ふこと、但し日沒後は隨意に飲食を取るのである。
四、巡禮。斷食後に行ふメッカ巡禮をいふ。
五、喜捨。回教徒は自發的に、年收四十分の一を慈善公共事業に喜捨すること。

以上は兩派を通じて行ふ汎回教運動の炳たるドグマである。

從來スンニ派は帝國主義的即積極的汎回教運動に成功し、一たびはサラセン大法王國を建設し、二たびオットマン大帝國を建設したが、シャー派は、寧ろ退轉的傳教即消極的汎回教運動に成功し、中央アジア、インド及び南洋に其勢力を擴張するに至つた故に白人の尤も怖るゝ汎回教運動は、シャー派の退轉的傳教に非ずして、スンニ派の帝國主義的汎回教運動にあるのである。

實にスンニ派の汎回教運動が、歐洲の死活問題であることは前記の如くサラセン史及びオットマン史が示す通りである。故に此運動を徹底的に壞滅するに非ざれば、歐洲は到底安眠出來ないと、白人は皆さう思ふて居る。しからば如何にせば此運動を壞滅し得るかの問題については、白人も十數世紀の久しきに亘りて、手を變へ、品を替へて、之れを根絶し、壞滅する手段方法を講じたが皆失敗に終はつてしまつた。唯だ一つ回教國の混血化には、稍成功したらしかつたが、未だ徹底的には、効を奏さなかつた。

しかるに歐洲大戰は、終に汎回教運動を分解して、全世界の回教徒を三分するに至つた。そして汎回教運動の三大策源地を徹底的に破壞するに至つた。之れ歐洲に取りて大なる成功である。已下左に汎回教運動の分裂狀態から現狀に至るまでを說明し、進んで汎回教運動の將來を研究して、讀者の高敎を仰ぎたいと思ふ。

五、汎回教運動の分裂

コーラン經萬能の大旆を樹てゝ、上下一千三百年、不可思議の威力を發輝して、天

下に覇業を成し遂げた汎回教運動も、滿つれば欠くる世の習ひで、ゼルマン族の勃興以來、日に月に衰運に向ひ、恰かも大厦のくつがへらんとするや一木の能く支ふる所にあらずと言つた風に、歐洲大戰まではもちこたへが、終に大戰に會つて、もろくも汎回教運動は最後の大團圓を告ぐるに至つたのは、吾人に取りては感慨無量なるものがある。

どうして汎回教道動は成功して、どうして倒れたかは極めて容易に答へ得る問題である。

汎回教運動が成功したのは、基教の墮落に乘じ、コーラン經萬能の大旆をかざして熱狂的團結を以て精進したからである。我が大和魂が最後の五分間に不可思議の威力を發輝して、未だ曾て敗戰の汚辱を蒙らないのと同じである。我が大和魂は、皇室中心主義をかざして、國旗と國土のために精進したから、曾て敗戰の汚辱を蒙らなかつたのである。しかも近代の科學を能く咀嚼して、敵の腦力にも劣らなかつたからである。

しかるに汎回教運動は、コーラン萬能論ばかり唱へて近代の科學を咀嚼することを忘れた、否咀嚼することを否認した、だから戰に勝つても、頭腦でゼルマン族に負けたわけである。例へば相撲と同じやうなもので、單に糞力ばかりでは、敵に勝てない、やはり頭腦が働かねば勝てぬのである。

汎回教運動も基教徒たる敵がバイブル萬能論を唱へて居る間はよかつたが、已にバイブル萬能論を捨てゝ、現代科學に生きんと努めてから、回教徒は、基教徒のために手足で勝つても頭で復讐せらるゝ型と成り、終にサラセンとオツトマンの兩時代に、基教徒に復讐したと同じやうに近世紀に於て完全に基教徒とユダヤ教徒とのために復讐された形となつたわけである。

之れ世界の人類は最初舊約に救はれ、次いで舊約亡びて新約に救はれ、新約墮落してコーランに救はれ、コーラン墮落して科學に救はれたのが現代である。

故に若し回教徒が、回教の最盛時であつたサラセンのアルワリッド朝や、オツトマンのスレイマン朝のやうに能く基教の長を取りて回教の短所を補い、現代科學を咀嚼

したらば今日のやうな悲慘な狀態にはあるまい、恐らくは依然として世界政敎の一大權威であつたであらう。

ゼルマン族勃興以前は、回敎徒は「神は唯一である、マホメットは神の傳道者である」と叫んで熱狂的に邁進した。之れに反して基敎徒は「神は博愛仁慈である、キリストは神の子である」と祈りつゝ君子危きに近よるべからずと言つた風に、退却して行つたので、ちやうど經典と經典とのいはゆる神聖戰爭であつたから終に當時墮落し切つて居た白十字軍は、汎回敎運動のために征服されたやうなわけだが、ゼルマン族勃興以後基敎徒は墮落の底から反省し來り白十字軍に代ふるに赤十字軍を以てし、恰かも回敎の勃興せる當時の如き潑溂たる鋭氣を以て、獅子奮迅の勢氣を以て勃興し來れるのみならず、回敎及び白十字の如く、單に勝敗を以て神意に歸する神聖戰爭を以て滿足せず、極力經典以外に立ちて、新戰術と、新兵器を以て、千年變らざる右に劍、左に經典を信條とせる汎回敎運動を粉碎するに至つたのは當然である。

之れは唯り汎回敎運動や、十字軍ばかりでなく、日本及び其他の東洋諸國の近代戰でも幾多之れに類する例も少くない。

我が明治維新に際し佐幕黨が勤王黨に敗れたのもそれである。あくまでも其固有の戰術と兵器とを以て、勝敗を決せんと欲せる佐幕黨は、恰かも汎回敎運動のそれの如くである。そして新戰術新兵器を以て、之れに對抗せんと欲せる勤王黨は、恰かもゼルマン族の如きものである。

亦日清戰爭に於て青龍刀までかつぎ出した支那は、汎回敎運動のそれの如く、我が國特有の武器たる弓矢すらも顧みず、新鋭の武器と新戰術を以て奮起した日本はゼルマン族のそれの如くである。

日露戰爭もさうである。ロシヤは恰かも汎回敎運動を行へる當時のトルコの如く、日本はトルコに最後の止めを刺した新興ブルガリヤのそれの如くである。

尙ほ最近其面白い對照は、アラビヤ半島や、小アジア地方に於て汎回敎運動の興廢せる史實や白十字軍が廢退し、赤十字軍が勃興せる史實を想像し得る劇的縮圖を、實際に見ることが出來ることである。今其縮圖を抄寫して見やう。

アラビヤの中央沙漠で、住民の棲息する一大オーシスが在る。其地方をネジットと言ひ、彼の獰猛無比のアラビヤ蕃族であり、回教の清教徒と稱せらるゝワハビ政團の根據地がそれである。俗にアラビヤ馬といふ名馬は、皆此地方から產出するのである。

ワハビ政團は、此かる蕃族の天地に在りながら、今尙ほ原始的回教徒そのまゝで、文字通りコーラン經萬能論者である。彼等の眼中にはコーラン以外何ものもない。

近來純眞な回教國と稱する國でも、全然泰西の文化をしりぞけ、コーラン經のみを以て、政治を行ふ所はない、何れも多少は歐米の文化を取り入れて居るが、ワハビ政團は斷じて歐米の文化を少しだも取り入れないばかりでなく、其風俗、習慣、言語、宗教等はコーラン經そのまゝを體現して居るのである。しかも彼等は回教の清教徒たることを標枋するために、酒や、珈琲や、茶や、砂糖や、煙草やの日用品から金銀類や、寶石類や、絹布類の奢侈品に至るまで一切をしりぞけ、日夕几帳面に五回の祈禱禮拜を行ひ、單に回教曆九月の斷食ばかりでなく、コーランに認めある斷食勤行を遺憾なく實踐躬行し、必ずメッカ巡禮を行ひ、コーラン經明示する所の喜捨救恤を實行して、清眞の回教徒たらんことをつとむるの狀は、見て居ても涙ぐましいばかりの清教徒で、眞に回教のピューリタンに背かぬといふべきである。

故に若し此清教徒が、右手に劍を提げ、左手に經典をかざして死物ぐるひの武者振ひをした場合に、敵が若し此清教徒と同一の武裝と腦力であつたら、必ず敵は負けることにきまつて居る。之れサラセンと、オットマンの回教徒に、白十字軍が敗けた理由である。しかし如何に清眞の教徒だからとて、近世の武器もなく、戰術も知らないで右手に劍、左手にコーランをかざして、獅子奮迅の勢で突進しても、敵がワハビ以上の精巧の武器を有し、ワハビ以上の頭腦を有して、新戰術を應用して、ワハビを迎へ擊つたなら、如何にワハビが、天の大神！我れを助け給へと絕叫したからとて、戰つて勝つ見込のないことは、日本であつたら小中學生でも知つて居るが、「神は清眞にして精進なるものに必ず勝利を與へ給ふ」と、確信せる彼等は、今尙ほ斷じて歐米の文化を取り入れないで、清眞と精進に、全生命を捧げて居るほどの憐れむべき頑迷不靈の教徒であるが、回教としては得難き清教徒である。

今から百年前、ワハビ政團は、メッカの法王廳の墮落せるを憤慨し、突如としてメッカを襲擊し、クーデーターを斷行し、自らメッカを主宰したが、エヂプット現王フアッドの始祖、マホメッド、アリーが、トルコから軍資と軍費を仰ひで、征討に向つたところが、ワハビは一たまりもなく敗れてしまつて、再びネジッドの高原に敗退してから其後百年ばかり、擡頭しなかつたが、メッカの法王フサインが英軍と共に歐洲大戰に參加し、聖地を異教軍のために蹂躙させたのを見て、大に憤慨して蹶起したものである。しかしエヂプト軍にすら敗れたワハビが、英軍に當るなどはそれこそ螳螂の斧を以て龍車に向ふと同じなので、さすがのワハビも切齒扼腕したが、聖地を汚がした英軍よりも、英軍の走狗となつて、聖地を汚がさしたフサイン法王に對し、時機を見て復讐せんと欲し、歐洲大戰後、しきりに其機會を窺つて居たワハビは去る大正十二年、私がエヂプトに居た其頃から、ネヂッドの根據地を出で、大駱駝軍を編成して、比較的ネヂッドから近きフサインの第二子アブドラが、歐洲大戰後、英國から封ぜられて居たトランスジョルダニヤのアマンを攻擊したが、其獅子奮迅の攻擊振りにかゝわらず僅かに英軍の二臺の飛行機と二臺のタンクとに、逆襲せられ、全滅又全滅したので、さすがのワハビも、生れて初めて見た此等天地の怪物には、敵すべくも非ずして、遠く沙漠の奥地に退却するを常とした。しかし一度はアマン近くまで押しよせ、アブドラ王初めアマンの住民も退却し初めたが、此時などは、此二臺の飛行機と、二臺のタンクで、五千のワハビが射殺せられワハビも切齒して終に退却を餘儀なくしたさうである。實に其勇敢なることは、他に多く比類ない位であるから若しアマンに此タンクと此飛行機がなかりたら、當然トランスジオルダニヤは、ワハビに占領せられたであらう。

果然ワハビは、メッカの守り薄く、飛行機もなければタンクもないのを偵知しアマンの大損害を顧みず最近奮然メッカの强襲を行ひ、非常なる肉彈戰を以て、終に再びメッカを占領し、法王フサインを逐ふて、メッカを主宰するに至り、今尙ほワハビのスルタン、イブンサウドは、豪然としてメッカに君臨し、教祖マホメットの覇業を恢興せんと、頻りに畫策して居るやうであるが、之れは英國がトランスジョルダニヤの

委任統治をやつて居るので、ワハビの執拗なる復興をうるさがつたのと、メッカの法王フサインが、歐洲大戰後、英國との密約を履行せんことを頗る强硬に要求し、且つ協商側が、アラビヤ半島で成功したのは、自分のお庇であるとして、非常に驕慢となつたがために、ちやうど日本が故張作霖にいや氣がさしたやうに、英國もフサインにいや氣がさしたので、內政不干涉を標枋してフサインを助けなかつたがために、ムザ〳〵ワハビのために、敎祖以來連綿たる法統を斷絕せられ、己れは昨日に變はる不遇の亡命客として、地中海のサイプラス島に逃避して終に同島に於て、昭和二年に不歸の客となつてしまつた。

因にフサインの長子エミール、フエイサルは、之れも英國の委任統治たる小アジアのイラクに君臨して、何等の不自由なき王者振りをやつて居る。之等フサインの二子が、多く惠まれた運命にあるにかゝわらず、フサインは雄圖空しく、メッカに於ける汎回敎運動の最後のリーダーとして、はかない最後を遂げたのは、同情に値する。

殊に私は、去る明治四十二年から、四十三年にかけたアラビヤ巡禮の際、敎徒不可侵の天地に突進するのであるから、再び生還を思はなかつた所が、全く豫期に反してメッカを擧げて、私を歡迎して吳れたばかりでなく、右フサイン法王に賜謁の榮を浴したばかりでなく、陪食まで仰せつけられて一生の面目を施した私としては、殊に感慨無量なるものがある。

當時私の同行者であつたダッタンの老志士イブラヒムは、私と共に陪食仰せつけられ、フサインの質問に對して日本の美點と長所を詳かに話して、君民同治の範を世界に垂れて居ることを述べ、國民を擧げて忠君愛國の念にもゆることは、他に其比ぶべき邦土のないことを諄々と告げ、最後に汎回敎運動のリーダーとして、日本を仰ぐことが刻下の急務であることを力說したところが、さすがは歐洲にも行つたことがある日露戰爭で、日本の大勝利も知り、其由て來れる源因も新聞雜誌書籍で、承知して居り、特に當時汎回敎運動者の最大敵國と目して居たロシヤが、今自分の面前に控へて居る私といふ日本人から敗られて、汎回敎運動者の復讐を充分に討つて吳れたと思ひ込んで居るフサイン法王の事であるから、終に老眼から感激の涙をこぼして、眞に嬉

れし泣きをして、私を欺待して呉れたので、私も亦一生忘るゝことの出來ない深い印象を腦裏にきざみつけ、爾來二十年、私は足跡天下に普ねしと言つた風に、大にフサインの好遇に酬ゆるつもりで、最善の努力をしたが、時運非にして、鳥は足許から飛び出し、フサイン自ら配所の月を眺めつゝ幽明を異にしたほどの世界の桑田碧海振りであるから、微力なる私が何んで彼の輿望に報ゆることが出來やうや、ただ遙かに西方淨土に向つて、回天の大業成らず、恨を聖地に止めて、天に昇れるフサインの靈を慰めるばかりである。

フサインの二子たる前記イラク王フェイサルと、アマン王アブドラとも、明治四十三年アラビヤからの歸途、コンスタンチノープルで會見し、大に彼等から厚遇欺待されたものである。當時は之等兩王とも未だ二十歳の青年で、覇氣滿々たるものがあつたが、トルコに留學とは名のみで、當時アラビヤ全土が、未だトルコ領であり、メッカにもトルコの統監が駐劄して居た頃であるから、之等兩主は、フサインの人質と言つても好ひ境遇であつたし、年も若かつたしで、彼等も今日ほどの野心もなかつたが、アラビヤに於ける汎回教運動は、ワハビの成功に依り、分裂の狀態に入り到底其時の父フサインの如く、汎回教のリーダーとして之等兩王が父の遺志を嗣ぐことは、最早時代が許るすまいが、彼等が一日も早く其の委任統治を脱して、日本の如く、トルコの如く完全なる獨立を遂げたいと思つて居ることは勿論であらう

先年フェイサルの密使であり、フェイサルの近親であるものが日本に來り、大正天皇に拜謁してフェイサルの意志を傳へやうとしたところが、手續不備とかで、時の歐米局長で、節子姫の乃父たる松平大使當時の松平歐米局長から拜謁異議の申立てがあつたとかで、其目的を達しなかつたが、恐くは節子姫が、幾人かの王子を產まれる頃或は其王子の御成長頃には、日本も漸く今日此頃アフガンと使節を交換したやうに、フェイサル王とも使節を交換し、其使節は節子姫改め秩父妃殿下或は其王子殿下に拜謁の光榮にでも浴することが有らう、其時は其使節が、松平さんの斷はつた使節の傳言をそのまゝ申上げることであらう。

ワハビの失敗と成功とが、能く汎回教運動の成功と失敗とを物語る好い例證である

だから汎回教運動は、今でも汎回教運動以上の文明の利器を持つて居る敵には、腕で勝つても、頭で負けるので、同運動は、今や中央アフリカや、南洋蕃族間に非常の速力を以て退轉的勢力を扶植して居るのは注目に値するが、最早アラビヤや、中東近東及び極東方面では從來の如き右手に劍、左手にコーランの成功を再び見ることは出來まい、況んや歐洲に於ておやである。

何となれば汎回教運動の第一策源地たるメッカに於て、其運動が新舊二樣に分裂し一は内戰に於て敗れたるも外戰に於て英軍と共に成功したるフサインの新運動者と、他はアマンの外戰に敗れたるも、メッカの内戰に於て勝てるイブンサウドの舊運動者とは、到底氷炭相容れず、何時かは亦クーデーターを以て新運動者が舊運動者をメッカより驅逐する時があらう。此くして之等新舊運動者が、回教の死活に關するメッカの聖地に於て相爭ふ間は、最早此運動も終焉を告げたと言つても差支へなからう。何となれば、運動の首腦が二分して、手足が完全に活動出來る筈はない。況んや第一策源地ばかりでなく、第二策源地たるコンスタンチノープルも、第三策源地たるテーランも、今日亦第一策源地と同一の運命に陷れるおやである。之等汎回教運動の三大策源地が悉く分裂し、新舊二派に分れて相爭ふばかりでなく、回教としては立教以來未だ曾て見たことのない政教分離さへも、第二第三策源地に於て見るに至り、しかも之等兩策源地に於ては、回教として全く基教の前に降服したる如き近代革命すらも行はれ、汎回教運動の主體である帝王（スルタン）及び法王（ハリフ）までも追放せられ、全然基教國の立憲共和國及び、立憲帝政を見るに至つたので、いよ〳〵舊汎回教運動は、更生の待望が斷絶されたやうなものである。

今私は、之れを事實に就て說明するために、第二及第三策源地の現狀に說き及ぼすことゝする。

六、君府とテーランの現狀

先づ汎回教運動の第二策源地たるコンスタンチープル（已下君府と略す）の現狀から說き及ぼさう。

トルコの皇帝が、政教の元首であることは、オツトマン帝國中興の英主スルタンセ

リムが、西暦十三世紀エヂプトのマメルク王朝最後の法王ムタワキルの法冠を奪ひて自ら帝王（スルタン）にして法王（ハフ）を兼ぬるものであることを宣言してから、トルコの歴代帝王は政教の君長たるに至つたのである。

不幸爾來スルタンの秕政續出して英君が出でなかつたが、去る西暦一千八百七十六年我が明治九年にトルコに君臨したスルタンハミッドは、汎回教運動者から見れば、實に不世出の英主であつたが、トルコの革命黨や西歐諸國から見れば稀世の暴君と見なされて、終に去る一千九百九年四月二十七日、青年トルコ黨のために廢立せられた上、マセドニヤのサロニカ市に幽閉せられ、其後亦君府の離宮に幽閉せられて病歿したが、トルコは以來内憂外患續いて至り、内は統一進歩黨と統一自由黨のクーデーターに次ぐにクーデーターを以てし、外はバルカン戰爭頻發して、時局を收拾する英主賢臣なく、此くして歐洲大戰に際會するに至つた。

不幸亦大戰には同盟側に參加したゝめ、トルコもいよ〳〵斷末魔となつたと、誰れしもさう思ふて居たのであるが、はからずもケマルパシャの崛起に依りて、頽瀾を既倒にかへしたやうな破天荒の成功を見たので、世界を擧げて不思議の眼をみはつて、回教未だ死せず、再びケマルパシャに依りて恢興せらるべしと、期待するものが多かつた。しかし歐洲は、ケマルパシャの成功に依り再び汎回教運動の勃興せんことを恐れた。特にバルカン諸國は非常に恐れて、何んとかして其運動の勃興せぬやうな手段を講じなければならないと考へた。

幸にケマルパシャが、スルタンの勅命に反し最後の一戰を試みて成功したので、トルコは君府のスルタンの政府と、アンゴラのケマルパシャの政府との二政府が對立し、スルタンの政府が、勢力微弱となつてアンゴラの新政府が勢力を增大したので、茲にトルコの帝政を助けんとする列强と、共和政を助けんとする列强との二つに分れた。

即ち英獨等は帝政を助けんとし、米佛露は共和政を助けんとして、列强が、トルコでは歐洲大戰當時の敵味方を忘れて吳越同舟の珍現象を呈するに至つた。

私は此現象をトルコで目擊しながら此ふいふことを發見した。

赤露即第三インターナショナルが、階級鬪爭をやつて帝政を倒さうとすると、資本

主義國の米佛は之れに同情して、第三インターナショナルを助けることを發見した。之れに反して第三インターナショナルが、經濟鬪爭をやつて、資本家を倒さうとすると資本主義團は、帝政と協力して第三インターナショナルを倒さうとすることを發見した。

たとへば赤露の後援を得て成功したケマルパシヤが、土帝を倒さんとする時は、米佛は赤露と共にケマルパシヤを助けるが、若しケマルパシヤが、銀行會社や其他の資本家を壓迫すると、米佛は直ちに英伊と共に第三インターナショナル及びケマルパシヤを壓迫するを常とするを發見した。之れが佛國の米國に提唱した不戰同盟の僞らざる心底であると私は信じて居る。

だから支那やロシヤでも、やはりさうである。蔣介石が張作霖ばかりを目標として戰爭する場合は、米佛は蔣介石を助けるが、若し蔣介石が上海や漢口の資本家や財團を壓迫したらば米佛は張作霖と共に蔣介石を討つたに相違なかつたであらう。

ロシヤでもさうだ、スターリンが經濟政策を行つて、トロツキーや、ジノビエフを壓迫すれば、米佛はスターリンを助けるが、スターリンがマルキシズムを行つて、トロツキーなどと妥協すると、米佛は忽ちスターリンを失脚せしむること、トロキーの左遷に見ても之れを證することが出來る。之等の資本同盟のお手先と成つて居るものは、所謂ザイオニスト系ユダヤ人で、彼等が千百年に亘り、世界經濟革命を斷行して居る理由も、即ち此所に在る。

此くしてトルコの帝政は、米佛の資本と第三インターナショナルの武力とが共同して、ケマル政府を後援せることに依りて、最後の止めを刺されてしまつた。そして汎回教運動は、戰勝の軍閥の大多數が、之れを克復せんと努力したにもかゝはらず、ケマルパシヤが親佛派であり、しかも今頃右に劍、左にコーランの汎回教運動を、たとへトルコが戰勝の勢に乘じて、煽動したところで、其目的を達するものでなく、結句自ら墓穴を掘るに同じと知つて、ケマルパシヤが其運動を斷念したばかりでなく、スルタンを廢立して、回教法王のみを存置して、わづかに戰勝軍閥の不平をおさへて居たが、終に回教法王をも、去る大正十三年三月三日之れを廢立して、爾今汎回教運動

を行ふものは、之れを處刑するに至つたので、終に汎回教運動は兩派に分裂し、スルタン及び法王を助け更に復辟を斷行せんとするものと、全然歐化主義を信奉し、ケマルパシャを大統領として、共和政を行ひ、トルコの宿弊を排除して、歐米共和國と全く同一の政體を取らんとするものとの兩派に分れてしまつた。更に共和派は亦勞農ロシャと同一の政體を用ゐんとするものと米佛の共和制を取らんとするものと兩派に分れて暗鬪をやつて居るやうなトルコの現狀で、之れを縮圖としてものが、君府の現狀である。

故に目下トルコに於て此復辟を斷行せんとする一派は、即ち汎回教運動者であつて勞農兵を代表して居るので、第三インターナショナルと一派相通ずるものがあるが、彼等は財産權と政教一致を絶對として共産制を否認するところが、第三インターナショナルと其主義を異にして居る。だから赤露は之等の勞農兵を我物とせんとして、終に露土同盟を結ぶに至つたわけで、戰勝軍閥が、スルタン廢立後資本家に政權を掌握せられんことを恐れて、此同盟を斷行したわけである。故に目下トルコの腦みは此所にある。何となればトルコに於て共和政を樹立して一大革新を斷行せんと欲するには是非とも米佛の後援を仰がねばならぬが、佛國は後援したくも勳章とお世辭以外に何ものもないから、自然米國から後援してもらうわけだが、露土同盟を結んだのでは、後援しても溝渠の中に錢を捨てるも同じことなので、米國も二の足を踏んで居るので共和派は思ふやうに革新が出來ず、前からは復辟派に脅威せられ、後からは赤露に壓迫され、手も足も出でないので、しきりにユダヤ人の資本家を拜み倒しては、米國のユダヤ人から後援してもらうことばかり腐心して居るので、目下新トルコでユダヤ人の威張ることは太したものである。

此くメッカの總本山や、君府のスンニ派の本山が、分裂に分裂をかさね、本山の所在地で、汎回教運動や、白十字軍や、赤十字軍が、出巴と入り亂れて政權の爭奪に耽けり、今や兩本山とも、錢も有り、銃も有り、頭もある赤十字軍に蹂躪されたも同然な光景にあるので、汎回教運動は勿論、白十字軍すらも、手足の出づる所を知らず、拱手傍觀の體であるから、汎回教運動の復活は先づ絶望と見る外はない。

君府に於ける汎回教運動者は、メッカの同運動者に比し、よほど頭腦も開けて居るが、それでも赤十字軍や白十字軍から比べれば、軍資と云ひ、軍費と云ひ戰術と云ひ戰略と云ひ、よほどの見劣りがする。茲に赤十字軍と云ふのは、歐米列强の意味で、白十字軍とはバルカンの弱小國特にギリシヤアルメニヤなどを指して云ふのである。尤もケマルパシヤが、ギリシヤ軍と戰つて成功したのは、已に十字軍戰爭で充分に試錬した回教魂を以て、赤露から軍資と軍費の後援を仰ひで戰つたからである。

しかしケマルパシヤの共和派と、復辟派の回教徒とではほとんど天地の相違で、共和派が、凡て近世の戰術兵器で守を固めて居るのに、汎回教運動者は依然右に劍左に經典の戰術兵器で、肉薄して行くと云つた風で、丁度前記のワハビが、アマンの英軍の飛行機とタンクを襲擊しては、全滅すると言つたやうな同じ有樣である。アマンの英軍は多少遠慮の氣味で應戰したが、それでもワハビはしば〳〵全滅に逢ふて居る、しかし汎回教運動者の巨魁まで捕虜に成るやうなことはなく、今其巨魁はスルタン、イブン、サウドとしてメッカに君臨して居るが、トルコの同胞戰に於ける汎回教運動者は、全滅も全滅巨魁以下根こそぎに全滅してしまつた。彼等の腦力は兄は兵卒で弟は大將ほどの相違である。此弟の大將たるケマルパシヤにしても、未だ赤十字軍の參謀將校ほどの頭腦はないから、列强を相手として戰つたら未だ到底敵し得ないが、汎回教運動者の中から此かる天才を出したことは、平素私の所言を裏書したやうで非常に回教國の將來がたのもしく思はれる。なぜなれば汎回教運動者の中から、ケマルパシヤのやうな英傑が輩出したら、必ずや右に劍左にコーランの代りに、右に劍左に錢を握ぎつて、新汎回教運動を起すに相違ない可能性が充分にあるからだ。私は遠き否餘り遠き將來でなく此うした新汎回教運動が實現せらるゝであらうと信じて居る。

何となれば回教徒も人である、汎回教運動者も勿論人間である。之等の人の中からケマルパシヤのやうな人が續出して、凡ての回教國が、新トルコと同じ徑路をたどつて來たら、やがてトルコや日本の跡を追ふて進んで來ることは明白であるからだ。眼の開いた回教徒中には、ケマルパシヤのやうな立派な陸軍の軍人もあれば、又去る明治二十三年頃に、遠くトルコから、トルコ人ばかりで、萬里の波濤を乘り切つて日本

に修交條約を締結しに來て、不幸暴風雨のため紀州大島で、艦と運命を共にしたオスマンパシャのやうなエライ海軍の軍人も今日尙ほトルコに澤山居るばかりでなく、其他文治派にしろ、農工商人にしろ、なか〳〵エライ人間が澤山居て、中には歐米にすら知られて居る博士すらも居るから、若し他の回教國も現在のトルコの程度までゞも文化が進んで來て各回教國の軍閥が、獨國軍閥に依りて指導されたトルコの陸軍大學級の如き教養を有するやうに成り、文治派も亦トルコの帝大級の素養を受けるやうに成り、そしてケマルパシャの部下のやうに此軍閥と文治派が同心戮力して各回教國每にナショリナスト運動を起して各回教國の聯盟運動を起すに至らば前記の如き右手に劍、左手に錢の新汎回教運動が、勃興するであらうと歐米で心配して居るものは少くない。

私は回教を研究してから已に二十有餘年に成るが、今日初めて知つたのは、戰時征服した敵を回教に歸依せしめた其教徒や、母が異教徒であつても父が回教徒であれば其子の回教徒であることや、自分等より文化は低級であると見て居る黃色人種や其他黑色人種等が回教に歸依すれば彼等を以て回教徒と信ずるが、白人や黃色民族中でも日本人のやうに、彼等より文化の高い國民が、回教に歸依しても、何等かの政略か或は何等か野心を以て利用するものと思つて吾人の回教徒たることを斷じて信じない。殊に日本人の旅券に回教名を記入することは絕對に不可である今日、尙更ら信用しないから、日本人や白人は唯だ回教徒を戰爭に利用するか、回教徒の巾着でもしぼり上げる位に考へて居る。なるほど表面は信用して居る彼の如くに見せかけても、內心では舌を出して居るのが眞實であらう。

だから回教徒を指揮し、操縱してもなか〳〵其眞價が分らう筈がない。カイゼルも分らなかつた其一人である。單に兩眼兩耳で見聞した回教の潛勢力は、頗る偉大であるので、有事に汎回教運動を利導したら、其得る所の利益や非常に大なるものがあらうと考へるのは唯りカイゼルばかりでなくナポレオンでもさうであつたのである。

しかし一たび白十字軍を征服した彼等回教徒の心底には何れも微妙の誇りが伏在して居て、斷じて異教徒に心服はしないのである。たゞ今日彼等は刀折れ矢盡きて、赤

十字軍に降服したも同じ狀態にあるので、彼等が內亂に銃と錢を要するとか、外戰に際して錢をもうけやうとか考へる場合は、單に强者の錢と銃が欲しさに面從して居るが、決して心從はして居ないのである。

だからバルカン戰爭で、トルコが獨軍の參謀將校や、カイゼルから軍費の後援を仰ひで居たにかゝはらず、いくら戰爭しても負けてばかり居たので、カイゼル初め獨軍の將帥は、露帝の言つた通り回教魂は、もはや全く死物となつたものと思つて居た。特に歐州大戰に於て、カイゼルは一層痛切にさう思つて居た。ところが英傑ケマルバシャが崛起するや、俄然熾烈なる回教魂を發輝し意外の大功を奏するに至つたので、外人が回教徒を指揮しても斷じて其眞價を發輝しないが、彼等の尤も尊信する英傑なり、回教法王なり、スルタンなりが、一たび彼等を操縱する時は、非常の威力を發輝するに至るものであることを證明した。

之れは不思議でも何んでもない。回教國は吾人日本と同じく家族制度の國で、長幼の序が極めてやかましいので、能く父兄の命に從ふのである。殊に其父兄が回教導師であるとか、軍人であるとか、名士であるとかとなれば、一層能く服從して薪炊の勞すら決していとわない。亦戰勝を非常に光被して、殆んど絕對に神意と信じて居るので、戰勝國なり、戰勝軍なり、戰勝將軍なりを憧憬することは、日本以上である。全く彼等は文字通り大功は細瑾を顧みない風がある。だからケマルバシャが一大成功を遂げたゆえんであり、亦彼れが絕對に尊信せられ、スルタンや、法王までを追ひ出して、クーデーター又クーデーターを引きりなしに斷行しても、未だ何等の危禍にも遭遇せず、名聲いよ〳〵天下に籍甚たるわけである。

故に回教徒の英傑が、汎回教運動を利導し、そしてケマルバシャの如き名將が彼等の間に輩出するに至らば、更に新しい汎回教運動が生れ出づるであらうと、內外の識者間に豫想されて居る。

終りに第三の策源地であるペルシャのテーラン府を照介する。

此處は汎回教運動の策源地と云ふものゝ、地僻遠にして、全回教徒の三分一をしむるシャー派の本山であるので、之等汎回教運動は太して回教の盛衰に影響しないこと

は、嘗て一千八百八十年代ペルシャの志士セイドジエマルが、トルコのスルタンハミツドニ進言してスンニ及びシャー兩派の聯盟を計り、終に其目的を達せずして失敗に終はつたことがあるので、爾來亦何人もスンニ派と共に汎回教運動を行ふものはないが由來ペルシャは回教の帝政派とでもいふべき國柄で、世襲傳統を重んじ、回教法王の如きも、スンニ派の第一第二第三世の三法王を認めず、第四世の法王アリーを以て教祖の正系と認めて、斷じて前三法王を認めざることは、既記の通りであるから、その信仰の熱狂的なることは、非常なものである。彼の教祖の孫にして、第四法世アリーの實子であるフサイン及びハサンの二子が、教祖の第二世室であり、第一世法王アブバカルの娘であるアイシャ等と法統繼承問題で、前記の通りメソポタミヤのケルバラで凄絶慘絶を極めた殉教戰を行ひ、一門の肝腦を擧げて、殉教に盡くしたほどの回教史中稀れに見る血戰を十日間に亘りて、試みたので、シャー派は此ケルバラ戰を追悼するため、今尙ほ十日祭を行ひつゝあるが、其十日祭には、此ケルバラの殉教戰に因んで、彼等の熱狂的なる教徒は、ナイフを以て己れの顏を斬つて見せるやうな殺風景の祭禮を行ふのでも、如何に彼等が熱狂的であるかが想像出來やう。

去る大正十三年、私がコンスタンチノープルで、此十日祭を見物して居た際、ペルシャの首府テーランから飛報が來て、十日祭を見物して居た米國の總領事を血祭りにしたことを急報して來たので、私は格別驚きもせず、シャー派の教徒のやりさうな事として、一笑に附して居た。それは私が、去る明治四十二年メッカの聖地に巡禮に行つた時でも、死を覺悟して出かけたほどであつたからである、しかし幸に私は無事巡禮を敢行したが、其巡禮の壯烈なることゝ、熱狂的なることは、筆紙の能くつくす所にあらずである。實際此場合に異教徒でも此巡禮中に居たら、同行者の言ふ通り早速血祭りに擧げられるであらうと今でも思つて居る。之れは彼等回教徒が單に大言壯語するばかりでなく、基教徒の著書中にも、メッカ巡禮を見物に行つた基教徒が回教徒の血祭りに擧げられたことも書いてあり、其著者自らも巡禮教徒から襲擊されて負傷し、命からく逃げて歸つたことが記るされてあるから、メッカ巡禮と同じやうに尤も神聖視して居る十日祭に、アメリカの總領事が、芝居や、見世物でも見物する

氣分で、彼等の熱狂的な祭禮をカメラに收めたりなどしたら、シャー派の回教徒は、森有禮を刺せる西野文太郎流に、アメリカの總領事を一刀兩斷に斬殺する位の事は、やりさうだと私は思つたから、テーランから飛報が來ても太して驚きもしなかつたのである。

しかし驚いたのは、ペルシャの政府と歐米諸國である。否此記事を讀んだ日本人もさぞかし驚いたことであらう。如何に神聖なる宗教上の儀式だからとて、之れを寫眞に收めた位で、即座に一刀兩斷の制配をするなどは、常識じや判斷出來ないであらうだから西洋人は、回教徒をフワナチックと言つて、大に警戒するわけだ、したがつて十日祭より以上にフワナチックである汎回教運動を蛇蝎視するわけだ。フワナチックとは譯して熱狂と言ふのである。信仰に熱中した狂人の意味である。モ一つ平たく言へば宗教上の狂人と云ふ異名である。故に若し此宗教上の狂人と戰爭して敗けたら、皆此米國總領事のやうに、斬り捨て御免にせらるゝと思つて、西洋人は汎回教運動を非常に恐れていやがるわけだ。尤も西洋人の惡宣傳のやうに人間を大根切りにするわけでなく、征服された住民が「神は唯一である。マホメットは神の傳道者である」と是認し、之れを唱名すれば、昨の敵と雖も今の友となりて、毫も斬殺、掠奪、追放せらるゝことはないが、若し之れが唱名を拒絶するものあらば、汎回教運動に恭順を表せず敵と欵を通ずるものとして之れを追放するかであるが、若し追放をきかなかつたら、斬殺は免れないであらう。

論より證據、ケマルパシャが、戰勝に乘じ、小アジアに住んで居た回教徒以外のギリシャ人、アルメニャ人及びユダヤ人を悉く追放して、一人を止めなかつた際も、決して虐殺はやらなかつた、汎回教運動嫌ひのケマルパシャでさへもが、當時國防上消極的に汎回教運動をやらざるを得なかつた。ケマルパシャ一派のナショナリストは此ふ信じて居る。從來トルコがいくら戰つても勝たなかつたのは、小民族を亡ぼして、小民族に亡ぼされたやうなものであるからだと、事實さうである。之等ギリシャ人やアルメニャ人やユダヤ人等は、トルコが外戰に從事する毎に、内から敵に内應してまるで敵の犬も同樣であつた。其犬も一疋や二疋なら未だ好いが、トルコの國内到る

處何百、何千、何萬と棲息してトルコの國事及び軍事を、平戰兩時を問はず四圍の敵に通ずるのであるからたまらない。しかるに今度ケマルバシヤが、ギリシヤと交戰に從事するに方り、先づ之等の犬を悉く追放し、しかる後、純回教徒のみ團結して熱狂的に勇奮劇鬪して、最後の五分間に勝利の月桂冠を得たので、一層痛切に小民族の追放を有利なりと感じ、講和條約中にも、ギリシヤの領土に在る回教徒と、トルコの領土に在る回教徒との交換條約を結んで、小アジア内に在るギリシヤ教徒全部と、千九百十八年十月以降の居住權を有する君府のギリシヤ人全部と、小アジア内に於けるアルメニヤ人とユダヤ人の全部とを一齊にトルコの領土から追放して、國防の安定を計つたことは、トルコ建國以來何人も企及し得なかつた大鋭斷で、ケマルバシヤ嫌ひの守舊回教徒も、此一事だけはケマルバシヤを大に稱譽して居る。

日本も日清、日露兩戰までは、日本の異分子と言つても、水平社か、アイヌ位の微弱なすに足らぬ小民族が日本人中に介在して居た位のものであるから、格別心配するほどの事もなかつたが、日清戰後は臺灣の五百萬の異分子が日本臣民と成り、日露戰後は朝鮮の一千五百萬人が更に日本臣民に加はつた上に、關東州にも準日本臣民が二百萬も增へたので、之等ザツと二千萬の日本人は、トルコに於ける回教徒以外のギリシヤアルメニヤ及びユダヤの戰前總計百萬人、戰後三十萬人に相當する人間なので、トルコが、戰前百萬の異分子に苦しめられたことは、ケマルバシヤが、トルコは小民族を亡ぼして小民族のために亡ぼされたと言つた通りであるから、一擧二千萬人も異分子を加へた日本は、國體及び國防上、よほど警戒せぬと、トルコの二の舞をやること鏡にかけて見るが如しである。

由來ペルシヤ人は、トルコ人以上宗教上の熱狂的信者であるから、汎回教運動には無條件に附和雷同し、自ら挺身難に馳せるわけであるが、さすがのペルシヤ人も、時といふ大きな流れに逆行することは不可能であることに氣がついて、一千九百六年の秋、メヂリス即ち國民議會を召集したるに、該國民議會に於て、國王ヱッヂンの子孫の廢黜に關する論爭を數次繼續したるが、終に一千九百二十五年國王アフメッドミルザを廢立して、名もなき布衣の一微臣たりしアフメッドリザ汗が一たびは大統領に選擧

せられて、トルコの二の舞をやらんとしたが、更に再びペルシャ王に推擧せられ、現に其王座を占めて居るが、之れがためペルシャも新舊兩王黨に分れて、同胞の血戰を開始するに至れることは、トルコの帝政共和兩派の政爭に異ならないが、トルコと異り、依然立憲帝政を行つて居るので、兩王黨の政爭も、トルコの帝政共和の政爭ほどには劇しくはない。チョイと養子に本家を寢取られた形で、そして此養子と、本家の廢嫡された愚息と喧嘩をして居るやうなもので、お家騷動の大なるものである。一語國を擧げてお家騷動に夢中に成つて居るやうなものである。そしてそれが何れも宗教上の熱狂者で、祭禮を見物に來て、寫眞を撮つた位で、外國使臣を一刀兩斷にする位、血の氣の多い教徒であるだけ、隨分其騷動もはげしいのである。現に一度は、トルコのやうに共和國としてリザカンを大統領に祭り上げた位であるが、トルコの帝政共兩派より一層猛烈な政爭をくり反へしたので、さすがのペルシャ人も自ら驚いて、共和政を廢し、再び復辟を斷行して、リザ汗を大統領から帝王に祭り上げたので、折角帝政を倒して、共和國となり、大に意氣投合したケマルバシヤとリザ汗は、帝政復活と共に、亦又スンニ派とシャー派との不和以上の不和と成り、さすがのケマルバシヤも、ペルシャの三日大統領には開いた口がふさがらなかつた樣子で、盛んにリザ汗を罵倒したが、彼のダンマリ屋のケマルバシヤが、あれ丈け罵倒したのは、よほど癪にさわつたのであらう。

こんなわけでペルシャの汎回教運動も、内紛の發生と同時に終焉したものと見て差支へないのである。

かく汎回教運動の頭腦であり、心臟であるメッカと、コンスタチノープルと、テーランとが、ほとんど瀕死の狀態にあるので、其手足である東西回教國に於ける汎回教運動の振はないことは言ふまでもあるまい。ちやうど蛇が頭を叩かれて、尻尾ばかりピコ〳〵動かして居るやうな現狀である。

そこで千古未だ嘗て見ざる回教の法難を見るに忍びず、世界回教徒は回教法王冊立運動を興し、命旦夕に逼れる汎回教運動の復興を計らんと、大に焦慮して居る。しからば一般回教徒の期待せる如く法王の冊立に成功せば、汎回政運動は、再び往時のやう

な盛大なる運動をもり返へすであらうか、已下章を改め、本問題を解決することゝする。

七、回教法王冊立運動

回教は、今其中心を失つて居ることは、牧羊の牧夫を失へると少しも變りはない。汎回教運動の三大策源地に於ける三大法王は、何れも失脚して、汎回教運動と共に命旦夕に在るか、或は全く其止めを刺されてしまつた。

先づメッカの法王（シエリフ）はワハビに依りて廢立せられ、サイプラス島の配所に於て、病歿せることは既記の如しである。現在メッカを主宰せるワハビの領主スルタン、イブンサウドは、未だ法王を潛稱しないが、事實上法王と同じである。しかし一般回教徒はイブサウドを以て、教祖の法統を繼承せる法王とは斷じて同視もしなければ、亦斷じて彼れを法王に祭り上げることはしない。彼れは依然一個革命の風雲兒として一般回教徒から取り扱はれて居るばかりで、彼の死後は當然フサインの子であるアマン及びイラクの兩王か或は其子をメッカ法王に祭り上げることに成らう。先づそれまでは、メッカは現狀維持であらう。

次にトルコの法王（ハリフ）であるが、さすがは回教の盟主だけあつて、其威望ははるかに、メッカ及びテーランの兩法王を凌駕して居たのであつたが、終にケマルパシャのクーデーターに逢つて、一たまりもなく其千年の法座をくつがへされ、今は地中海沿岸の賭博國で知られたモナコの首府ニスに亡命して、フランス官憲の監視の下に置かれ、印度ハイデラバット王から、僅かに二千五百圓ばかりの手當をみつひでもらつて、其餘生を送つて居るが、既に六十歳にも成り、且つケマルパシャ自ら擁立して、しかる後廢立したほどの法王だけに、到底汎回教運動を復興し、己れリーダーとなつて風雲を卷き起さうなどの野心は毛頭ないから、ケマルパシャも太して心配はして居まいが、法王のために是非ケマルパシャに復讐せねばならぬと法王に同情して居るものはひとりトルコばかりでなく世界に非常に多いから、ケマルパシャも此等の回教徒に對しては毫も油斷はなるまい。

私は此法王も相識の間柄であるので、非常に同情して居るばかりでなく、丁度法王

が、ケマルパシャから廢立された時は、私はコンスタンチノープルに居て、法王廢立のクーデーターを目擊し、其渦中に卷き込まれた一人であるから、後章に委細を書き認めて、讀者の興味をそゝることにしやう。

前にも書いた通り、トルコの法王はスンニ派の法王であり、トルコの皇帝であり、全回教國の盟主であるから、單に聖地保護者であるメッカ法王に比すれば、其權威の大なることは彼此比較に成らない。しかし宗教上の權威に至つては、スンニ及びシャー兩派を問はず、いづれも教祖の直系としてメッカ法王に對して大に敬意を表して居る。特に聖地そのものに對する尊敬は回教徒としては、宗派の如何を問はず絕對であるので、其保護者たるメッカ法王に對して、スンニ及びシャー兩派の法王以上の崇敬をあつむるのは當然であらう。しかし其威力に至りては、到底兩派の法王に及ぶべくもない。特にスンニ派の法王には、其臣徒さへも餘儀なくされたことは、歐洲大戰前まで、アラビヤ全土が、トルコ領であつたことが、之れを證明して居る。

故に回教徒としては、其權威より見れば、トルコの皇帝であり法王であるスルタンが、最も大なる回教の帝王であり、法王であること勿論である。故にシャー派を除くスンニ派の回教國は、皆トルコの法王に臣從して居たことは、いづれの回教國でも皆トルコ皇帝の寫眞と自國のスルタンの寫眞を並らべて揭げて居たのでも知れる。今念のため回教國の元首の稱號を照介しやう。

メッカの法王をシエリフといふのであるが、北アフリカ一帶では、教祖の正統及び傍系に屬する一般貴族をもシエリフと云ふ所がある。

スルタン或はサルタンとは、ダッタン語の族長から出でたもので、スンニ派回教國の元首を呼ぶ尊稱であるが、トルコ皇帝のみは、一人で皇帝たり法王たりを兼ねたので、政教の君長を名實共に備へて居たが、トルコ一國では政治上の元首たる場合は、スルタンと稱し、宗教上の元首としては、ハリフと號して居たのである。しかし外國人は、一般にトルコ皇帝をスルタンとのみ稱して、ハリフと稱することは、回教徒以外には餘り知られなかつたのである。

しかるに、ケマルパシャが、クーデーターを斷行して、皇帝のみを、去る大正十二

年十月二十九日廢立して、更に戰勝軍閥操縱のため法王のみを殘存したので、初めて一般にトルコ皇帝はスルタンにしてハリフを兼ねる政敎の君長であることを知つたからひである。

ペルシャの法王をシャーと言つて、スンニ派と全く異れる稱號を有して居る。故にペルシャ派の回敎徒をシャー派と稱するのである。トルコと同しく政敎の君長たる尊號である。現國王リザ汗も勿論シャーであつて、政敎の君長であるが、政治上の地位は前シャーより大に優れるが、宗敎上としては、傳統を尊重せるシャー派だけに、前シャーの威望に劣ること勿論である。即ちペルシャ一國としては、前シャーに優るも、シャー派全宗の敎長としては、前シャーの威望に及ばざること遠しである。

其他アフガンの國王やインド王中の或る王候は、エミールと稱して居るものがあるシャーの如く政敎の君長の意味である。

亦中央アジア諸國の君長やインド王中には、成吉斯汗（ヂンギスカン）の如く、今尙ほ汗と稱するもの少からず、之れ皆エミール、シャーと同じく政敎の酋長たる意味である。尤も中亞のブハラ汗や、インドボンベイのアガ汗の如きは、インドや、アフリカ及びアラビヤ邊のスルタンより、以上の勢力を振つて居る。

尙ほアフリカの沙漠地帶には、センヌシと稱する回敎徒の一大政團ありて、アラビヤのワハビと並んで、沙漠の二大政團と稱され、佛伊兩國の植民地の大敵である。其團長であり酋長であるものをシエイク、センヌシと稱して居るが、シエイクとは、回敎の經典コーランと法典シャリアットと、マホメット言行錄スンナを解し得る回敎導師の稱號であり、回敎大學修業の學士號でもある。ひとり此アフリカ沙漠のセンヌシのみならず、回敎國到る處、導師の大部分はシエイクの所有主である。而して此シエイクは、單にセンヌシのみならず、アフリカ、アラビヤ、中央アジア、支那の僻遠の地に於ける酋長として、政敎の君長たるものが少くない。しかしシエイクの酋長としては、此アフリカのセンヌシが最大で、政敎上及び國際政局上、一敵國の觀を呈して居る。

尙ほ又アフリカ、アラビヤ、中央アジアの邊陬には、セイドと稱する酋長もあるが

此セイドは回教酋長の稱號でないことはシエイクと同じであるが、シエイクと異る所は、學位にあらずして爵位であつて回教の特權階級で、シエリフと同じく教祖の正系及び傍系或は緣類と稱するもので、メッカのシエリフの蕃屏と稱して可なるものである。酋長以外のセイドは、回教國到る處に在住し、其特權を振ひて、純眞無智なる回教徒を苦るしめつゝある。回教が今日不振の狀態に陷れるは、主としてコーラン經萬能論を唱へたるに依れども、亦之等回教の特權階級が、回教徒の覺醒に依りて、自己の地位を奪はれんことを恐れ、一にも神、二にもコーランと稱して私服をこやし、極力回教徒の之等セイド及びシエイクに盲從せんことを神意と稱して强請したからである。

ケマルパシヤのクーデーターは、帝座及び法座に對してよりは、むしろ之等特權階級の剿滅にあつたのであるから今日トルコに於ても、尤も其政革の的となつて居るものは、之等のセイド及シエイクの徒である。

私のメッカ巡禮を東導して吳れたダッタンの老志士イブラヒムも、此シエイクである。故に彼れが私に照介して吳れた回教徒の名士も、シエイクとセイドが多いので、後に書いてある通り、私が第二の故郷と思つて居るほどの君府で、ヒドイ目に遭つたのもこのシエイクとセイドに對する傍杖を食つたやうなものであつた。したがつて之等シエイクとセイドは、汎回教運動の熾烈なるアヂテートルであること勿論である。

以上回教元首中で、尤も勢力あるものは、トルコの法王であることは、右回教元首の說明に見てもスグ分ることである。だから去る大正十三年三月右法王が、ケマルパシヤに依りて、國土を逐はれてから、スンニ派の回教法王たらんとするものが、諸所に現はれて來た。其內で尤も有力なる候補者と見られる者は、エヂプト王ファッドとモロッコ王ムライ、アブドラと、イラク王フエイサルとである。そこでトルコ法王に優るとも劣らぬ尤も適當なる法王を冊立するために全回教國に檄を飛ばして、回教國の代表者をエヂプトのカイロ府に集め、衆議に依りてトルコ法王なき後のスンニ派法王の冊立を評議したが、議論百出何れも自國の元首を法王に祭り上げんと欲し、終に決定を見るに至らずして散會するに至つた。爾來今日までしば〳〵此種の會合が、諸

所に催ふされたが、今以て其決定を見るに至らないほど、法王冊立運動は、迷宮に這入つてしまつた。

私は私一個の管見があるから右の運動に參加しなかつた。亦右法王冊立會議に列席しろと、回教徒から奬められたが、右會議は一の特權階級の會議で、各回教國の元首、或は其代理者、或はセイド、及びシエイクの代理者、各回教寺院の導師の總代等であつて、吾人は單に會議を傍聽するに過ぎないので、何等發議權を有しないから、私は出席しなかつた。

しかし私の考へる所では、もはやトルコ法王ほどの權威ある回教法王を、トルコ以外の回教國で冊立することは、絶對不可能事であると信じて居る。前記の如く回教法王に擬せられたモロッコ、エヂプト、イラクの回教元首では、餘りに見劣りする、メッカ法王ノサインが存命して居たら、同人が一番適任であつたらうが、今は亡き彼れを冊立することもできない。たとへ彼れが存生して居ても、彼れが英軍と共にトルコを討つたことは、非常に一般回教徒の反感を買ひ、終に聖地の冒瀆者としてワハビ政團から追放された位であるから、法王に冊立せらるゝことは、よもやなかつたであらう。

次にモロラコの法王であるが、該法王は回教内紛時代彼のスペインに、法王朝を建てたコルドワ王朝の末裔といふので、自分こそは尤も適當なるスンニ派の法王であると、名乗り出でたものであるが、此コルドワ法王朝なるものは、第二十七世回教法王アルマンソルの治世中に元アラビヤのエーメン太守であつたものがスペインのコルドワ市に、オミヤード朝を再興し、自ら法王と潛稱し、東の方バグダッドのアバス朝と對立して、第四十三世法王カジールの代に至るまで、二百七十六年間の命脈を保てる後、西暦一千三十一年レオン侯國のために、其王朝を顛覆せられて、亦再び起つ能はざるに至つたが、とにかく前後二百有餘年間、アバッス朝の一敵國の觀があつた。しかれどもコルドワ法王朝の法王は、歴朝一度びも經典と神劍とに依る征服傳教を行はなかつた。かへつてフランク及びレオン侯國のため、常に脅威を蒙り、終に之等異教國のため、最後の止めを刺されたので、法王朝とは言へ、征服地に於て、亡命者が創建した王朝であるので、餘り一般回教徒より重きを置かれないので、したがつて其末裔

と稱する、モロッコ王が、一般回教徒から尊重されないのも當然である。

ただモロッコが、佛國の領有以前、國内亂麻の如く亂れ、南のスルタン、ムライ、アヴドルアヂスと、北のスルタン、ムライ、ハフイッドの兩兄弟王朝に分れて、血戰を行ひ、之れがために佛獨兩國もモロッコの内政に干渉するに至り、彼の有名なるアガヂール事件なるものを惹起し、危く佛獨の開戰を見るに至らんとしたが、幸に英國の仲裁で納まつたことがある。それ以來モロッコ問題はバルカン問題と同じく世人の注意をひくに至つたのである。尚ほモロッコのスペイン領には、アブドル、カードルといふ汎回教運動の巨魁が居て、久しくスペインを手こずらせて居たが、佛國のモロッコ併合後、機會あらば、佛國に對しても、其鋭鋒を向けんとして居た。しかるに佛國がトルコの内政に干渉し、ケマルパシヤを助けて、法王を逐ひ、トルコの内紛を發生した端を開いたと聞いて、去る一千九百二十四年以來佛西兩國を相手として、渺たるリフ族を率ひ、數年に亘りて、アブドルカードルが、勇奮健鬪したので、更にモロッコは、世界の耳目をひくに至り、モロッコ王も、アブドルカードルの勇名に對して大に光被せられた形にあるので、多少の誇りを以て、自らスンニ派法王の後嗣を以て任ずるに至つたのであらうと、專ら回教徒間に噂されて居る。

エヂプト王ファッドの法王冊立に就ては、全回教徒も多少期待して居たので、或は其實現を見るに至らんかと、私自身もさふ思つて居た。彼れは彼のトルコのスルタン、セリムが、エヂプトマメルク朝の法王ムッタワキルの法冠を奪つて己れトルコの皇帝にして、回教の法王を兼ね稱した當時の其ムッタワキル法王の子孫ではないが、元アルバニヤの一將校で、エヂプトの内亂平定と、メッカのワハビ政團の征討との大功に依りて、終にエヂプト王とまでなつたマホメッド、アリーの曾孫に當るので、法王たる資格はないのである。しかし現時世界の回教國で、トルコに次いでの雄邦は、北にペルシヤと、南に此エヂプトがあるばかりで、いづれも名は堂々たる獨立國である。しかしエヂプトは、スエス運河地帶とナイル河のデルタに世界最優良の綿花を產出する富國なので、古來エプヂトは、必ず世界の覇者に併呑せられ、今でも完全なる獨立國の體面を有しないので、常に英國と葛藤をたゝないやうな現狀である。

故に回教國の盟主であるトルコですらも歐洲大戰までは其財政をエヂプトの貢稅に依りて助けられて居た位で、トルコの貢國として、歐洲大戰の講和條約に於ても、此エヂプトの貢稅は問題となつて、終にトルコは敗戰のためエヂプトの獨立を認容することゝなり、スルタンセリム以來四百年間の久しきに亘りて、トルコの國庫に於ける一大財源であつたエヂプトの貢稅を手放さねばならなかつたのは、トルコに取りては非常なる苦痛であつた。

かくエヂプトが回教國中でも、現在最富强にあることは、英貨一磅とエヂプト貨一磅とでは、エヂプトの方が常に高率なのでもそれと知れやう。　エヂプトはたゞに富國ばかりでなく、其軍隊も長年月間、英佛兩國に訓練せられて居たので、全く歐式の軍隊であることは、日本と變はりはない。特に富國であるだけに回教獨立國中、其軍裝なども最も整備して居る。故に回教國中最も富强の國であるから、エヂプトその國の品位から言つたらば、今日エヂプト王ファアッドが、スンニ派の法王になつたからとて何等不思議はないので、むしろエヂプト、マメルク法王朝の再興であり、アラビヤ人の法王朝復興であるから、全回教徒も異論はないはづであるが、前記の通り、モロッコ王は、コルドワ法王朝を再興せんと欲し、イラク王は、教祖の傳統に最も近きバグダッドのアバシド朝を克復せんと欲して、回教徒も各々此三法王朝を支持することゝ彼の西暦一千年代に回教の三朝分立の狀を呈した東の方バグダッドのアバシド朝と、エヂプトのフワチマ朝と、スペインコルドワのムアウイヤ朝の三朝鼎立當時そのまゝの三派に分れ、終にエヂプト王ファアッドの法王冊立も、其實現を見ないで、今日に及んだやうな次第である。

最後のイラク王フエイサルの法王冊立に就ても、亦充分の可能性があるので、回曆三十五年ダマスカ城に依りて獨裁神聖政治を行ひ、茲に回教法王の世襲傳統の基を開いたオミヤード朝に依りて倒されたバグダッドのアバシド朝は、實に教祖の正系であるので、同じく一千三百年の正系をひけるイラク王フエイルサルが、今日トルコより法統を奪回して、己れ代はつて法王となることは、最も合理的で、之れならば、シヤー派も異存なく全回教徒の輿論の上に立ちて、法王たるも同じく、前途回教徒全般の

結束を固むる上に於ても、至極妙であると思はれたが、コーラン經萬能論を頑として捨てず、今尙ほ西歐文明を唾棄して、依然として右に劍左に經典に生きんと欲する大多數の回教徒が小異を捨てゝ大同につく雅量があらうや、此雅量があれば、回教は今日の如き悲境のドン底に非ずして、或はサラセンやオットマンの最盛時を、再び見ることが出來たであらうが、惜しむべしコーラン經に生きてコーラン經に死せる彼等の現狀を見る時、フエイサルの法王冊立も、其實現を見るべくもなかつた。

如上の次第で法王冊立運動も瓦餅に歸してしまつたので、向後當分此運動も休止するであらう。しかしトルコの前法王が、依然ニスに在りて佛國の監視の下に在る間は時々法王冊立運動の氣勢をあぐるものもあらうが、回教が今や再び內紛時代に入り、それがいづれもインターナショナルの色彩をおびて來た今日では再び全回教徒を法王中心主義の下に結束せしめて、一大汎回教運動を起さうなどは、空中に樓閣を畫くと同じであると、私は信じて居る。故にトルコの回教法王は、もはや過去の史中の人であつて、如何にシエイクや、セイドが血眼になつて騷いでも、再びトルコに於て回教法王の實現を見ることは不可能事であると、氣の毒ながら私はさう信じて居る。此く信じた其事が私をして、去る大正十三年から昭和二年に至る四年間トルコで監禁せられ幽閉せられ、投獄せられ、終に放逐せられた大なる源因であつた。

八、帝政から共和政への露土支

近世記に於て專制の色彩の最も濃厚であつた國は、なんと言つてもロシヤとトルコと支那とであつたらう。そして此三大專制國は、前後十五年間に、相次いで帝政から共和政への革命を斷行した。私は亦何んの宿世に因緣あつてか、此世界の三大革命に當面し、自ら其禍中の人となつて、壓迫もされ、監禁もされ、投獄もされ、追放もされて、不思議といづれも九死に一生を得、虎口を脫して日本へ歸つて來た、たゞ今と成つて當時を追想すれば夢のやうである。

明治四十四年十月、中支の武昌に革命の烽火があがると、先輩の大原武慶が、友人の宮都宮大將(當時參謀本部の第二部長)の諫止に耳をかさず、外國船に飛び込んで、

自分の敎へ子である黎元洪の許に飛んで行つて、顧問格で大に黎元洪を助けたものであつた。

私も北邊の靜穩に手持無沙汰であつたので、スグ大原の跡を逐ふて、武昌へ飛んで行つたが、時恰かも革軍の形勢不利の上に、內外の有象無象が、大原と黎元洪を喰ひものにして火事場泥棒をやり出したので、日本の國策上捨て置くべきでないと思つたから、斷然筆誅を要するものと信じ、敵味方亂彈下の武昌と漢口とをしば〳〵往來して事變の解決に任じた外、「革軍の秘話」として明治四十五年の春大毎に揭載した參拾萬圓事件を徹底的に解決してそれから當時上海に來て居た頭山滿から出金させて其顚末書を印刷し時の政府、兩院、全國新聞社へ向けて發送し、大原及び黎元洪の面目を立てゝ、悠々革命の天地を引きあげて來たが、之れがため時の漢口總領事松村貞雄や、第三艦隊司令官川嶋令次郎少將や、特務機關の寺西秀武大佐等は、いづれも其そば杖を食つて重謹愼やら、休職やら轉職やらを命ぜられ、以外のショックを內外に與へたことは、知る人ぞ知る天下の大革命であつた。爾來春秋十八年を過ぎた今日、當時鼻垂れ小僧の蔣介石が、今じや黎元洪張りで、三民主義の一枚看板をおし立てゝ、今でも滅滿興漢運動を、根氣能くやつて居るのだから、さすがに支那は大きい國だ。日本で十八年も戰亂がつゞいた事なら、天地草木皆碧血に彩られ、國土を擧げて腥風慘雨見るに忍びない光景を見せるであらう。時の立役者黎元洪は天津でツイ先頃死んだが大原は靑島に、私は依然內外國で放浪の生涯を送つて居るが、いつかは支那に於てもホントの基礎の鞏固なる三民主義の實現することもあらうが、それは黎元洪よりも、黃興よりも、孫逸仙よりも、張、蔣、馮、閻、の諸輩よりまだ〳〵大きな人物が支那に出でて、靡爛し切つた支那を救ひ出す時であらうが、それは第二の孔夫子の出現を見ざる限りは、だめであらう。

私は常に考へて居る。支那を救ふの道は、支那自ら標枋して居る中華民國旗の示めす通りの五大民族を、當分列强の委任統治下に置く外はあるまいと思ふて居る。支那十八省は、列强監視の下に漢人のみの聯邦政府を樹立させ、東三省及び內蒙は、日本の委任統治に任じ、外蒙及伊犁新疆は赤露の委任統治に、西藏を英國の委任統治に任

じて、彼等五大民族が、各々其獨立自由を確保すること、西歐ロシヤのフインランド、エストニヤ、リトヴイヤ、ラトヴイヤ、ポーランド、ウクライナ、チエックスラバキヤ等の如くなれば、大支那は、茲に初めて更生の道に入るものと私は信じて居る。しからざる限りは、三十年戰爭なり、百年戰爭でもやることであらう。

鈴木商店の直吉翁は、後年述懷して言ふには「鈴木商店の沒落は、自分の力で學校出の大番頭等を統制することが出來なかつたのが、破產の主因である」と。支那もその通りだ、遠世凱や、黎元洪や、孫逸仙や、黃興や、張作霖やの支那の直吉翁では學校出の孫武や、李烈均や、顧維均や、戴天仇や蔣介石や馮王祥やの大番頭を駕御することが、なんで出來るものか、此等學校出の大番頭を駕御し得るケマルパシヤや、ムツソリニや、レーニンの如き大人物を支那が生んだ時は、支那が統一せられるか、鞏固なる聯邦共和國を出現するか、或は五大獨立國に分割せらるゝかいづれかであらう。

日本も亦しかりである。今日の學校出の大番頭を駕御する西園寺や、東郷やが居なくなつた場合は、皇室と議會とが、モツト餘ほど接近して、大御心を能く議會の上に反映し、議會は特權と、金權とを葬り去りて、完全に民意を代表するやうに成らないと、洵に寒心に堪へないものがある。何となれば、倒れた露土支の三大王朝は、何れも名は主憲帝政國でありながら、しかも革命が斷行せられ、それが成功して居るのは上意下達し、下意上達する政治の要道を脫して、中間に特殊なる權略を弄した階級があつたからであらうではないか、私は少くもさう信じて居る。帝王神權政治と、特權政治と、金權政治とは、共に少數權威の政治であるから、調和すれば調和が出來るが議會政治は多數輿論の政治で、少數權威とは、氷炭相容れないものである。之れを入れやうとする調和の何ものかがあれば、それは氷と炭を容れる器位のものである。極めて冷淡のもので、如何にするも調和は出來ないものである。かゝる矛盾の政治を行ふて居る間に、無理が出でて來るのは當然である。それは議會否認の專制か、獨裁か神權か、金權かのいづれかであらう。しからずんば之等の絕對少數權威の政治を葬らんとするクーデーターの外には、何ものもないであらう。

之れ吾人が支那で、試錬した革命の第一歩である。机上の空論や、飜譯革命とは、

大分距離があるやうに感ぜられた。尤も先進國の先覺よりも、又民衆よりも支那が低級であつたからであらう。

次に私は歐洲大戰中、縱橫にロシヤの內地を奔走して居たので、支那やトルコに於けるやうに、直接革命中の人とは成らなかつたが、間接に革命に卷き込まれたとも言へやう。

支那の革命は、積極的には滅滿興漢であり、消極的には、三民主義であつた。換言すれば、五十一の多數を以て四十九の少數を討つて成功した革命である。即ち四十九の少數權威を振へる滿朝政府に對して、五十一の多數民衆たる漢人が、革命を斷行し成功したものである。

しかるにロシヤの革命は、五十一の多數を以て四十九の少數を統治して居たロマノフ王朝を、四十九の少數民族が聯盟運動を行ふて、革命を成就したものである。即ち帝政時代のロシヤは、大約八千萬の一スラヴ民族が、大約三十有餘族、總計五千萬の少數民族を統治して居たのであるが、終に之等小數民族中の優良種族にして多數を占むるフインランド、ポーランド、リトウイニヤ、エストニヤ、ラトウイヤ、ダツタンユダヤ人等が、スラヴ民族中の社會黨と內外呼應して、革命を斷行し、其目的を達したもので、私は當時日本のタガール商人に變裝して、ポーランドのユダヤ人や、ポーランド人と往來して其機微に接して居たので、此くあらんことを疾く已に知つて居たから、ロシヤの日本大使館で、青島占領の祝賀會の席上で、例を幸德にかりて、それとなく這般の消息をもらしたころが、當時の大使であつた本野さんは、何に感じてか私に皆まで言はせず、憤然として私の沈默を要求した、今左に私が或る新聞に寄稿した田付公使新任の論評の一節を再錄して御覽に入れやう。

想起す、青島祝賀會の席上、本野大使の簡單なる祝辭と、田付前大使館參事官の聖上宛祝電の草稿が捧讀せられて、大拍手裡に開宴せられんとする一刹那、宴席の末班に列して居た今此の田付七太論を草する僕は、場所も有らうに、時も有らうに、言ふべき事に事欠いて、自分の座席より一聲高く

大使閣下並に參列諸君！

と高唱し、彼の大逆幸德秋水を引き出し、我が階級思想の缺陷を指摘し、やがて官尊民卑の弊風を打破し、上下協力一致現下の大亂に善處すべきを献策せんと欲し、當時余がポーランドに潜行して偵査せるユダヤ人の過激派の陰謀と、露都大學生の秘密結社の運動とを引例して、我が官民の參考に資せんと欲し、所論逆徒の名前に言及するや否や臨場の警官ならぬ本野前大使は、突如

山岡君！、一寸待つた

と一聲高く叫んで、更に

此處は演說會場ぢやないからね、言ふべきことあらば至極簡單に願ひ度い

と、滿面朱をそゝひで茶々を入れ、頗る平かならざる色があつたので、僕も堂まごつひて、自分で自分が判らぬ龍頭蛇尾の文句をならべて、お茶をにごして引き下つたものである。此一場の活劇は、折角の宴會場へ水を流し入れたやうになつて、宴席大にしらけ渡り、折角の祝賀會もめちや〳〵となつて、當日の御主人公たる大使が、しぶり切つた顏して、御客樣御一統をさしおいて、先づ最初に自席を蹴たてゝ退席すると一同もドヤ〳〵と退散してしまつたが、水を入れたる當の本人たる此僕のみは、平氣の平左で、大使令夫人の、至極熱誠の御欵待を蒙りながら、當時大使館の豪俠兒花岡書記官を談敵として、圖々しくも最後の最後まで居のこり、いづれも大使の手前碌々箸もつけず、引さがりたる御遠慮に引きかへ、この僕は海山萬里のこの異境に在りてかくも手厚き日本料理を頂戴するなどは、これも聖代の餘澤と心得、我れのみ一人有りだけの料理を、きれいさつぱり頂戴して、我れ心地好しと舌鼓を打つて、傍ら止郎君花岡にサン〳〵油をしぼられて居ると、一旦宴席を立のいた某が、再び顏を出して余の耳下で低聲に

田付はなか〳〵話せる男だぜ、喫烟室でこんなことを言つて居たぜ、山岡の畜生奴何をしやべる所存だつたのか、一つ終りまでしやべるだけしやべらして見れば面白かつたに、惜いことをしたとさ。

傍で止郎はフ、、、ンと笑つて居た。

大使館參事官法學博士法學士とは、總身之れ官僚の畠に育つた人間の名譽なる稱號

でござる。帝國大使法學博士本野一郎は、自由民權の本場たるパリーにそだつた、官僚の化身である。論文提供の最もあやしむべき法學博士として、斯界に於ける不可解の謎である。正味の法博と、謎の法博との間に、下駄がはきちがへられる所に、此世の面黑味がある。

其昔乃父が新聞社の社長であり、自分は自由民權の本場で人となつたものが、忠誠の下駄をはきちがへて、大に官僚氣質を發揮するかと思へば、總身之れ官僚の畠に育つたものが、大に世話にくだけて、僕の如き難物中では、まだ卵のやうなものを朝飯前に駕御するから長命がしたくなる。

僕が露國を訪ふた時、彼の專制な强烈なる色彩を帶びた大帝國が、わづかに三日にして桑田碧海の大變あらんとは、當時何人も豫期して居らなかつたらうが、場所もわきまへず、大逆秋水をひきずり出した其足許から烏が飛び出したなどは、事意外とは言へ惡ひ緘をなしたことを、僕は遺憾とする云々

と云つたやうなものが、當時祝賀會の場面で、此場面にそへた狂氣じみた餘興が、一片耿々の念を有するつもりの私の志の閃光であつたのだ

こう申しては甚だおこがましい申分だが、故本野大使が

フン、ロシヤが左傾して、ロマノフ王朝が倒れたら其時は、太陽が西から出でるよ、と、セ、ラ笑つて居られた其態度と口吻に對して、當時余は甚だ遺憾を禁じなかつた一人であつた。

ナールほど大使等の御覽に成られて居た當時のロシヤは、上下わしなべてプロイセン姿の金ピカに眩惑して、誰れ一人として上を怨み、世を呪ふものがなく、千門萬戸皷腹擊壤泰平を謳歌して居る樣子に表面は見へたらうが、歐洲の大戰數年以前、ロシヤより亡命したダッタン族の老志士と、アラビヤの神聖大會に手を携へて列席して以來、西方アジアの可憐なる劣弱民族と交遊し、更に回教の僧服をまとふて、土都から堂々とオデッサへ上陸し、ロシヤの憲兵附で露都に乘り込み、旅券の一件で回教僧と見られたばかりに、ウンといぢめ拔かれて、マンヂユリアまで憲兵巡査附でロシヤの國境外に追ひ出された私だもの、ロシヤの裏面が分らなくて何んとする。まして今し

ワルソーのユダヤ人の秘密結社をのぞいて露都へ來たばかり、そしていつもロシヤの革命が、モスコーとペテルグラードの兩大學生に依りて音頭を取られるやうに、時も時歐洲大戰に際會して、之等大學生が、祖國のため挺身難に赴かずして、革命を成就しやうとして、肝膽をくだいて居たばかりでなく、戰時中社會黨代議士五名が、シベリヤに流罪に處せらるゝや否や、彼等は之等代議士に同情して、各所に檄を飛ばし、再三再四小革命を演じ、警官隊と衝突して騷擾を反覆して居た時で、當時露都の帝大に聽講に行つて居た友人竹内君が、露國大學生から配附された秘密撒文を余に見せて呉れたので、之等前後の事情を綜合し、事態既に容易ならず、禍根已に深く蟠踞せるを見て取り、露國の特權及び金權者流が、歴代の露國帝王中、最も仁政を布きたる慈父の如きニコラス二世に對してすらも、尚ほ且つ累を及ぼせるを知つたので、時あだかも青島陷落祝賀會の催行されたるを機とし、這個の消息を我が列席の官民にもらして彼等の一考を煩はしたいつもりで、愚見を披露せんと欲した所が、大使は私を以て、單に飢に泣く片々たる主義者とでも見られたかして、舌砲一彈私の緘口を強ふるに至つたが、果然大ロシヤは、吾人豫想の通り土崩瓦解するに至つた。けだし春秋の筆鋒を以てすれば、大ロシヤの官僚五百年の王朝をくつがへすとでも言ふべき場面だらう。

以上私の所感に依りて、私が如何に當時の大ロシヤから睨められて居たかを想像することができやう。恐らくロシヤで私位いぢめられたものはないと思つて居る。去る明治三十九年から大正五年に至る十餘年間、東はウラジオから、西はワルソーに至る大ロシヤを縱横にかけ廻はつて、つきとめたものは、大ロシヤの正體であつた。

故本野大使のやうに、お客樣！イヤなお客樣、油斷のならぬお客樣として、スラヴばかりのロシヤ人、しかも上流の紳士淑女から、奥齒に物のはさまつた客觀的の交際をやられたのでは十年もロシヤに居られた大使でも、大ロシヤの正體が分らなかつたのは當然で、何も大使其人の罪ではない、其親任官たる公職の罪であつたのだ。しかるに私は一介の草莽の臣である、天上天下唯我獨尊の風雲兒である。誰れに遠慮會釋もなく大ロシヤを縱横に飛び廻りて、ロシヤのあらゆる階級と人種に接し、其父母兄弟姉妹に接して寢食を共にし、全然ロシヤのすべての階級と交りて、ロシヤ人同樣に

ロシヤを見た私の主觀的觀察と、大使の客觀的觀察との間に大きな開きがあつたのは當然過ぎる位當然である。實際私の目から赤露を見ると、日本に取りて無二の親友位に外見へない。しかし若し赤露が我が國體に累を及ぼすプロパガンダをするならば、それは默して居るわけにはいかないが、さもなければ赤いロシヤは日本の好い友人である。

なんとなれば、日本と戰爭したロシヤ人は、此赤いロシヤ人でなくて、白いロシヤ人である。即ち帝政時代に赤いロシヤ人を統治して居た尤も多數のロシヤの優良人種であるスラヴである。そして統治されて居たのが、今日の赤いロシヤ人である。此赤いロシヤ人は、日本のアイヌであり、水平社であり、朝鮮人であり、臺灣人と全く同じ人である。此赤い人等が、共同戰爭線を張つて革命をやつたのが、ケーレンスキーの革命で、更に此赤い人等とスラヴの最下級の人で、長い間スラヴの上流の人から赤いロシヤ人同樣にいぢめられて居た勞農階級と共に再び革命を行つたのが、レーニンの革命で、之れが今日の赤いロシヤであるから、日本の敵でも何んでもない、敵でないどころかむしろ日本の或る意味の盟友であり、恩人でもある。それは日露戰爭中に內から革命を起して、日本と內外呼應して、日本を勝たせようと必死の努力をしたり、我が故臺灣總督であつた明石將軍の戰時中の歐洲に於けるミッシオンを後援したり、亦金子堅太郎子爵や、高橋是清翁の英米に於ける、我が戰時軍事公債の募債を、ウント助けたものは、皆此赤いロシヤ人及び其同胞であるからだ。そして之等赤いロシヤ人の大多數は、汎回教運動者であり、汎共濟運動者であり、そして亦日露戰爭中に日本と呼應して革命を起したのも之等兩運動者であり、明石さんのミッシオンを助けたものは、汎回教運動者であり、金子さんや高橋さんの募債を助けたものは、汎共濟運動者であることを知る時に、之等赤いロシヤ人を、單に敵としてばかり取り扱ふのは、チト考へものではないか。自分の都合の好い時には、サン〳〵彼等の厄介に成つて置きながら、自分の都合の惡るい時には、サン〳〵彼等を虛待することは、自分以外に國旗もなければ、國土もなければ、國民もないエゴイストの人間には、好からうが、國旗と國土と國民それ自身としては、非常の迷惑であることを考へねばならぬ

尤も赤いロシヤ人等が、單に自分の國旗や、國土や、國民ばかりでなく、他人の國旗や、國土や、國民までも、赤くしやうと努力することは、彼等の主義とは言ひ條、チト我等は迷惑に感じて居るから、之れは斷じて御免蒙らねばならないが、之等赤いロシヤ人と同じ境地に在る我が勞農階級や、水平社や、鮮臺人が、赤い運動をやつたからと言つて、赤いロシヤ人を恨む位愚劣の話はない。自分の家から出でた泥棒を、他の泥棒が教唆したと恨むのも同じである事ほどさように大馬鹿である。

白系のセミョーノフを助けたのは誰れだと逆問されたら、何んと返事する？

凡そ人類は、原始時代から今日まで、賢愚、貧富、嫉妬、猜疑、虚榮等は其長所であり弱點であるから、人類が其氣候風土に依りて、白黄黑の差別を生ずる如く、其思想にも白黄赤の差別を生ずるのは當然である。

白は單に歐米人であり、黄は單に蒙古人であり、黑は單にインド人ばかりとは限らない。日本人でも白い人もあれば、黄い人もあれば、又黑い人もある。西洋人だとて白い人ばかりとは限つてない、黄いのもあれば黑いのもある。インド人だからとて黑い人ばかりとは限らない。黄いのもあれば白いのもある。ただ西洋人は十中の六分は白で、他の四分は黄黑であるから白人といふのである。吾人蒙古人もさうだ。十中の六まで黄いから黄人種といふのである。インド人もさうである、十中の六まで黑いから黑人といふのである。

思想も亦其通りである。白人だつて皆が皆まで、帝國主義者でもなければ、資本主義者でもなく、亦共産主義者でもない。吾人日本人でもさうであれば、黑人だとてさうである。ただ一國の十中六が帝國主義者なれば、其國は帝國主義者と見られて居るのである。戰前のロシヤやドイツは其最も大なるものであつた。そして戰後は、日英伊が帝國主義者と自されて居るやうなものである。又資本主義者にしてもさうである一國の十中六が資本主義者なれば、それを資本主義國といふのである。アメリカやフランスの如きがさうである。共産主義にしてもさうである。現代ロシヤの十中の六が共産主義者であり、或は主義者でなくとも共産主義者に統治されて居るから、共産主義國といふのである。しかし之等諸國にでも十中の四即ち統治せらるゝ者には他の主

義者が交つて居るのである、即ち日英伊の帝國主義國でも、資本主義者もあれば、共産主義者もある。亦米國の資本主義國でも、帝國主義者もあれば、共産主義者もある共産主義國のロシヤでも帝國主義者もあれば、資本主義者もある。しかし之等十中の四の少數主義者が、騒いだからとて他國を恨み他國を害するには當らない。よろしく先づ自ら警め、恩威並び行ふて、國體と國防の潰裂を招かぬやうにするのが先決問題である。

だから日本の共産黨が騒いだからとて、太して驚くにも及ばなければ、赤いロシヤを恨むにも方らない。現代の日本人は赤いロシヤに共産主義を敎へてもらひ、黄い米國に資本主義を敎へてもらひ、白い英國から帝國主義を敎へてもらつて、此等の主義を覺へるほどの馬鹿ではない、近頃二十歳前後の學生の書いた我等のユートピヤを讀んで見るが好い、負ふた子供に河の深さを敎へらるゝであらう。

人類は先覺の思潮に敎化せられ、陶冶せられ、消化する性能を有すること、世界寒冒に感染するのと少しも變はら無い。しかし寒冒にかゝつて命を失ふものもあれば、亦失はないで、反て恢復後健康を增進するものさへもある。私のやうに二十五年間も海外に居て、ます〳〵强烈なる國粹黨に成るものもある。さうかと思ふと足一歩海外に出でないで私さへも驚かせるモボとモガが澤山居る。共産黨が日本に這入つて來ても、一向に心配はない、共産黨に倒された國家が世界になければ、日本などは尙ほ更倒れるものでない。ロシヤだとて共産黨のために倒れたのでない、むしろ資本主義者のために倒されたのである。支那にしてもさうであれば、トルコにしてもさうである。共産黨に倒されたものでない。皆資本主義者のために倒されたものである。

何となれば帝政國の國體の敵は、共産主義ばかりでない。資本主義も共同の敵である。帝國主義と資本主義と共産主義は、何れも全く氷炭相容れないものであるが、資本主義は亦自由主義で、己れ壓迫を蒙れば、直ちに帝國主義者と共同動作を取り或は共産主義者とも共同戰線を張るものである。之れを兩股膏藥といふのである。私はむしろ帝國の國體に於ても、此自由主義者の跋扈を恐れる。何となれば、從來世界の帝國は、此自由主義者たり、資本主義者たり、黄系社會主義者たり、兩股膏藥の變心に

依りて倒れたるものばかりで、未だ共產主義に依りて倒された國家を見ないからである。

以上私はロシヤの革命の渦中に卷き込まれて學び得たものを端的に述べて決論を急いだわけである。それは私は左にトルコの革命で、思ふ存分述べて見たいと思つたからである。

私は大正十二年正月元旦東京驛を出發して、途中諸所で講演を試みながら西下し、朝鮮、滿州を經て、大連から上海に出で、そこから歐洲行の熱田丸に便乘して、一路エヂプトに直航し、同年三月初旬エヂプトの都カイロに到着して、回教導師の許に假寓し、先づ專心經典の研究に沒頭するつもりであつたが、エヂプトの救世主とも言はれ、獨立の恩人とも言はれて、エヂプト國王ファッド以上に、エヂプト人から崇拜されたザクルルバシヤが、ちやうどヂブラルタルの流罪地から放免され、佛國を經て、エヂプトへ歸國せんとして居る直前であつたので、エヂプト人は狂喜してザクルルバシヤの歸來を待ち、さかんに英國に對して示威運動を行ひ、カイロ市で英兵とエヂプト人の衝突が到る處で行はれ、戒嚴令が布かれてあつた時なので、私も知らず〳〵、其渦中に卷き込まれ、英國の官憲から睨まれるは、エヂプト人からは、私の態度が煖へ切らず、エヂプト人に充分の後援をせぬからとて、猜疑心の深い連中から、日本は英國と同盟國であつたから私も油斷がならない、或は英國の犬かも知れないなどと、宣傳するものもありて、一犬嘘を吠へ萬犬實を傳ふるで、中には私を以て忠誠國を憂ふる英國の臣などと、けしからぬことを言ひ出す奴なども出て來て、兩者の板狹みになつてしまつた。

英國側から見れば、私は明治四十二年十一月インドからアラビヤへ渡航する際、ボンベイで英國のインド官憲に監禁せられ、同行のダッタンの老志士と共に隨分からい盧を舐めて居るから、私がエヂプトに來ても、英國びいきでないことだけは、彼等も知つて居る、しかし私個人の立場から言へば、英國及び英國官憲から壓迫も受けたが又外遊中日本の公館もなく、在留邦人も居ない國では、同盟國民といふ關係から、英國の在外官憲或は在外英人から庇護も受けたこともあるし、又エヂプト人と同じやう

に英國に反抗することは、日本も亦エヂプトやインドの如く、英國の屬領である彼の如くに見へるし、又日本が朝鮮や臺灣を領有して居ながら、私がエヂプト人と一所に反抗するのもおかしなものだといふやうな私自身氣まよひ姿であるから、私の態度と云ひ、私の口吻と云ひ、エヂプト人にも、英國人にも新自由主義とやらの態度と口吻に似て居る所があるから、兩者の板狹みに成つたのも無理はない。

嘗て私が我が國士的人物等と共にアジア義會なる結社を組織して、其後自ら義絶したり、ウラル、アルタイ聯盟の首唱者になれと勸誘されても、之れを拒絶したり、トウラン同盟に參加せよと强要されても、參加しなかつたり、アジア聯盟などと騷いでも、之れを對岸の火災視して居る私の腦裏には既記の如く言語、風俗、習慣、宗教を全く同ふした支那一國や、ロシア回教徒や、汎回教運動（パンイスラム）や、歐洲のパンスラヴや、パンラテンや、パンゼルマンや、パンサクソンや、パンチウトンや、パンアメリカすらも、其聯盟運動が、容易に實現出來ないのに、何んで、ウラルアルタイとか、トウランとか、アジア聯盟とかの言語、風俗、習慣、宗教を異にした、しかも歐米人より聯盟智識の程度と經驗の少くない之等の聯盟が成立しやうや、又彼等と共に日本人が之等の聯盟に參加することは、朝鮮や臺灣の自治を認めない限りは、不合理であることを、他人は兎も角私はさう信じて居るから、以上の相談には一切乘らず、專心パンイスラムと、ザイオニズムの言語、風俗、習慣、宗教を同ふしたアジアの二大運動の研究に前後二十有餘年沒頭して居た次第である。

こふしたやうな理由で、私のエヂプトに長く在留することは、單に祖國に忠なる所以でもなく、又比年邦人の歐洲行船客も增へ、往復ともにエヂプトの領土であるスエス運河を通航する邦船も增へるし、單にカイロ見物に過ぎないとはいふものゝ邦人船客のエヂプトに上陸する數も年々增へるし、又エヂプト綿の取引も年々增へて來て、邦人のエヂプトに在留する員數も追々增へて來ることでもあるから、自分一人のエヂプト滯在に依りて、其累を四方八方へ及ぼすに忍びないと思つたから、英埃兩國民から出て行けよがしに取り扱はれたのを、寧ろ自他のために幸福と信じて、去る大正十三年正月元日トルコのコンスタンチノープルへ、居を移すことにしたやうなわけであ

る。

實は今次私の外遊の大なる目的は、最初にトルコに行つてケマルバシャの成功を祝し、ケマルバシャに會見せんと欲したのが動機であるが、私がエヂプトに到着した頃から、ケマルバシャは戰勝の勢に乘じて、バンイスラムの一大聯盟運動を起し、歐亞の天地に於て、歐洲大戰以上の大風雲を捲き起すであらうといふ世界の豫想を全く裏切つて、ケマルバシャが內政の一大釐革を敢行して、千年の宿弊を芟除し、トルコの馳廢せる綱紀の一大肅正に、全力を傾注するに至り、先づ政敎分離を斷行して、國王（スルタン）を國外に放逐し、帝政を廢して、共和政を施すに至つたので、私がエヂプトに居た頃已に國王スルタン、バヒヂンは、アラビヤに逃げ、更にエヂプトを經て、イタリヤに亡命したりして、トルコ國內を擧げて、鼎の湧くが如く騷いで居た時なので、私もなるべく其內爭の渦中に入るまいと思つて、エヂプトで日和見をして居たので、エヂプトの滯留が長くなつたのである。

しかし時代は已にトルコの內政が革新の氣運に向つて居た時であつたことは、ケマルバシャの鋭斷に依り更にトルコは支那の二の舞をやるに相違ないといふ天下の豫想を全く裏切つて、國王以下帝政派の巨頭二百名が、バシャから、一齊に國外に放逐されたにも拘はらず、一人の起つて、ケマルバシャに對し一發の報ゆるものなきほどに、國王の尊嚴と威望が、地を拂つて居たことでも之れを證するに足るものがあらう。

私のコンスタンチノープルに到着した一千九百二十四年即ち大正十三年正月元日は國王が放逐された一千九百二十三年十月二十九日即ち我が大正十二年十月二十九日から二ヶ月も過ぎて、漸く秩序のつきかけて居た時であるが、いまだなんとなく人心が不安でいつ亦ケマルバシャ政府のクーデーターが斷行されまいものでもないといふやうな氣風が、人心を支配して居た頃であつた。又ケマルバシャ府政府も、此クーデーターを覺悟の上で、內政の革新を斷行したのであるから、いやしくもクーデーターの醱酵素であり、禍根であるものは、根こそぎに拔き取るべく努力したので、私がトルコに到着してから、三ヶ月目の同年三月三日には、回敎法王までも、追放してしまつた。元來ケマルバシャ自ら政敎分離を斷行し、國王を逐ひて、更にイタリヤのローマ

法王のやうに、宗教上の權威のみを有する法王（ハリフ）を冊立したのであるが、スルタンを逐ひてハリフを殘しては、之れ亦禍の根を殘すのも同じである、要するにスルタンを逐ふもハリフを逐ふも五十步百步であるとの國民議會の多數決に依りて、さらにハリフを追放してしまつたのである。しかも尙ほバシャに對し一發の銃火さへも報ゆるものがなかつた。否バシャ暗殺の芝居まで行ふて、帝政派の殘黨を根こそぎにしてしまつた。世に傳へられた、スミルナ陰謀事件などがそれである。本事件はバシャが國內巡遊の途、スミルナに至らんとする以前に、バシャ暗殺の爆彈をスミルの一旅館で發見したと稱して帝政派たる青年トルコ黨の殘黨を悉く絞殺した有名の事件である。

さすがに此慘酷なる政爭の犧牲に對しては、國內の汎回教運動者を非常に激昂せしめ、終に東部小アジア一帶の反亂を惹起したが、之れ亦ケマルバシャの革命軍に苦もなく一蹴せられ、國內の平定を見るに至り、爾來ケマル政府は、一層內政の一大革新を斷行し、宗教學校、トルコ赤帽、婦人解放、宗教的冠婚葬祭等の廢止或は禁止を斷行したる外、歷代トル政府の斷行せんと欲して斷行ずる能はざりし一切の宿弊を芟除し、蛤變じて雀となれる如き桑田碧海の改變振りを行ふたが、之れ皆形而下の變革振りで、形而上の改變に至りては、未だ容易に行はれて居ない、否容易に千年の宗教的迷信から脫すべくもあるまい。恐らくはケマルバシャの死後、幾百年後、初めてバシャの理想は實現せらるゝであらう。

何故なればローマは一日にして建設されたものでないことは西人が云ふまでもないケマルバシャ等の理想とするフランスやアメリカの如きも、一朝一夕で今日の如き繁榮の共和國を出現したわけでない。今日になるまでにはいづれも百年二百年の星霜を經て居る。しかもフランスの如きも名は共和國と言ひ條、未だ多分の帝政趣味が拔けないことは、世界の風雲が少しく急となると、スグ拿翁をかつぎ出したり、今更思ひ出したやうに那翁の墓參りを初めたりすると言つた風がある。彼れが勳章で劣弱民族を釣るやうな安價の政略をやつたり、何處の國よりも最大の陸軍を擁して居る間は、アメリカの民主的氣分になるまで、尙ほ數百年を要することであらう。もし彼れがアメリカと同樣の民主的氣分に滿ちて居るとすれば、彼れ自ら發起人の一人であるロカルノ

協約に疑をかけたやうな不戰條約を、先づ最初にアメリカに提言する必要はないじやないか、論より證據、アメリカがオイ來たそれとスグ同意せず別の不戰案を提唱してイヤがらせをやつたのでも分るではないか、フランスの不戰案はナポレオンの古劍を右手に、米國のユダヤ錢を左手にして、世界を我物顔にしやうといふ野心が、ホノ見へて居る。先づ第一アメリカが贊成しないのが尤もだ。之れで見ても帝政から民主的氣分になつた國と、建國以來民主的氣分の國とに、太した思潮の相違があるではないか。

アメリカにしてもさうだ、今日の如き民主的繁榮を見るまでには、前百年の間、國土を碧血に彩つて初めて建國の民主的基礎が出來たのではないか、それがリンコーンの奴隷解放戰爭だ、それから雨降つて地固まつたのが、現在のアメリカである。それをフランスや、日本の如き帝政の建國に初まつたトルコ、しかも其國民の文化程度の頗る低劣であるトルコが、之れからフランスの如く、進んではアメリカの如き民主國にならうといふことは、眞に百年河淸を待つの類であらうが、何處やらの國にも、トルコや、ロシヤや、支那の眞似をしたい人間が澤山居るが、能く考へて見るが好い、片山のやうに久しく祖國の天日を見ないので、死するまでに一度で好いから娘と一所に日本飯が食いたいなどと弱音を吹くなら、主義のために殉ぜんとするなどと大言壯語しないで、日本で誰れかのやうに憲々たる大人振つて居る方が、未だ餘ほど悧巧だ。私などは娘もなし亦一生日本飯を食はなくとも好いから自分の理想を實行して見たいと思ふて、モー二十五年も沙漠や沙漠の近邊ばかり駈けずり廻はつて居るが、まだ理想の百分の一も遂行出來ない內に、どうやら蓋棺千年の知己を求むることさへも出來なささうである。いはんや汝等滔天の理想おやと言ひたくなる。

私は今左に、私が目擊した帝政から共和政へのトルコを書いた私の秘錄を筐底から引き出して、讀者と共にトルコ及び汎回教運動の將來を卜して見やうと思ふ。

トルコ及びトルコ人とは何ぞやといふ質問に答へるだけでも、一卷の書を著作するに充分である。更に帝政から共和政へのトルコを叙述したら、よほど大部の書物とならうが、今こゝには實見したトルコ政變の要旨を書くことゝする。

私はトルコの政變には、洵に因緣の深い方である、否トルコばかりでなく、支那や

ロシヤの政變にも淺からぬ因緣があるが、特にトルコの政變には因緣が深い。といふのは私がトルコに最初に行つた一千九百九年我が明治四十二年頃は、トルコ歷朝中の一大暴君として西歐史家に依りてとりあつかはれた廢帝スルタン、アブドル、ハミツドが、青年トルコ黨の反逆に依りて廢立せられ、トルコに於て立憲帝政の實現を再び見た年である。

此一千九百九年の革命は、誰れの神謀奇策に依りて成就したか、言ふまでもなく青年トルコ黨であるが、然らば青年トルコ黨の誰れが革命の烽火を揚げたのか、それはサロニカ軍團の少佐參謀であつたエンベル、ベイ、後の土國宰相エンベルパシヤ其人であつた。しかしエンベルベイが、如何にトルコの今ナポレオンと言はれたほどの名將賢臣なりしにせよ、少佐級の下級將校で、此革命が成就したとは思へない、黑幕に何人かの頭が働いたに相違ない、其頭を吾人は革命の本塲たる佛國と睨んで居る。

實に青年トルコ黨は、秘密結社として其活動の本舞臺をスイスや、フランスに置いて居たことは、吾人は能く之れを知つて居る。現にスルタンハミツドのために暗殺された土國憲法の神樣たるミダツドパシヤや、革命後の宰相たるキヤミルパシヤや、ヒルミバシヤや、革命後の下院第一議長たりしリザパシヤ等は、いづれも革命前、スイスや、フランスに於てさかんに暗中飛躍を試みた革命の巨頭であり、助產婦である、而していづれもパリーに在りて苦節十年新聞賣子までに身を落したほどの大の親佛黨である。

しかるにエンベルパシヤと言へば、バグダツド鐵道をカイゼルに賣りつけたなどとまちがへられて居るほどの親獨派の巨魁である。トルコの內憂外患は、政治經濟の直接の破綻よりも、親英派と親露派との拮抗と、親佛派と親獨派との軋轢より生ずる間接の破綻の方が、重大なる結果を生ずることは、トルコ及びトルコ人を知るものゝ、何人も否定せぬところである。そしてトルコに於ける革命は、親英親佛を標枋する文治派と、親露親獨を暗示する軍閥とが提携して汎回教運動を起さんと欲するか、或は汎回教運動を絕たんと欲するかの何れかの塲合であつて、青年トルコ黨の革命は、前者に屬し、ケマリストの革命は、後者に屬するものである。此兩者の革命は軍閥に依

りて行はるかの如くに見へるが、實は何れも親佛派の巨頭たる文治派が、親米主義のユダヤ人から糧を仰ひで、親露親獨の軍閥を懷柔して拜み倒した結果であつて、汎回教主義の濃厚なる土國軍閥が、何んで歐化主義の色彩の極めて鮮明なる文治派と協力して、誠心誠意に革命を成就することが出來やうや。だから革命が成就した後は、いつも直ちに軍閥と文治派が、英露佛獨を背景としていがみ合ひを初めることは、今も昔もかわりはない。

私が最初にトルコに行つた明治四十二年のトルコの革命は、我が王政維新の革命に似て非なるものであつて、要するにスルタンが一たび國民に誓つた憲法を、スルタンみづから破約したので、國民が怒つて其憲法を取りかへし破約したスルタンハミッドを廢立し、彼れを幽閉した革命であるが、私が三度目にトルコに行つた去る大正十二三年の革命は、スルタンの秕政を慨して、愛國主義を標枋し、土希戰の戰勝の餘威に乘じ、スルタンを廢黜し、進んで土國六百有餘年の王朝を顚覆して、共和政への革命を斷行したもので、前者の小革命が血戰に終はれるにかゝはらず、後者の大革命が、血なき革命に終はつたのは、一にケマルパシャの隆々たる戰勝の餘威に負ふところ大なるものがあつたからである。

今吾人が述べんと欲する後者の革命が、何うして成功したのか、又其動機は何うして起つたのであらうか、亦此革命は成功を完成するか何うかは、吾人が最も興味ある問題として取扱ひつゝあるもので、私が世の批判を求め、世を警むるのも一に此點にあるのである。

私は大正十三年正月元旦トルコの舊都であるコンスタンチノープルに到着して、旅裝を解くが早いか、憲兵巡査に包圍されて、監禁同樣の憂目に遭つてしまつた。日本に於けるトルコの唯一親友を以て、自他共に認めて居た自分が、親友の家に來て、挨拶が濟むか濟まぬ内に、監禁の憂目に遭ふなどは、事情を知らぬものは、誰れしも眞實にせぬのが當然だ、しかし事情を知つたら誰れしも、尤もだと首肯するに相違ない。

西暦一千四百五十三年五月二十九日ビザンチン帝國の首都たるコンスタンチノープルのセントソフイヤ大寺院の金十字塔が陷落すると同時に、コンスタンチノープルは

今日の如くスルンブールと改稱せられ、帝業俄かに興隆し、爾來トルコ帝國は、東は支那より西はモロッコに至るまでの大版圖を領有し、覇を中外に稱するに至つたが、一千六百九十九年墺土戰の一敗地に塗れてから、トルコは落日のそれの如く衰運に向ひ、朝に一城を奪はれ、夕に一砦を失ひ、最後の歐洲大戰に於て、憐れはかなくも土國の始祖オスマン朝の當時の領土さへも失はんとしたが、一世の快傑ケマルバシャの崛起に依りて、漸く頽勢を挽廻したのであるが、此く最後の一戰に惠まれたのは、トルコの多數民族である回教族が大同團結を試み、擧國一致の奮戰を試みたからである、即ち教養ある醒めたる軍閥と、文治派が、小異を去りて大同に就き、敢然として一致團結して外敵に當つたからである。若し否らずして列强のスパイも同然たるギリシャ、アルメニヤ、ユダヤ等の如き異教徒にしてトルコの少數民族等と共に、最後の一戰を試みたりとせば、トルコはアッシリヤ、バビロニヤの轍を履んで、此一戰に永く史上から抹殺されてしまつたであらう、即ち吾人が學ばねばならぬ教訓は之れである。

或る人が國旗と國土とを愛するからと言つて、必ずしも國民全體を愛するものでない。亦國民を愛するからと言つて、國旗と國土を愛するとは言へない。たとへば日本の國旗と國土とを吾人同樣に愛せよと强要したからとて、鮮滿臺人が支那や朝鮮の國旗と國土とを愛すると同樣に愛せるものでないことは言ふまでもあるまい、又たとへば東京のものが、東京の青年團旗を愛するが如く、京都の青年團旗を愛せよと强要したからとて、同じやうに愛せるものでない。又例へば實家の家號を愛する如く、養家の家號を愛せよと强要したからとて、同樣に愛せるものでないことは勿論である。此ふした例は一身一家一村一郡一縣一國にいくらもある。トルコも亦さうである。トルコ回教族の國旗である新月旗を、トルコの基督教徒であるギリシャやアルメニヤ人等に對し、彼等の國旗である白十字旗同樣に愛せよと强要したからとて愛せるものでない。回教族亦然りである。自分の新月旗と同樣に白十字旗を愛せよと言つたとて愛せるものでない。ちやうど吾人日本人に日本國旗同樣に朝鮮の八卦旗や、支那の五色旗に敬意を表せよと言へば、文字ある者は一樣に敬意を表するかも知れないが、愛せよと强要しても、文字ある者でさへ愛することは御免蒙るに相違ないではないか。

國旗已に然り、國土亦然りであらう、より多數國民も、より少數國民も亦然りであらう、之れ即ち何れもの軍閥が、異種族に對して國防の欠陷を釀成せられんことを恐れ、高壓ならずとも、常に一種の色眼鏡を以て、注意を怠らぬのも至當であらう。最高文化に浴せる列强の軍閥にして尙ほ然り、敎養なき列强以下の軍閥が、異種族に對し全然之れを敵視し、高壓を加ふるに何んの不思議が之れあらう。

しかし國民に至りては、直ちに國旗と國土と同樣に取扱ふことのできない幾多の反證がある、之れ吾人が最も憂ふるものである。錢には親子さへない實例すらも、吾人は日夜まざ〳〵見せつけられて居るではないか、親子兄弟姉妹夫婦の間に於てさへも愛しても愛せられぬ幾多の實例があるではないか。しかるに國旗と國土を愛せよと强要しても愛されぬ異種族異敎徒間に、戀愛の極致を吾人に見せる幾多の事實があるではないか、即ち衣食住と男女の愛とには、國旗もなければ國土もなければ、國境さへもない事實に當面することが、吾人の日常であらう。

たとへば國旗と國土とを敵視する日鮮人が、衣食住を得ることに於て、互に主從の關係を結び、愛の巢を得んがために夫婦と成り、主義のために離合集散する實例に乏しくないであらう。

トルコも亦さうである。國旗と國土の愛憎から血を見ねば止まない彼等基回兩敎徒も、衣食住や、愛の巢や、主義のためには、兩者の離合集散を常として居る。要するに自分にパンを呉れるものが、自分の國旗であり、國土であり、國君であり、國主であると、彼等は勝手にさう定めて居る。之れに反してパンを與へざるものは、皆之れ敵であることに於て、異口同感であるから驚く。故に帝政の敵として、國旗と國土との敵たることを表明するトルコの少數民族も、帝政を顚覆して國民の一員たる發言權を得んがために、共和政を樹立することに於ては、多數民族以上に、國旗と國土とを愛するに至るから面白い。たとへば帝政の敵として、喜んで列强のスパイたる彼等少數民族も共和政を得んがために、或は之れを支持せんがために、好んでケマルパシャのスパイとして犬馬の勞を奉ずるからおかしいではないか。ちやうど上海の朝鮮人の假政府が我が、國旗と國土とを敵としながら、我が左傾運動や水平運動に共鳴して、

内外呼應するが如きものである。トルコ革命の成功は、即ちこゝに在る。

要するにトルコの左傾回教族と、トルコの鮮滿臺人であるアルメニヤ、ギリシヤ、ユダヤ人等が、戰勝のケマルパシヤを抱き込んで一擧クーデーターを斷行したからである。彼の大正十二年十月二十九日先づスルタンを逐ひ、次いで大正十三年三月三日自ら擁立したるカリフ(回教法王)を追ひ出したのがそれである。

換言すれば此革命は、トルコの少數民族たるキリスト教徒が、多數民族たる回教徒の不平分子と、戰勝の軍閥とを籠絡して、成功したものである。

しかし革命成就後、戰勝軍閥が横暴を逞ふするには、むしろ共和政より帝政の方が便利であることに氣がつくと共に、文治派に一杯食はされたることを知り、今更帝政の復辟もできず少々自暴自棄の風で、第三インターナショナルに乘り換へて、意の如く國政を料理しつゝあるのが、現在のトルコである。之れをケマルパシヤの獨裁政治とは云ふのである。

しかし文治派も、帝政よりは共和政を謳歌する少數民族から、共和政支持の運動費はもらへるは、ケマルパシヤさへ抱き込んで置けば、如何に軍閥が横暴を極めればとて、首の飛ぶ心配はなし、政府黨といふ甘い汁も吸へるはで、いづれも北叟笑んで居る始末である。ただ憤慨其極に達し、機會だにあらばケマルパシヤの寢首を打取り、文治派の眼に物見せんと力味返つて居るのは、帝政顚覆のために失脚せる汎回教運動者と、舊青年トルコ黨員と、彼等に好意を寄せつゝある戰勝の不平軍閥であるが、彼等はいづれもケマルパシヤの隆々たる聲望の前には、如何とも手の出しやうもなく袖手傍觀の有樣である。

其最も甚しき實例は、去る大正十三年三月三日トルコの新都たるアンゴラの國民議會が、多數決を以てトルコの皇室費を削除するや、直ちに同夜君府の警視總監、知事及び憲兵司令官に命じて、宮城より法王一族の退去を迫り、翌四日の弗曉までに法王一族を悉く宮城より退去せしめて國境のチャタルヂャ驛まで、自働車を以て送り屆けたる上、同驛に於てパリー行シンプロン急行列車に便乘せしめて、スイスに追放した る後、同日より三日間内に、トルコの皇族全部を、トルコの領土以外に悉く追放した

る一大クーデーターを斷行したるにかゝはらず、一人の起つてスルタン及びハリフの爲めに、一矢をケマルパシヤに酬ゆるものなき腑甲斐なさを見て、强弩の末魯鎬を穿たずとは、能くも言つたゞ私は感心したが、感心することのできないのは、吾人トルコの親友を以て自他共に認め、トルコの内政に關し、絶對不干涉態度を支持する者までにも、一種の色眼鏡を以て之れに望み、帝政派に知己多しとか、帝政國より來れるがゆへに復辟派に加擔するものなりとか、回教を信奉すること厚きがゆへに、汎回教運動に加盟するものなりとか、何んとかかんとか勝手の理屈をつけ、手に品を變へて壓迫を試み、若し之れにても尙ほトルコ領内に止まらば、高壓を加へて監禁するか或は投獄した上に、暗殺さへも辭せぬ血迷ひ加減には、如何に贔負眼に見ても感心のできないやり口であつた。

私の如きも共和派には、知己少く、帝政派には知己多きも、トルコの内政には絶對不干涉態度を持し、最も公明の言動を試みたるにもかゝわらず、帝政國たる日本より來れると、汎回教運動者に知己多きと、眞摯たる回教徒たるを標枋せるとに依り、入國匆々監禁同樣の取扱を受け、更に三月三日のクーデーター斷行以後は、警官を特派して監禁を試みたる上、あらゆる詐術を弄して陷穽せんことを計り、終に最後には投獄を試みたる後、體能く追放するなど、其壓迫は至れり盡せりであつた。しかも尙ほトルコ及びトルコ人の幸福を熱望して居るものは、天下廣しと雖も私一人位のものであらう、其愚劣さ加減は、トルコ人それ自身さへも呆れて居た位であるから、我が同胞の或者が、私の宋讓の仁者振りを見て、抱腹絶倒したのも無理はない。

何故私が此くも陰忍して、何等復讐の手段を講じないかは別問題として、私が之れだけ前代未聞の壓迫を蒙り、尙ほ何等齒牙にかけて居ないのには大に理由がある。それは外でもない。私は自分がかく高壓を受けながらも、ケマルパシヤの内政の大釐革には大に共鳴して、自分の理想が、ケマルパシヤに依りて實行された感がしてならなかつたからである。ただ一つ吾人がケマルパシヤに對して遺憾に堪へないと思つたことは、我が先輩がやつた王政復古の倒行逆施をやつたことで、ちやうど我が勤王黨を屠りて、佐幕黨を助け血を以て血を洗ふが如き擧に出でたことである。もしケマルパシ

ヤが帝政を支持しながら、今日の一大聾革を試みたなら、たとへ私が間違つてバシヤの刄に伏するとも、双手を擧げて、無條件にバシヤの快擧を謳歌する一人である。之れ多少吾人の言動が、バシヤの猜疑を買ふたゆえんであるのは遺憾である。

彼の汎回教運動者が、依然として泰西の文化をしりぞけ、コーラン萬能論を唱へ、右手に劍、左手に經典を把持し、駱駝に跨りて、サラセン史をくり反へし得べしと信じ最も執拗に、最も頑强に、最も熱狂的に、人種的偏見と宗教的敵意とを表明して、毫も内省に意を注がざることは、吾人も亦ケマルバシヤと同樣其愚劣を笑はんよりも、其可憐なる宗教的耽溺に萬斛の同情を注ぐ次第である。しかし到底其中毒的迷信をいやすことの出來ない以上、ケマルバシヤの如く快刀亂麻を斷つ底に出づるか、しからざれば育英事業を振興して、彼等の相續者たる第二世教徒の奮起に待つ外には、他に方策はあるまい。

我れも人なれば彼れも亦人である。若し彼の軍閥が我が軍閥の教養に追從し、彼の文治派が、我が文治派のそれの如くに進化すること、ケマルバシヤ一派の如く、しかる後此兩者が一致團結して、ナショナリスト運動を起すに至らば、いつにても其所期の目的を達するであらうことは、今次の帝政より共和政への革命ばかりであるまい。いつ如何なる場合に於ても、凡ての革命を成就し得るであらうことは、世界史が吾人に教ふる所である。

トルコの帝政から共和政への革命の動機は、スルタンの秕政續出と歐洲大戰の敗衂とであることは勿論であるが、其直接の動機は、聯合軍が君府占領中、聯合軍のために敗戰の憂目を見たるスルタンが、其敗戰を耻辱ともせず、又毫も復讐を試むるの色なく、反て君府占領中の敵將校を宮中に招ひて盛宴を張り、百官群臣が敵將及び敵將の夫人連と手を組み膝を交へて、ダンスに憂身をやつしつゝあるを見て、ケマルバシヤ以下憂國の軍閥は、奮然として蹴起し、聯合軍の傀儡たるギリシヤに對し、最後の一戰を試みて成功したるに乘じ、内政の一大改革を行はんがために新政府を樹立し、ケマルバシヤの革命以前に、何人も行はんとして行ふことの出來なかつた政教分離を斷行し、帝王にして回教法王を兼ねるスルタンを廢立し、回教法王のみを殘存したる

が、戰勝と革命に二つながら成功せる軍閥の意氣驕れるに乘じ、文治派と少數民族は此機會に於て、汎回教運動に止めを刺し、戰勝軍閥の横暴をためんと欲し、新政樹立に要する國費多端の弱點につけ込み、ケマルバシャ一人をだき込み、陽に國費負擔に任じ、陰に回教法王廢立を策畫して、終に大正十三年三月三日の血なき革命を斷行したのがそれである。かくして戰勝軍閥は、大に其戰勝の鼻柱を國費負擔の文治派と少數民族とに依りてそがれたるに憤慨し、更に第三インターナショナルと提携し、其戰勝の光輝を支持せんとやきもきしつゝある現狀である。破壞は易く建設は難い。實に革命は易く、新政樹立は容易でない。我れに於ても亦さうである、王政維新の革命は容易であつたが、明治大正の新日本の建設は、眞に容易でなかつた。トルコも今亦然りである。ケマルバシャの革命は案外容易であつたが、バシャの新政樹立は、眞に容易のものでない。

彼はギリシヤと鬪つた當時、帷幕に神謀奇策をめぐらし、攻城野戰に肝膽をくだいたよりも、今日尙ほ一層の計謀術策を新政維持のためめぐらさねばならなかつた。

彼はトルコが、如何にして獨立戰爭と革命に成功したかを、最も能く知つて居る第一人者である。一語にして言へば、戰爭と革命の成功は、一に天地人の和にあることを十分に體驗した第一人者である。そして「人の和」を以て成功の一大要素と確信したる偉大なる鬪士である。

彼は常に人に言つて居る。私は戰爭と革命にオンバラを要しなかつたと。オンバラとは十文のトルコ錢で、トルコ貨幣の最小單位である。まさか十文もいらなかつたわけでもあるまい。ずいぶん莫大な軍費を要したことであらうが、彼は少くも軍費がなければ、戰爭や革命はできないと、逡巡して居る軍人でないことだけは明白である。

戰爭に成功し、革命を成就した彼れが、トルコ共和國の最初のワシントンとして、知己を千戴の下に求めやうと、破壞から建設への道程をたどつて、不退轉の努力を試みて居ることだけは買つてやらねばなるまい。

ここでケマルバシャの小傳をかかげて、トルコの將來を卜して見やう。

彼はトルコのユダヤ市と言はれたマセドニヤのサロニカ市で生れたものである。現

在このサロニカ市は一千九百十二年のバルカン戰爭以來、トルコの所領をはなれてギリシャの所領となつて居る。彼の父はトルコの小役人で、彼れが五六歳の時に世を去り、其後は母の一手で育てられた碗白者であつたが、決して低腦の不良少年ではなかつた。

彼は小學校在學中も成績は優等で、卒業後陸軍幼年學校に入學し、在學中も學術優等であつた、特に數學の天才で、教師も舌を卷いて居たといふことである。そして彼れに時々代理をさせたので、教師は自己のムスタフワといふ名字を彼れに與へて、ムスタフワ、ケマルと呼んで居たそうである。現に今でもトルコ人中の回教徒は、敵味方を問はず、ケマルパシャを呼ぶにムスタフワと呼んで居る。

由來數學に長じて居るものは、文才がなく、文才に長じて居るものは數學が下手であるのを通例とするが、彼は不思議にも又文才に長じ、軍事に熱心であつたと同時に、寸閑さへあれば新聞雜誌を耽讀し、亦政治問題に興味を有し、學校内に於て雜誌に執筆したり、新聞紙に投書などしたりして、時事を慨する憂國の志士を氣取つて居たらしかつた。之れがため已に幼年學校時代に於て、スルタンの忌避に觸れて投獄されたので、帝政より共和政への過程は、彼れに於てはこの時代より已に出發して居たことが分る。

幼年學校から士官校へ、士官校から任官への軍歴中にも依然其初志をひるがへさず任官以後は、軍閥以外の四方の志士とも交遊し、青年トルコ黨にも加盟し、後脱黨して自らワタンと稱する秘密結社を組織し、中尉時代再び筆禍を買ひて、スルタンの忌避にふれ、シリヤに流罪となれるにもかゝわらず、刑期滿ちたる後は、再び復職して其才幹を發輝し、常に樞要なる軍職を占め、上下の信頼をあつめて居たのに見ても、彼れが到底凡物でなかつたことが知れる。

かくして彼は、バルカン戰後、ブルガリヤ公使館附武官として初めて在外勤務につひて、佛語を話したり、色酒を飲むことを覺へたり、婦人連とダンスをやることを知つてから、急に祖國の格段なる異習異風が、おかしくもなり、馬鹿々々しくも感じ出し、終に彼れが得意の絶頂にある大統領たる今日でも前人の未だ何人も成し遂げなか

つた最も危險なる風俗習慣の革命さへも、平氣の平左でやつて居るのは、此公使館附武官時代に芽生へたことは、彼の先輩たるトルコの軍閥大宰相エンベルパシャが、ドイツ大使館附武官時代に、熾烈なる祖國の革命信者となれると同巧異曲である。ただ後者にありては軍國的色彩が濃厚で、しかも汎回教運動に共鳴し、之れを逆用せんと欲したるカイゼルの治下に、ミッシオンとして駐在したるのみならず、非常の皇室中心主義者なりしゆへ、帝政から共和政への革命を斷行せず、風俗習慣の改廢を行はずして、國を擧げてドイツの軍國主義を文字通り模倣せんと欲して失敗したのであるが、ケマルパシャは、之れに反して汎回教運動の最も猛烈なる反抗者であるブルガリアに駐在し、在勤中佛語をあやつり、佛國風の駐在武官振りにいつしか感染したるばかりでなく、既に幼年學校時代より逆境に身を處し、革命の醱酵兒として佛國に師事せること少からず、彼れが耽讀したるもの多くは佛文か或は佛語の飜譯書であつて、彼れ亦佛語を好くし、ドイツ語を知らぬがために、いつしか親佛派となり、其ブルガリヤ駐在以後、一層濃厚なる親佛派となれることは、彼れをして今日あらしめた當然の歸結であらねばならぬ。殊に歐洲大戰當時土軍の最高軍事顧問たる獨國のフォンゴンデルッ將軍の忠言を悉くしりぞけ、自己の信ずる所を斷行して、悉く成功を收め、其成功を陰に佛國が援助せることに依り、一層熱烈なる親佛派となり、かくして親佛派の文治派と握手して革命を斷行し、內政の一大革新を行ひつゝあるのである。

しかし彼れと共にナショナリスト運動を起せる軍閥の大多數は、依然として親獨派である。如何にケマルパシャが剛腹比類なしと雖も、自己の手足を切りすてゝ、彼の頭一つで革命を行ひ、革新をやり、新政府を維持することができるものでない、彼れと彼れの文治派は、彼の頭腦である、彼の軍閥は彼の手足である。しかるに彼の頭は强烈なる親佛派であり、共和派である。之れに反して彼の手足は、熾烈なる親獨派であり帝政派でもある。彼の頭手足たる人間が、揃つて親佛派であるか、それとも親獨派でもあれば、彼は神佛同樣の崇拜をあつめることであらうが、彼れパシャ自身の頭は親佛派で、パシャの手足は親獨派であり、之れに反してエンベルパシャの頭は、親獨派であり、其手足は親佛派であつたところが面白い。エンベルパシャの懊惱煩悶も

こゝにあつた、ケマルパシャの苦衷焦慮も亦こゝにある。

今やケマルパシャは、土希戰と革命當時の肱股すらも之れをしりぞけ、其愛妻までも離別して、彼れが唯一のモットーとし、信仰とせる「人の和」を得んがために、彼れと同心一體の人間を手足とし、所謂上官の命令は、其事の如何を問はず、之れを遵奉すべしと、軍閥一流の金箇玉條を信奉し、文字通り獨裁政治を行ひつゝあるのである。

而して彼は自己の手足の背反せんことを恐れ。右に軍閥が最も信頼せる帝政時代の陸軍大臣にして現參謀總長たるフェウヂパシャを配し、左に文治派が最も信頼せる革命當時の勇將にして、革命後の外務大臣でありローゼン會議に於ける全權委員として能く戰勝のトルコをして九鼎大呂よりも重からしめた彼のイスメットパシャを總理大臣に任命して、己れの手足を固めつゝ新政維持のため、求めて敵國外患を作り、常に國民の視聽を對外的に轉じ、內憂を去らんと欲して、右に軍閥と共に第三インターナショナルと握手し、左に文治派と共に第一及び第二インターナショナルと提携し、一身を以て恰かも米佛露のスパイの如く、常に日英伊及び之れを背景とする白系に對抗せんと欲して仁王立ちせるもの、卽ち現トルコ共和國大統領ムスタフワケマルパシャ其人である。

しからばケマルパシャの將來は如何であらうか、パシャの將來は、やがてトルコの將來である、そして汎回教運動の將來でもある。おそらくはパシャも人間である以上、早晩死の首途へ旅立たねばなるまい。ただ其死の如何に依りて幾多の波瀾があらう。パシャの死は、暗殺か、それとも、戰死か、それとも病死かであらう。若しパシャが暗殺されたとしたら、原敬氏亡き後の政友會や、レーニン亡き後のロシヤや、袁世凱亡き後の支那と太して變りはあるまい。否それ以上又してもバルカンの風雲を卷き起して、再び歐洲大戰の導火線を作るかも知れない。

卽ちパシャの死後は、軍閥と文治派は、忽ち親獨派か親佛派か、或は親英派か親露派の旗幟をひるがへして、兄弟蕭牆の爭に耽けることであらう。若し彼れが內外戰の何れかで戰死したら、軍閥と文治派は結束して吊ひ合戰をやるであらう。若し彼れが

病死したら暗殺の場合と太して相違はあるまい。

要するに彼れに依りてスルタンを追はれ、ハリフを追はれても、一矢をだに酬ひ得ぬ彼の敵のみでは、彼れが存生中は、鶴の一聲、何事も彼のまゝにトルコは料理せらるゝものと見てまちがひなからう。彼等の敵は、あだかも鷹に狙はれた雀も同然である。意氣地のないこと甚しいが現在の敵では何事もなし得まい。今一例を擧げて彼れと彼れの敵とを評價して見てもスグ分る。

彼れバシャは、あだかも右手に劍を提げ、左手に錢を握ぎり、飛行機とタンクで飛び廻はつて居る猛鷙の如く、そして彼の敵はあだかも右手に劍、左手にコーランを捧げて、向ふ鉢卷で馬と駱駝に乘つて、チユ〳〵さへづつて居る雀の如くでは、勝負も何もあつたものでない。皇軍の鮮人に向ふより尙ほひどい。マー臺灣の生蕃より少しましの所である。せめて我が維新當時の勤王黨と佐幕黨の喧嘩位なら私も彼等の煮汁に成つても差支へないと思ふが、昭和の佐幕黨と、慶應年間の勤王黨とのいがみ合ひを見るやうなトルコの現狀じや、マー〳〵自分一人だけは絶對内政不干涉で押しとうすに限ると信じた私の態度が、反て嫉妬と猜疑とを招いたわけである。だから帝政共和兩派から、壓迫もせられ、監禁もせられ、投獄もせられ、追放もせられても、私は太して腹も立てず、格別復讐する氣にも成れず、反て私はトルコの民衆が一日も早く全回教國の民衆のリーダーとなつて、我れと同じく西歐列强の文化線上に躍進せんことを熱望してやまなかつた次第である。

要するにトルコの將來は、一たびは右手に劍、左手にコーラン經を捧げて、覇を天下に稱した汎回教運動者と又一たびは、右手に劍左手に錢を握ぎりて、トルコの天下を乘り取つた現ケマルバシャ一派のケマリストと、更に亦一たびは右手に劍、左手に米を以て、天下を左右せんと死物狂ひになつて居る共産黨とが、各々列强を背景として巴と相爭ふことだけは、不肖私とても豫言が出來るが、それ以上は神ならぬ身の知る由もなからう。

以上は私の筐底から引き出した秘錄の斷片ではあるが、トルコ革命の眞相に就ては自分が革命の渦中に投じて居ただけに、之れ以上の眞相が、有らう筈のないことだけ

は保證して置く。

おそらくはトルコばかりでなく、凡ての回教國の將來は、トルコの將來と同じ内紛を發生するであらう、否現在でも此兆候が歴然たりである。此インターナショナルの色彩は、獨りトルコや回教國の將來ばかりでなく、世界の何處に於ても白系と黄系と赤系との三系の爭鬪を免れないであらう。現に支那に於ても故張作霖の白系と、蔣介石の黄系と、馮玉祥の赤系との衝突をいくたびもくり返へして居るので、白系を倒すまでは、黄赤聯盟で押して行くであらう。そして白系が倒れたらアメリカの如く、フランスの如く、ロシヤの如く、黄系と赤系と相爭ふことは當然である。

現に我が日本でも此インターナショナルの鬪爭を除外することはできないのである。たとへば最近の議會に於て、民政黨と無産黨と合同して政友會に當れる如き、毫も此インターナショナルの鬪爭と變りはないのである。即ち政友會は白系である、民政は黄系である、無産は赤系である。そして政友は支那の張作霖其他世界の帝政派と主義主張を同ふして居る白系インターナンョナルの一員である。民政亦支那の蔣介石其他世界の民主派と其主義主張を同ふして居る黄系インターナショナルの一員である。我が無産黨の右翼は民政と全然大同小異の純黄系である。而して無産黨の左翼たる勞農黨は、純赤系にして所謂第三インターナショナルであることは、讀者承知の通りである。

故に回教國も漸次其インターナショナルの色彩を鮮明にして來ること明白である。而して汎回教運動は、各々國家主義運動に變形し來ることは、各回教國の軍閥と文治派とが、日本及びトルコの軍閥と文治派の如く覺醒したる塲合に於て、當然の結果であるが、エヂプトの如く、インドの如く、支那の如く、其國家主義を遂行せざる以前、インターナショナル運動に變改する塲合もあるであらう。

要するに列强は、歐洲大戰の慘禍にこりて、再びかゝる大戰をさくるためには、バルカン其他の弱劣國の内紛を助成するに若くなく、特に其禍亂を極東に限局せんと欲して、專ら支那に全力を傾注し、併せて大戰の慘禍を蒙らずして、非常に膨脹せる日本の勢力を減殺せんと努めつゝある現狀で、其最も之れに全力を傾注せるは英米佛の

三國特に佛米は甚しい、彼の米佛が不戰案を提唱せる眞意もこゝに在る。

そこで私は考へるに、もはや右手に劍、左手にコーランを捧げて、東は支那より西はモロッコに至る三大陸に亘りて、回教聯盟を復興し、歐米の帝國主義に當らんとすることは、南柯の夢で、未來永遠に其實現を許すまいと信じて居るが、しかし血は同盟より濃いことも永遠に眞理であるから、各回教國の獨立が完成された場合には、更に亦各回教國の聯盟を基調とする新汎回教運動の勃興することは想像に難くない。此過程に先ち東は支那から西はモロッコに至るまでの各回教國の獨立運動が、依然國家主義や、インターナショナルの形式を以てくり返へさるゝであらうが、此種の獨立運動を以て過半成功し、しかも我が日本と政治經濟上密接なる關係があるものを、ダッタンの復興とする。

私が回教研究の動機も、其研究の主眼も、研究中の對人關係も常にダッタンと交渉を離れなかつたので、最後にダッタンの復興を論じて、汎回教運動の結論とするが、左に少しくトルコの革命逸話を書いて前車の轍をふまぬ戒めとしやう。

九、トルコの革命逸話

私はトルコに行くたびに、コンスタンチノープルのスタンブール街マホメット、バシャ町のスフレットといふダッタン人のホテルに宿泊するのを常とする。私は去る明治四十三年三月メッカ巡禮の歸途には、三ケ月ばかりこのホテルに滯在して、ホテルを中心としてトルコ及びダッタンの朝野の名士と交遊したので、其當時和服にトルコ帽をかぶつて之等の名士等とともつた寫眞が、二十年後の今日でも、其ホテルの階下にかゝげられ、內外人士の注目の標的となつて居る。

次は大正三年九月歐洲大戰勃發後、間もなく再びコンスタンチノープルを訪ひ、一ケ月ばかりスフレット、ホテルに滯在してから、大戰の火元であるセルビヤに出發したので、餘り多くの名士とも往來しなかつた。

第三次は、大正十三年正月元旦、エヂプトから、トルコに三たび來遊して、此ホテルに滯在し、爾來昭和二年六月二十二日まで、滿三年六ケ月、このホテルに腰をすへて私としても、亦ホテルとしても、又日本人としても、或は亦外人としても、恐くは空前

にして絶後であらうと思はるゝ逸話をこのホテルにのこしたので、日本人としては、私ほどダッタン及びダッタン人を知るものは他に何人もないであらうと自信して居るわけである。そののこした逸話も逸話であるが、このホテルに出入した全ダッタ人は勿論、其他世界の回教徒との交友に依りて得た私の回教徒及び回教國特にダッタンの智識は少くなかつた。

私は此機會に於て、少しく私ののこした逸聞をしるし、後のコンスタンチノープルを訪ふものゝ參考としやう。

メッカ巡禮を行つた邦人として、コンスタンチノープルを訪ふたものでは、私が最初の第一人者である。そして私が初めて來た明治四十三年頃は、トルコも宗教的色彩の濃厚であつたのと、日露戰爭後間もない時分であつたのとで、日本と共同の敵たるロシヤを敗つたといふことから、トルコ人は非常に喜んで居た時なので、私はアラビヤで非常に歡迎された以上に、コンスタンチノープルでも、非常に歡迎されたものであつた、そして私も此歡迎に謝意を表するためと、未だ當時三十未滿の青年の勃々たる勇氣とで、場所もあらうにこのやかましい國際的舞臺で、英露兩語を以て、さかんに汎回教運動の宣傳演說をやつたものである。これがため一層トルコ人やダッタン人等からモテた反面に、列强から高壓を蒙り、殊に戰敗で腹を立てゝ居たロシヤを通過して、歸朝したがため、ロシヤでは特に非常な虐待を受けて歸つて來た。これ私がコンスタンチノープルにのこした第一の逸話である。

其次に來た時には、歐洲の大戰中であつたので、のこすべき逸話もなかつたが、最後の三度目に來た時には、最初に來た時のモテ方がたゝつて、前代未聞の逸話をのこすに至つた。

前記のホテルにかゝげてある私の寫眞と、私の著書である「アラビヤ縱斷記」と、「回々教の神秘的威力」との兩書の卷頭にかゝげてある回教僧の服裝でうつした私の寫眞と、私が最初にトルコに來た時に汎回教運動の宣傳をやつた生證人が、まだたくさん生存して居るのと、私が日本人であり、そして私の日本に於ける行動すらも知つて居る彼等トルコ人から見て、如何に私をひいき眼に見ても、私を以て帝政を倒した共和派

に加擔し或は加擔せなくとも好意的中立を守るものとは見へなかつたらしい。ことに私が回教の拜堂へ出入したり、回教の儀式を守つたりするので、之れを尤も蛇蝎視する共和派に私が好意を有するものとは、どうしても見へなかつたやうである。

しかし私は、他の列强の志士とやらのやうに、トルコの内政にどうしても干涉する氣にはなれなかつた。たとへ共和派が、嫉妬と猜疑の眼を以て、私を壓迫しても、私からは共和派を憎むことはどうしてもできなかつた、何となれば、前記の通り、共和派が今日やつて居る内政の大革新は、私が回教國に出入するごとに回教徒に宣傳して居る「白人の長所を取り、回教徒の短所を補へ、そして回教徒の長所を保守し、白人の短所をまねるな」と二十年來宣傳して居る其白人の長所を取り、回教徒の短所を補ふ共和派の勇氣には、私も共鳴せざるを得ないからである。

尤も共和派の色酒を飲み出したり、ダンスに憂身をやつし出したりすることには感心出來ないが、革命後は、我が鹿鳴館時代に見たやうな急激なる歐化主義の表現は、獨り日本やトルコばかりでなく、何處にでもあることで一長一短は免れないが、私は彼等に其の範を示めすがために、歐化主義を絶對に忌避する守舊派のみが止宿する右のホテルで、私は平然として外字新聞雜誌書籍を讀んだり、外國語で話したりしてさかんに彼等守舊派から嫌はれて見たり、又回教徒の最も長所とする禁烟、禁酒、斷食等の禁欲主義を實行したり、淸眞なる教徒と共に回教拜堂に出入し、祈禱禮拜を行つて、急進派にもにくまれたりして、どこまでも彼我の長所を取り、短所を捨てた純眞の行動を取つて、三年半の久しきに亘り、此のホテルで、嚴正中立を敢行したので、守舊派たる帝政派と、急進派たる共和派とから、相互に壓迫せられ、非賣買同盟せられ、監禁せられ、投獄せられ、終には追放せらるゝに至つたのは是非もないことである。

こんな生活樣式は、日本でなら學生時代に、誰れでも行つて居ることで、私なども學生時代、學校で英數物理化學等の西洋の學問をやりながら、餘暇にベースボールやボートや柔道や、擊劍をやつたり、日曜祭日や、夏冬休暇には、建長寺や、天龍寺に參禪して、默雷や蛾山に私淑して野狐禪をやつて見たりして、大に西洋の物質文明と、

東洋の精神文明とを一身に吸收して來た自分から見れば、外字新聞雜誌を讀みながら祈禱禮拜をやつたからとて、格別不思議でも何んでもないのであるが、回教徒は、外字紙を讀むものなどは、全く歐化主義者であり、祈禱禮拜などするものは、全くの寺小屋式であるから、私の回教徒に對する好意的中立や、帝政共和兩派に對する嚴正中立は、少しも好意を以て兩者から迎へられないで、反つて惡感を以て迎へられるに至つた。

ちやうど支那に居る日本人が、支那に於て支那人に好意を表しつゝ嚴正中立を守つて居るのに、張作霖一派からも、蔣介石一派からも、馮玉祥一派からも、いづれからも嫉妬と、猜疑とを以て迎へられ、到る處で壓迫せられ、監禁せられ、投獄せられ、追放せられ、最後には虐殺までされて居るのと少しも相違はない。

由來嫉妬と、猜疑と、虛榮とは、人間の最大なる弱點で、これを宗教及び文化とで矯正した人間を文明國民と言つてるが、いかに宗教と文化とにより、淘治しても、これらの弱點を人間から取り去ることは斷じてできないものである、できれば其時は不戰條約などはなくとも人類の鬪爭は全然やむであらうが、そんな時代は幾億萬年後やら、想像もつかないが、宗教と文化の力によりて、これら人間の弱點を、今日の支那やトルコや其他の弱小民族のやうに露骨に發輝しないで、列强のやうに國旗と銃と錢とに包んで或る程度までは、陰忍せしむることのできることは、今日の列强が、弱小民族に對する態度で分るではないか、これ列强が、宗教と文化とによりて淘治された程度が高いからであらう。

だから私は回教國に行つて居た時、どうして日本がかくも長速に富强となつたのかと質問される毎に、いつも私は教育！の一語に其返事をつくして居た。宗教は言ふまでもなく回教國の生命であるから、こゝに多くをいふ要はあるまい。しかし道德律としての宗教は、いづれの宗教が尤も最高であらうかは容易ならぬ問題で、こゝにその是非長短を云ふべきでないが、自家の宗教のみを以て、衆生濟度の唯一寶典と誇るものは、宗教家通有の偏狹で、一笑に附し去るべきである。

私は信ずる。バイブル、コーラン、大小乘、四書五經中から、我が國民性と國體と

に合致する部分を拔萃して、國民寶典を編纂して之れを國民に躬行實踐せしめたら偉大なる國民を作り上げることが出來ると思つて居る。こうした道德律のできない內は衆生の嫉妬と猜疑と、虛榮とを絕對とまでは行かずとも少くも仙人の程度までにすら減滅させることは、不可能事であらうと思ふが、どうであらう、識者の敎を仰ぎたいと思つて居る。

私は前記のやうな貴き經驗によりて、宗敎そのものに對して懷疑の念に囚はれるやうになつてしまつた。といふのは前記の通り、私はコンスタンチノープルで、帝政派と共和派との板狹みになつてしまつていづれからも、日本人には想像だもできない熾烈なる嫉妬と猜疑の的となつてしまつた。それは私が日本の銃と錢とでトルコの復辟を斷行する野心ありと共和派が宣傳すると、否銃と錢とを共和派に供して漁父の利を得るに相違ないと、帝政派が宣傳するやうなものであるが、古來銃と錢とに依りて、興亡治亂を反覆した、遠くはアテナ、イラニヤ、マセドニヤの都であり、近くはビザンチン、オツトマン、ケマルの都であるこのコンスタンチノープルの住民を擧げて銃と錢以外に、眼中何ものもないことは、今日の支那の南北兩京と少しも相違ないのである。

私等から見れば、弱劣民族の嫉妬、猜疑、虛榮は、衣食住の滿足を得んと欲するがために、銃と錢を得んとする外には何ものもないと極言しても好い位である。もし彼等が眞に主義のために銃と錢を得んと欲するならば、尼港・南京、濟南の如き、武裝なき市民や、婦女子に對し、かゝる天人共に容捨ならぬ殘虐行爲の行へるはずのものでないので、いかに其弱劣民族の嫉妬、猜疑、虛榮が、惡魔の化身であるかを想像することができるではないか。私のコンスタンチノープルに於ける帝政共和兩派から受けた嫉妬と猜疑と虛榮とが、もし私が日本人でない場合を考へて見ると、投獄された後は虐殺せられたであらうと思ふと悚然たらざるを得ない。なんとなれば、弱小民族双方の爭鬪史は、嫉妬と猜疑と虛榮とに始まり、高壓、投獄、虐殺に終はるからである。論より證據、世界に名高いバルカンの戰爭は、皆嫉妬、猜疑、虛榮から高壓、投獄、虐殺へと轉じたものではないか。しかも之等の爭鬪は、一はバイブルを信仰する

キリスト教徒で、他はコーランを信仰するマホメット教徒であるから吾人は宗教そのものに對して懷疑の念を懷かざるを得ないではないか、否宗教上の嫉妬と猜疑と虚榮との猛烈なることは、到底衣食住のみの嫉妬、猜疑、虚榮に比すべくもないほどであることすらも、私はコンスタンチノープルに於て經驗した唯一の日本人であつた。

何となれば私は、單なる日本人としてよりも、回教徒として回教ホテルに滯在して居たから、ギリシヤ、アルメニヤ、カトリック、ユダヤ等の舊教徒から俱不戴天の仇敵視されて、頗る猛烈のボイコットを蒙つたからである。そして回教徒其人からも、私の態度が煮へ切らないとか、外字紙を讀むとか、ケマルパシヤに好意を表するとか何んとか言つては、事毎に私に對してボイコットを試みたので、私は双方から全然ボイコット責めを食ふて、終には食住すら不自由を感じてしまつた。しかしボイコットは、弱者の强者に對する反抗の表現であると思へば、日本及び日本人の地位が、バルカンで基回兩教徒からボイコットせらるる程度までに、向上したのかと思ふと、獨り會心の笑を洩らさずに居られなかつた。

此處でバルカン方面の日本及び日本人の地位を紹介して置かう。

我が二千五百年史を飜ひて見て、何處にも外戰に負けた史實を發見することの出來ないそれだけでも、我が國民的プライドを增長させるに充分である。しかも輓近五十年日清、日露、日獨、シベリヤ、濟南等苟くも皇軍の向ふところ、未だ曾て敗戰の汚辱を蒙つたことを知らない我が日本人の頭と胸には、最早天下に恐るべき何ものもない、一國と一國との戰爭なら世界何んな國とでも決して負けないと云ふ氣宇が、何れの日本人の顔にも書いてある、其顔が排日の第一因である。常に海外にばかり出でて居る私は、成るべくさうした顔付をしないでペコ〳〵やさしくして居てさへも、前記の通り、外國人から嫉妬と猜疑とを以て迎へらるゝ有樣である、だから此國民的プライドを顔にぶら下げて、世界を我物顔に振舞つて、飛び廻つて居る日本人が、到る處でいやがられて居るのは當然である。

實際日本以外の世界の人間から見た日本人は、日本以外の世界新聞雜誌に載せてあるカリカトウルの如く、日本人は子供の如く、一寸坊の如く見へる、其子供なり一寸

坊が、大人であり、大入道である外國人を、戰爭でも、商賣でも、學問でも、何んでも手玉に取つて、吹き飛ばすやうな巨人のやうなことを平氣の平左でやるのだからたまらない、之れで嫉妬なり、猜疑なり、憎惡なりを受けねば天下七不思議の一であらう。其是非曲直は何れにあるかは、別問題として單に容貌や、風俗やを見て、其人の價値を評價することの如何に愚劣になるかは、春婦のそれと少しも變はりはないではないか。頭髪を濡れ燕の如く奇麗に分けて、金緣眼鏡をかけ、金の指輪に金鎖で、最上の和洋服をまとふて歩るいて居るから必しも紳士であり、賢人であり、聖人であるとは言はれない。否十中の八九の紳士なり、賢人なり、聖人なりは、裝身具で其人品なり、賢人なり、聖人なりを見せびらかさんと思ふものはない。腦と心のしつかりして居る紳士國民も亦さうである。實力のある國民と、ない國民とは各々顏つきがちがふ。如何に粧身具で大國民顏しても、大國民になれないのは澤山居る。大國に歸化してまで大國民顏して居る小國民が、歐米に澤山居るが、歸化しても矢張り小國民は小國民で、大國民から差別的待遇を蒙つて居る。

だから容貌の美醜を以て賢愚を律することの出來ないといふのは之れである。實際日本人は容貌と云ひ風采と言ひ、風俗と言ひ何處へ行つても猿！と言はれて馬鹿にされて差別的待遇を蒙つて居るが、其腦と心とを世界の人間と比較して見ると、人間らしい人間として、私は世界一と信じて居る。今世界では、日本の陸軍を以て世界一と認めて居る。ドイツが歐洲大戰で、敗戰の憂目を見てから、ドイツほどに軍費と軍資と戰術と戰略と士氣とを兼ね有した陸軍は他にない。試みに列强の個々に就て評價して見てもスグ判る。

先づ英國の陸軍を見やう。軍費も、軍資も、戰術も、戰略も、將校も敢て我れに劣るまいが、兵の素質が惡るい。試みに英の陸軍を一人の人間にたとへて評價して見れば頭と手とは完全だが、足は不具である。何故なればカナダ兵だの、濠洲兵だの、アフリカ兵だの、インド兵だのを足として、頭と手とで指揮しても。頭も手も足も皆揃つて居る日本兵のやうな統一を見ることはできない。日本兵が、未だ嘗て敗戰の汚辱

を蒙らない最大主因は、茲にある。之れをインドの日本兵の稱あるゴーコ兵にすら、歐洲戰場で其劣惡を笑はれて居る英兵と日本兵と比較して、其優劣何れぞやは、言ふだけ野暮である。

若しインドで、インドの回教兵も、ヒンドゥー兵も、英兵と同じ條件の下に戰爭したら、英兵は全滅であると思ふ。

米國の陸軍も亦英軍と大同小異である。否英兵より一層素質が惡るいとの評である。

佛國の陸軍は、目下世界一だと自他共に許るして居るやうだが、英のゴーコ兵と同じく、佛のアルゼリヤのズーバ兵と本國の佛兵と渡り合つたら、佛兵がやられるであらう。マルンやベルダンで花をさかした佛兵は、皆此アフリカの黑人共同のズーバ兵である。ちやうど佛兵は、頭と手とは揃つて居るが、脚は右方と左方との士氣が、其顏の通り白と黑ほどの相違があらう。

伊國陸軍にしてもさうである、佛兵と大同小異である、しかし伊兵は、我れと同じく其本國兵ばかりで、土民軍なるものが、正規兵中に編成されて居ないから、比較的統一されて居るが、到底我れに及びもあるまい。

其他獨露兩軍は、已に試驗濟であるから、何もいふことはあるまい。亦軍費の點に至つては、日本は米國にこそ一籌を讓れ、其他の列强に對して何等讓る所はない。此外軍資の點に就ても、我れは空軍に於て少しく列强に劣るやうであるけれど、其他は列强と伍して何等遜色を見ない、亦日本軍の頭腦にしても最早列强を師とする何ものもあるまい、むしろ世界から我れに師事するものが、次第に增へて來るであらう。

此く觀じ來り觀じ去ると、陸軍では、日本が第一番であるとの世界的評價は、あながちお世辭でもないやうだ。

次は之れも列强の標準とする錢であるが、日本は米國と共に歐洲大戰の戰債なき富國として、世界的第二位を占むるものであるとの解釋である。こんな貧乏國が世界の第二位などと評價せらるゝことは、忝けないが、列强中借金の一番少い國では、日本が第二位らしいやうだ、そして金貨保留の點に至つても、日本は米英佛に次ぐ國であることは事實である。だからバランスシートの上に表はれた富の程度から言つたら、

或は日本が第二位となるかも知れないが、バルカン方面では、日本は世界で第二位の富國と信じ切つて居るから有難い仕合はせだ。

しかし歐洲大戰で儲けた錢は、大地震で皆吐き出してしまつて居ると私が或るバルカンの人間に言つたら、其返事に曰く、

歐米の新聞には、日本は大地震で燒け太りの體なりと書いてある。其理由は、地震で燒失した日本の家屋は、已に何年間に債務の償還された古家ばかりで、恰かも使用しつくしたマッチ箱が燒失したと同然である。之れを歐米の家屋が地震でやられたのと同視するわけにゆかぬ。だから歐米の家屋が燒失されたと同じ考で歐米人から義捐金を受取つた日本は燒け太りと成つたことは明かである。殊に日本の經濟中心は、東京と横濱でなく、名古屋、京都、大阪の三都を結べる一線に在るので、之れ亦大地震のために何等の損害を蒙らず、反つて震災地への大供給地となつて、非常の利益を得て居るので、世界から日本へ寄附した莫大の錢も、殆んど此一線に吸收されて居るから日本は震災で燒け太りとなつたやうなものであると、眞示面に極言して居るから笑はせる。

マー日本は世界で、第二位の富國として置くのも好からうが、世界の邯鄲師が世界的聯絡を取つて$と¥のスペキユレーションをやり、調子に乘つて日米戰爭をやらせやうと思つて、有りとあらゆる陰謀をやるのは、迷惑千萬だ。此處にも人間の嫉妬が芽生へて居るから油斷はならぬ。歐洲大戰は經濟的に見ればマルクとパウンドの爭だ、結句漁父の利は$に占められて居るわけだ、其復讐に¥を向けて先づスペキユレーションを行ひ、それからヂリ〳〵支那の陸戰から、太平洋の大海戰へと發展させやうなどと夢を見て居る人間が澤山に居る。餘り悧功の考へじやないが、世界の有象無象が、さうした流行病に罹つて居ることだけは事實である。我が國民擧つて、モット眼を大きくして、世界を見ねばならぬと敎へて置く。

第三は之れも列强の標準とする海軍であるが、之れはくだ〳〵しく說明せずとも、ワシントン會議、日本の海軍は世界で第三位と相場が定まつてしまつた。

此くて日本は列强の標準を定める陸軍では第一位なり、錢では第二位なり、海軍〻